

東道ノ上(3)遺跡Ⅲ

—一般国道45号上北天間林道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

(第1分冊)

2018年3月

青森県教育委員会

東道ノ上(3)遺跡Ⅲ

—一般国道45号上北天間林道路建設事業に伴う遺跡発掘調査報告—

(第1分冊)

2018年3月

青森県教育委員会

序

青森県埋蔵文化財調査センターでは、一般国道45号上北天間林道路建設事業に伴い、平成26・27年度に東道ノ上（3）遺跡の発掘調査を行いました。

東道ノ上（3）遺跡は、平成16年度にも当センターが発掘調査を実施しており、縄文時代と古代の集落跡であることが判明しています。

古代においては平成28年度報告のとおり、砂土路川を臨む台地の縁辺に、整然と末期古墳が築造されていたことが明らかとなり、その内の1基の埋葬施設からは、蕨手刀が出土しています。

縄文時代においては、平成16年度の調査で前期中葉の捨て場が形成されていることが判明し、出土した多量の動物遺存体は、当時の環境や生業を解明する上で貴重な資料となっています。

今回の調査では、縄文時代前期後葉～中期前葉を主体とした多数の竪穴住居跡や土坑などが確認され、該期における上北地域の拠点的な集落であったことが想起されます。

これらの調査成果を今後、埋蔵文化財の調査や東北町をはじめとする周辺地域の歴史研究や文化財保護に活用していただければ幸いです。

最後になりましたが、日頃から埋蔵文化財の保護と活用に対して、ご理解とご協力を賜っている、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所、ならびに、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり、ご協力とご指導を賜りました関係各位に対し、心より御礼申し上げます。

平成30年3月

青森県埋蔵文化財調査センター

所長 田村博美

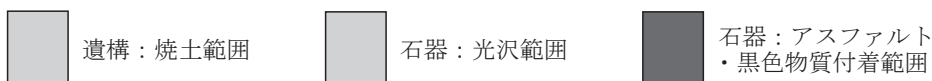
例 言・凡 例

- 1 本書は、国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所による一般国道45号上北天間林道路建設事業に伴い、青森県埋蔵文化財調査センターが平成26・27年度に発掘調査を実施した東北町東道ノ上（3）遺跡の発掘調査報告書である。調査の結果、縄文時代と古代の遺構・遺物が検出されたが、本書は縄文時代についての報告であり、古代については別途報告済みである（青森県教委2016）。本報告の対象となる発掘調査面積は、6,260㎡である。
- 2 遺跡の所在地は、以下のとおりである。
東道ノ上（3）遺跡 青森県上北郡東北町大字大浦字東道ノ上（青森県遺跡番号408040）
- 3 発掘調査及び整理・報告書作成の経費は、発掘調査を委託した国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所が負担した。
- 4 発掘調査から整理・報告書作成期間は、以下のとおりである。
発掘調査期間 平成26年4月30日～同年11月21日、平成27年4月9日～同年7月30日
整理・報告書作成期間 平成27年4月1日～平成30年3月31日
- 5 本書は、青森県埋蔵文化財調査センターが編集し、青森県教育委員会が作成した。執筆と編集は、小田川総括主幹、秦文化財保護主幹、野村文化財保護主幹、齋藤文化財保護主幹、濱松文化財保護主幹が担当した。
- 6 発掘調査から整理・報告書作成において、以下の業務は委託により実施した。

遺構測量	株式会社知立造園
空中写真撮影	株式会社シン技術コンサル
炭化材の樹種同定・動物遺存体の同定	株式会社パレオ・ラボ
出土遺物の水洗・注記の一部	株式会社イビソク仙台支店
出土土器・石器実測図作成の一部	株式会社シン技術コンサル、株式会社ラング、株式会社アルカ
出土石器トレース図作成の一部	株式会社ラング
出土遺物写真撮影	シルバーフォト、フォトショップいなみ、有限会社無限
集合写真撮影	有限会社無限
- 7 発掘調査成果の一部は、発掘調査報告会などにおいて公表されているが、これらと本書の内容が異なる場合は、正式報告として刊行する本書がこれらに優先する。
- 8 発掘調査及び整理・報告書作成における出土品・実測図・写真などは、現在、青森県埋蔵文化財調査センターが保管している。
- 9 測量原点の座標値は、世界測地系に基づく平面直角座標第X系による。
- 10 発掘調査時の遺構名は、種類を示す略号と通し番号を付けた。略号は以下のとおりである。
S I：竪穴住居跡、S K：土坑、S R：埋設土器、S N：焼土遺構、S T：捨て場、S V：溝状土坑（遺構名は、『東道ノ上（3）遺跡』（青森県教委2006）で使用された名称としており、竪穴建物跡についても竪穴住居跡としている。）
- 11 遺物については、取り上げ順にその種類を示す略号と通し番号を付けた。略号は次のとおりであ

る。P：土器・土製品 S：石器・石製品 C：炭化材

- 12 遺跡の基本土層にはローマ数字、遺構内堆積土層には算用数字を付けた。
- 13 土層断面図には、水準点を基にした海拔標高を付けた。
- 14 基本土層と遺構内堆積土層の色調表記などには、『新版標準土色帖』を使用した。
- 15 本書に掲載した地形図（遺跡位置図等）は、国土地理院発行の25,000分の1地形図「乙供」、「甲地」、「七戸」「三沢」、を複写・加筆して使用した。
- 16 挿図中の方角は、世界測地系の座標北を示している。
- 17 挿図の縮尺は、図ごとにスケールなどを付けた。
- 18 遺構実測図及び遺物実測図に使用した網掛けの指示は、以下のとおりである。



上記以外の網掛けについては、図及び文章に説明を付けた。

- 19 遺構実測図における耕作溝（トレンチャー）の表記については、平面図は実線のみとし、断面図にはTrを付けることを基本とした。
- 20 遺構実測図に使用した遺物の表記は、以下のとおりである。
●：土器 ■：石器 ○：土製品 □：石製品
- 21 観察表における（ ）内の数値は残存値、[]内の数値は推定値、－は不明である。
- 22 遺物観察表中の遺構名については、以下の略称を用いている。
第■号竪穴住居跡→■住、第■号土坑→■土、第■号埋設土器→■埋、第■号焼土遺構→■焼、ピット→ピ、第■号捨て場→■捨、第■号溝状土坑→■溝土
- 23 縄文原体は『日本先史土器の縄紋』（山内清男1979先史考古学会）を参考にし、記述はそれに従った。ただし、観察表では以下のように省略した。
結節回転文→結回、単軸絡条体第■類→単絡■、結束第■種→結束■、多軸絡条体→多絡
- 24 縄文原体の回転文の場合は種類の後に回転方向を記載した。
- 25 押圧文（撚糸圧痕・側面圧痕）の場合は種類の後に「押」を付けた。ただし、馬蹄形圧痕等特徴的な圧痕については、種類を前に付け、「R馬蹄押」のように表記を分けている。
- 26 隆帯・貼付上の文様は直後に括弧書きした。
- 27 縄文原体以外の土器文様や付着物および付着物などの部位については以下のように省略した。
竹管状工具による刺突→竹管刺突、半裁竹管状工具による刺突→半竹刺突、ヘラ状工具による刺突→ヘラ刺突、折り返し口縁→折返、付着炭化物（部位）→炭（部位）
外面全体→外、内面全体→内、口縁部内面→口内、同外面→口外、胴部外面→胴外、同内面→胴内、胴部外面の上半部→胴外上、同下半部→胴外下、胴部内面の上半部→胴内上、同下半部→胴内下
- 28 遺物写真には、遺物実測図と共通の番号を付けた。また、縮尺は原則として実測図と同様であるが、統一はしていない。
- 29 発掘調査及び整理・報告書作成に際して、下記の機関と方々からご協力とご指導を得た（敬称略・五十音順）。

東北町、東北町教育委員会、工藤 司、瀬川 滋、田中 寿明、長尾 正義、西村 広経、根岸 洋、羽生 淳子、古屋敷 則雄、村木 淳、横山 寛剛

目 次

(第1分冊—本文・図版編—)

序

例言・凡例

第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法	1
第3節 調査の経過	3
第2章 遺跡の環境	8
第1節 遺跡の地理的環境	8
第2節 遺跡の歴史的環境	9
第3章 検出遺構と出土遺物	17
第1節 後期旧石器時代の出土遺物	17
第2節 縄文時代の検出遺構と出土遺物	19
(1) 竪穴住居跡	19
(2) 土坑	182
(3) 埋設土器	342
(4) 焼土遺構	351
(5) ピット	353
(6) 捨て場	355
(7) 溝状土坑	369
第3節 遺構外出土遺物	375
第4章 自然科学分析	392
第1節 東道ノ上(3)遺跡出土炭化材の樹種同定	392
第2節 東道ノ上(3)遺跡第21号竪穴住居跡から出土した骨片	395
第5章 総括	397
引用・参考文献	398
遺構観察表	399
遺物観察表	407
報告書抄録	438

(第2分冊—写真図版編—)

口絵

遺構写真図版	1
遺物写真図版	138

挿図目次

図1	遺跡位置図	6	図36	第9号竪穴住居跡出土遺物	71
図2	路線図	7	図37	第9号竪穴住居跡出土遺物	72
図3	基本土層	8	図38	第10号竪穴住居跡	73
図4	平成16・26・27年度調査区	10	図39	第10号竪穴住居跡	74
図5	周辺遺跡位置図	11	図40	第10号竪穴住居跡出土遺物	75
図6	遺構配置図	13	図41	第10号竪穴住居跡出土遺物	76
図7	南側調査区遺構配置図	15	図42	第11号竪穴住居跡	77
図8	細石刃石核接合図	18	図43	第11号竪穴住居跡	78
図9	第1号竪穴住居跡	43	図44	第11号竪穴住居跡	79
図10	第2号竪穴住居跡	44	図45	第11号竪穴住居跡出土遺物	80
図11	第2号竪穴住居跡	45	図46	第11号竪穴住居跡出土遺物	81
図12	第2号竪穴住居跡出土遺物	46	図47	第11号竪穴住居跡出土遺物	82
図13	第3号竪穴住居跡	47	図48	第11号竪穴住居跡出土遺物	83
図14	第4号竪穴住居跡	47	図49	第12号竪穴住居跡	84
図15	第5号竪穴住居跡	48	図50	第13号竪穴住居跡	85
図16	第5号竪穴住居跡出土遺物	49	図51	第14号竪穴住居跡	85
図17	第6号竪穴住居跡	50	図52	第15号竪穴住居跡	86
図18	第7号竪穴住居跡	51	図53	第15号竪穴住居跡	87
図19	第7号竪穴住居跡	53	図54	第15号竪穴住居跡出土遺物	88
図20	第7号竪穴住居跡出土遺物	54	図55	第15号竪穴住居跡出土遺物	89
図21	第7号竪穴住居跡出土遺物	55	図56	第15号竪穴住居跡出土遺物	90
図22	第7号竪穴住居跡出土遺物	56	図57	第15号竪穴住居跡出土遺物	91
図23	第7号竪穴住居跡出土遺物	57	図58	第15号竪穴住居跡出土遺物	92
図24	第7号竪穴住居跡出土遺物	58	図59	第15号竪穴住居跡出土遺物	93
図25	第7号竪穴住居跡出土遺物	59	図60	第15号竪穴住居跡出土遺物	94
図26	第7号竪穴住居跡出土遺物	60	図61	第16号竪穴住居跡	95
図27	第7号竪穴住居跡出土遺物	61	図62	第16号竪穴住居跡	97
図28	第8号竪穴住居跡	62	図63	第16号竪穴住居跡出土遺物	98
図29	第8号竪穴住居跡	63	図64	第16号竪穴住居跡出土遺物	99
図30	第8号竪穴住居跡出土遺物	64	図65	第16号竪穴住居跡出土遺物	100
図31	第8号竪穴住居跡出土遺物	65	図66	第16号竪穴住居跡出土遺物	101
図32	第8号竪穴住居跡出土遺物	66	図67	第17号竪穴住居跡	101
図33	第8号竪穴住居跡出土遺物	67	図68	第18・19号竪穴住居跡	102
図34	第8号竪穴住居跡出土遺物	68	図69	第20・30号竪穴住居跡	103
図35	第9号竪穴住居跡	69	図70	第21号竪穴住居跡	105

图71	第21号竖穴住居迹	107	图108	第24号竖穴住居迹出土遺物	146
图72	第21号竖穴住居迹	109	图109	第25号竖穴住居迹	146
图73	第21号竖穴住居迹出土遺物	110	图110	第25号竖穴住居迹出土遺物	147
图74	第21号竖穴住居迹出土遺物	111	图111	第26号竖穴住居迹	149
图75	第21号竖穴住居迹出土遺物	112	图112	第26号竖穴住居迹	151
图76	第21号竖穴住居迹出土遺物	113	图113	第27号竖穴住居迹	151
图77	第21号竖穴住居迹出土遺物	114	图114	第28·29·45号竖穴住居迹	153
图78	第21号竖穴住居迹出土遺物	115	图115	第28号竖穴住居迹出土遺物	155
图79	第21号竖穴住居迹出土遺物	116	图116	第28·29·45号竖穴住居迹出土遺物	156
图80	第21号竖穴住居迹出土遺物	117	图117	第31号竖穴住居迹	157
图81	第21号竖穴住居迹出土遺物	118	图118	第32号竖穴住居迹	157
图82	第21号竖穴住居迹出土遺物	119	图119	第33号竖穴住居迹	157
图83	第21号竖穴住居迹出土遺物	120	图120	第34号竖穴住居迹	157
图84	第21号竖穴住居迹出土遺物	121	图121	第35号竖穴住居迹	158
图85	第21号竖穴住居迹出土遺物	122	图122	第35号竖穴住居迹出土遺物	159
图86	第21号竖穴住居迹出土遺物	123	图123	第35号竖穴住居迹出土遺物	160
图87	第21号竖穴住居迹出土遺物	124	图124	第36号竖穴住居迹	161
图88	第22·23号竖穴住居迹	125	图125	第37号竖穴住居迹	161
图89	第22号竖穴住居迹	127	图126	第37号竖穴住居迹出土遺物	162
图90	第22·23号竖穴住居迹	128	图127	第37号竖穴住居迹出土遺物	163
图91	第22号竖穴住居迹	129	图128	第38号竖穴住居迹	164
图92	第23号竖穴住居迹	130	图129	第39号竖穴住居迹	164
图93	第23号竖穴住居迹	131	图130	第39号竖穴住居迹出土遺物	165
图94	第23号竖穴住居迹	132	图131	第40·46号竖穴住居迹	165
图95	第23号竖穴住居迹	133	图132	第40·46号竖穴住居迹	166
图96	第22号竖穴住居迹出土遺物	134	图133	第40·46号竖穴住居迹出土遺物	167
图97	第22号竖穴住居迹出土遺物	135	图134	第40号竖穴住居迹出土遺物	168
图98	第22号竖穴住居迹出土遺物	136	图135	第40号竖穴住居迹出土遺物	169
图99	第22号竖穴住居迹出土遺物	137	图136	第41号竖穴住居迹	170
图100	第22号竖穴住居迹出土遺物	138	图137	第41号竖穴住居迹	171
图101	第23号竖穴住居迹出土遺物	139	图138	第41号竖穴住居迹出土遺物	172
图102	第23号竖穴住居迹出土遺物	140	图139	第41号竖穴住居迹出土遺物	173
图103	第23号竖穴住居迹出土遺物	141	图140	第42号竖穴住居迹	174
图104	第23号竖穴住居迹出土遺物	142	图141	第43号竖穴住居迹	175
图105	第23号竖穴住居迹出土遺物	143	图142	第44号竖穴住居迹	176
图106	第23号竖穴住居迹出土遺物	144	图143	第44号竖穴住居迹	177
图107	第24号竖穴住居迹	145	图144	第44号竖穴住居迹出土遺物	178

图145	第47号竖穴住居迹	179	图182	土坑	279
图146	第48号竖穴住居迹	180	图183	土坑	280
图147	第48号竖穴住居迹出土遗物	181	图184	土坑	281
图148	土坑	245	图185	土坑	282
图149	土坑	246	图186	土坑	283
图150	土坑	247	图187	土坑	284
图151	土坑	248	图188	土坑	285
图152	土坑	249	图189	土坑	286
图153	土坑	250	图190	土坑	287
图154	土坑	251	图191	土坑	288
图155	土坑	252	图192	土坑	289
图156	土坑	253	图193	土坑	290
图157	土坑	254	图194	土坑	291
图158	土坑	255	图195	土坑	292
图159	土坑	256	图196	土坑	293
图160	土坑	257	图197	土坑	294
图161	土坑	258	图198	土坑	295
图162	土坑	259	图199	土坑出土遗物	296
图163	土坑	260	图200	土坑出土遗物	297
图164	土坑	261	图201	土坑出土遗物	298
图165	土坑	262	图202	土坑出土遗物	299
图166	土坑	263	图203	土坑出土遗物	300
图167	土坑	264	图204	土坑出土遗物	301
图168	土坑	265	图205	土坑出土遗物	302
图169	土坑	266	图206	土坑出土遗物	303
图170	土坑	267	图207	土坑出土遗物	304
图171	土坑	268	图208	土坑出土遗物	305
图172	土坑	269	图209	土坑出土遗物	306
图173	土坑	270	图210	土坑出土遗物	307
图174	土坑	271	图211	土坑出土遗物	308
图175	土坑	272	图212	土坑出土遗物	309
图176	土坑	273	图213	土坑出土遗物	310
图177	土坑	274	图214	土坑出土遗物	311
图178	土坑	275	图215	土坑出土遗物	312
图179	土坑	276	图216	土坑出土遗物	313
图180	土坑	277	图217	土坑出土遗物	314
图181	土坑	278	图218	土坑出土遗物	315

図219	土坑出土遺物	316	図256	第1号捨て場出土遺物	360
図220	土坑出土遺物	317	図257	第1号捨て場出土遺物	361
図221	土坑出土遺物	318	図258	第1号捨て場出土遺物	362
図222	土坑出土遺物	319	図259	第1号捨て場出土遺物	363
図223	土坑出土遺物	320	図260	第1号捨て場出土遺物	364
図224	土坑出土遺物	321	図261	第1号捨て場出土遺物	365
図225	土坑出土遺物	322	図262	第1号捨て場出土遺物	366
図226	土坑出土遺物	323	図263	第1号捨て場出土遺物	367
図227	土坑出土遺物	324	図264	第1号捨て場出土遺物	368
図228	土坑出土遺物	325	図265	溝状土坑	372
図229	土坑出土遺物	326	図266	溝状土坑	373
図230	土坑出土遺物	327	図267	溝状土坑	374
図231	土坑出土遺物	328	図268	遺構外出土遺物	376
図232	土坑出土遺物	329	図269	遺構外出土遺物	377
図233	土坑出土遺物	330	図270	遺構外出土遺物	378
図234	土坑出土遺物	331	図271	遺構外出土遺物	381
図235	土坑出土遺物	332	図272	遺構外出土遺物	382
図236	土坑出土遺物	333	図273	遺構外出土遺物	383
図237	土坑出土遺物	334	図274	遺構外出土遺物	384
図238	土坑出土遺物	335	図275	遺構外出土遺物	385
図239	土坑出土遺物	336	図276	遺構外出土遺物	386
図240	土坑出土遺物	337	図277	遺構外出土遺物	387
図241	土坑出土遺物	338	図278	遺構外出土遺物	388
図242	土坑出土遺物	339	図279	遺構外出土遺物	389
図243	土坑出土遺物	340	図280	遺構外出土遺物	390
図244	土坑出土遺物	341	図281	遺構外出土遺物	391
図245	埋設土器	346			
図246	埋設土器	347			
図247	埋設土器出土遺物	348			
図248	埋設土器出土遺物	349			
図249	埋設土器出土遺物	350			
図250	焼土遺構	354			
図251	ピット出土遺物	355			
図252	第1号捨て場土器出土状況	356			
図253	第1号捨て場出土遺物	357			
図254	第1号捨て場出土遺物	358			
図255	第1号捨て場出土遺物	359			

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

上北天間林道路は、一般国道45号の交通緩和・事故減少を図るとともに、地域間の交流と連携の活性化を目的とした道路建設事業であり、東北町大字大浦から七戸町字附田向に至る延長7.8kmの自動車専用道路である。

当該事業予定地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについては、平成21年度に国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所（以下、青森河川国道事務所）から、青森県教育庁文化財保護課（以下、文化財保護課）に照会があり、平成22年度に文化財保護課により事業予定地内の現地踏査が実施された。平成23～25年度には事業予定地内で試掘調査が行われ、試掘調査の結果、本遺跡範囲内の予定地については、本発掘調査が必要と判断された。

平成26年4月30日から同年7月25日までの予定で発掘調査を実施したが、多数の遺構と遺物が検出されたため、同年10月に青森河川国道事務所、文化財保護課、青森県埋蔵文化財調査センターで協議して、同年11月21日まで調査期間を延長したほか、次年度も継続して発掘調査をすることとし、平成27年4月9日～7月30日まで発掘調査を実施した。

なお、土木工事等のための発掘に関する通知は、青森河川国道事務所長から、平成26年2月12日付で提出され、これを受けて青森県教育委員会教育長から、同年2月18日付で、埋蔵文化財の記録保存のための発掘調査の実施が通知されている。

第2節 調査の方法

1 発掘作業の方法

東道ノ上（3）遺跡は、平成16年度に県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を実施しており、今回の調査は、その隣接地を対象としている。前回の調査では、縄文時代と古代の遺構・遺物が検出されたため、当該期に重点をおいて調査を実施した。

〔測量基準点・水準点の設置とグリッド設定〕測量基準点は、本事業に伴って設置された用地幅杭を用いて、調査区内に任意杭を設置した。水準点は3級基準点21-6（3級水準点併用）を使用した。グリッドは、世界測地系に基づく公共座標値 $X=77056$ ・ $Y=35900$ を起点IA-0とし、1辺を4mで設定した。グリッドの名称は、各グリッドの南から北方向にローマ数字とA～Yのアルファベットを組み合わせ、西から東方向に算用数字を付けて、その南西隅の組み合わせとした。

〔基本層序〕表土から順にローマ数字を付けた。火山灰については、上位から順にa・bのアルファベットを付けた。

〔表土等の掘削〕平成25年度に、県文化財保護課が実施した試掘調査の結果、表土から遺構検出面までは遺物が希薄であったため、重機を併用し、作業の効率化を図った。

〔遺物包含層の調査〕上層から層位ごとに人力で掘削した。出土遺物の取り上げは、遺構及びグリッド一括を基本とし、出土状況に応じてトータルステーションを使用した。

〔遺構の調査〕 検出順に略号と算用数字を組み合わせた遺構番号を付けた。検出された遺構は、半截や土層観察用畦（ベルト）を設定して、堆積土の観察を行った。堆積土層には算用数字を付け、『新版標準土色帖』を基に色調などを記録した。平面図は、株式会社CUBIC製遺構実測支援システムを使用して、トータルステーションによる測量で作成したが、土層断面図は簡易遣り方測量で縮尺20分の1の実測図を作成した。

〔写真撮影〕 35mmモノクロームと35mmカラーリバーサルの各フィルム及び有効画素数1600万画素以上のデジタルカメラを併用し、土層の堆積状況や遺構の完掘状況などについて記録した。

2 整理・報告書作成作業の方法

縄文時代の整理・報告書作成作業は、以下のとおりである。

〔遺構名〕 調査時に遺構番号を付けたが、その後、整理作業の過程で遺構として認識できなくなったものなどについては遺構番号の振替を行った。なお、振替を行った遺構については、巻末の「遺構観察表」を参照されたい。

また、堅穴住居内に付属する炉・ピットなどについては必要に応じ「炉1」、「ピット1」などの遺構番号を付けた。遺構番号については、基本的に調査時の番号とした。堅穴住居内及びその周辺のピットに付けた数値は、ピットの深さを示す。単位はcmであり、（ ）内の数値は残存値である。

〔図面の整理〕 遺構の平面図は、トータルステーションによる測量で作成したため、整理作業ではこれを縮尺20分の1で図化し、簡易遣り方測量で作成した土層断面図と図面修正を行った。なお、遺構配置図は、修正後のデータを使用して作成した。

〔写真の整理〕 35mmモノクロームフィルムは、撮影順に整理してネガアルバムに収納し、35mmカラーリバーサルフイルムは、遺構ごとに整理してスライドファイルに収納した。また、デジタルカメラのデータは、遺構ごとのフォルダに整理し、HDDとDVD-Rに保存した。

〔遺物の洗浄〕 洗浄ブラシを用いて、表面の摩耗に注意しながら、水で付着物を流し落とした。

〔遺物の注記〕 遺物の取上に用いた遺物カードを基に、調査年度・遺跡名・出土地点・層位を略記した。

〔報告書掲載遺物の選別〕 遺物全体の分類を適切に行った上で、遺構ごとに掲載遺物を選定した。選定の際には、所属時期・型式・器種などがわかる資料等を優先したが、特徴的な出土状況を示すものなどについては、この限りではない。また、遺構外出土遺物については、本遺跡から出土した形式・型式を網羅できるように留意し、遺物を選別した。

〔遺物の観察と図化〕 個々の遺物を目視で観察して、遺物の特徴を適切に分かりやすく表現するように図化し、観察表を作成した。

〔遺物の写真撮影〕 実測図では表現し難い材質感・立体感・遠近感・文様・製作時の加工痕や調整痕・使用痕などを忠実に再現し、細部が観察できるように留意して業者に委託した。

〔遺構・遺物のトレースと版下作成〕 遺構・遺物の実測図やその他の挿図のトレースは、株式会社CUBIC製遺構実測支援システムとトレースくん及びAdobe社製Illustratorを使用してデジタルトレースを行った。実測図版と写真図版などの版下作成については、Adobe社製Creative Suiteを使用した。

〔遺構の検討〕 形状・規模・堆積土・出土遺物などから検討した。

〔遺物の検討〕 出土状況や特徴などから検討した。

[遺構の記載] 特に定めていない。但し、土坑の平面形状については、多角的な形状の大半は、不整形・不整形と大別した。また、観察表における新旧関係の表記は、「古→新」とした。

[土器の記載] 特に定めていない。但し、本文における「個体土器」は、復元率が高い土器を示す。

[石器・製品類の記載] 特に定めていない。但し、「石鏃、石匙2点、凹石、半円状扁平打製石器3点」、「ミニチュア土器、土器片利用円盤2点」などと点数表記がある場合は、1点の記載を省略した。

第3節 調査の経過

1 発掘作業の経過

縄文時代の発掘調査は6,260㎡を対象として、平成26年4月30日から11月21日及び平成27年4月9日から7月30日までの発掘作業期間で実施した。

発掘調査体制は、以下のとおりである。

平成26年度

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	三上盛一（現 総合社会教育センター所長）
次長（総務GM）	高橋雅人（平成29年3月退職）
調査第一GM	中嶋友文（現 文化財保護主幹）
総括主幹	小田川哲彦（現 調査第一GM）
文化財保護主幹	野村信生
文化財保護主幹	畠山昇（平成28年3月退職）
文化財保護主査	平山明寿（現 文化財保護主幹）

平成27年度

調査主体	青森県埋蔵文化財調査センター
所長	三上盛一（現 総合社会教育センター所長）
次長（総務GM）	川上彰雄（現 次長）
調査第一GM	中嶋友文（現 文化財保護主幹）
文化財保護主幹	野村信生
文化財保護主幹	畠山昇（平成28年3月退職）
文化財保護主幹	秦光次郎
文化財保護主査	齋藤正（現 文化財保護主幹）

専門的事項に関する指導・助言

調査員	三浦圭介	青森中央学院大学非常勤講師（考古学）
調査員	上條信彦	国立大学法人弘前大学人文学部准教授（考古学）
調査員	柴正敏	国立大学法人弘前大学大学院理工学研究科教授（地質学）

発掘作業の経過は、以下のとおりである。

平成26年度

- 4月上旬 国土交通省東北地方整備局青森河川国道事務所・県文化財保護課と打ち合わせを行い、発掘調査範囲や発掘作業の進め方などについて確認した。
- 4月30日 発掘調査器材などを現地に搬入し、環境整備後、調査区北側から発掘作業を開始した。
- 5月中旬 南側調査区の雑木等の撤去が完了し、遺構検出作業を開始した。検出された遺構は、順次、精査を行った。
- 7月上旬 古代の遺構精査がほぼ終了したため、縄文時代の遺構精査を全作業員で行った。
- 9月上旬 作業員を増員し、遺構精査に努めた。
- 11月上旬 次年度に精査を繰り越す遺構について保護措置を講じたうえで、調査器材などの撤収をし、21日に平成26年度の調査を終了した。

平成27年度

- 4月9日 発掘調査器材などを現地に搬入し、環境整備後、発掘作業を開始した。
- 5・6月 調査区東側の竪穴住居跡と調査区西側の土坑群の精査を平行して進める。
- 7月4日 現地見学会を開催した。
- 7月30日 全ての遺構精査・記録作業が終了したため、調査器材などの撤収等をし、東道ノ上(3)遺跡の調査を終了した。

2 整理・報告書作成作業の経過

整理・報告書作成作業は、平成27年4月1日から平成30年3月31日までの期間で行った。

縄文時代の整理・報告書作成体制は、以下のとおりである。

整理主体 青森県埋蔵文化財調査センター

総括主幹	小田川 哲彦
文化財保護主幹	野村 信生
文化財保護主幹	畠山 昇
文化財保護主幹	秦 光次郎
文化財保護主幹	齋藤 正
文化財保護主事	濱松 優介

縄文時代の整理・報告書作成作業の経過、業務委託状況などは、以下のとおりである。

平成27年度

- 4～3月中旬 図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理した。遺物を選別し、拓本と実測及びトレースを行った。また、業務委託により実施した作業は、以下の通りである。

・出土遺物の水洗・注記作業

株式会社イビソク

・土器実測図作成の一部

株式会社シン技術コンサル

- ・石器実測図作成の一部 株式会社ラング
- ・出土土器・製品類の写真撮影 シルバーフォト
- ・出土石器の写真撮影 フォトショップいなみ
- ・出土した炭化材の樹種同定および骨片の同定 株式会社パレオ・ラボ

平成28年度

4～3月中旬 図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行った。遺物を選別し、拓本と実測及びトレースを行った。また、業務委託により実施した作業は、以下の通りである。

- ・土器実測の一部および石器実測の一部 株式会社アルカ
- ・土器・石器の写真撮影 シルバーフォト

平成29年度

4～10月中旬 図面・写真・出土遺物など、報告書作成に必要な基礎資料を整理し、図面の修正を行ったうえで、一部の図版作成作業を開始した。それと平行して遺物を選別し、拓本と実測及びトレースを行った。また、業務委託により実施した作業は、以下の通りである。

- ・土器実測の一部および石器実測の一部 株式会社アルカ
- ・石器トレースの一部 株式会社ラング
- ・土器・製品類の写真撮影 シルバーフォト・有限会社 無限
- ・石器写真撮影 フォトショップいなみ

10月下旬～12月 図版作成と原稿執筆を行い、報告書の割付と編集を行った。また、遺物集合写真の撮影を有限会社 無限に委託して実施した。

1～3月 図版作成と原稿執筆を行い、報告書の割付と編集を行った。印刷業者を選定し、入札を行った。校正を経て報告書を刊行し、記録類と出土品を整理して収納した。

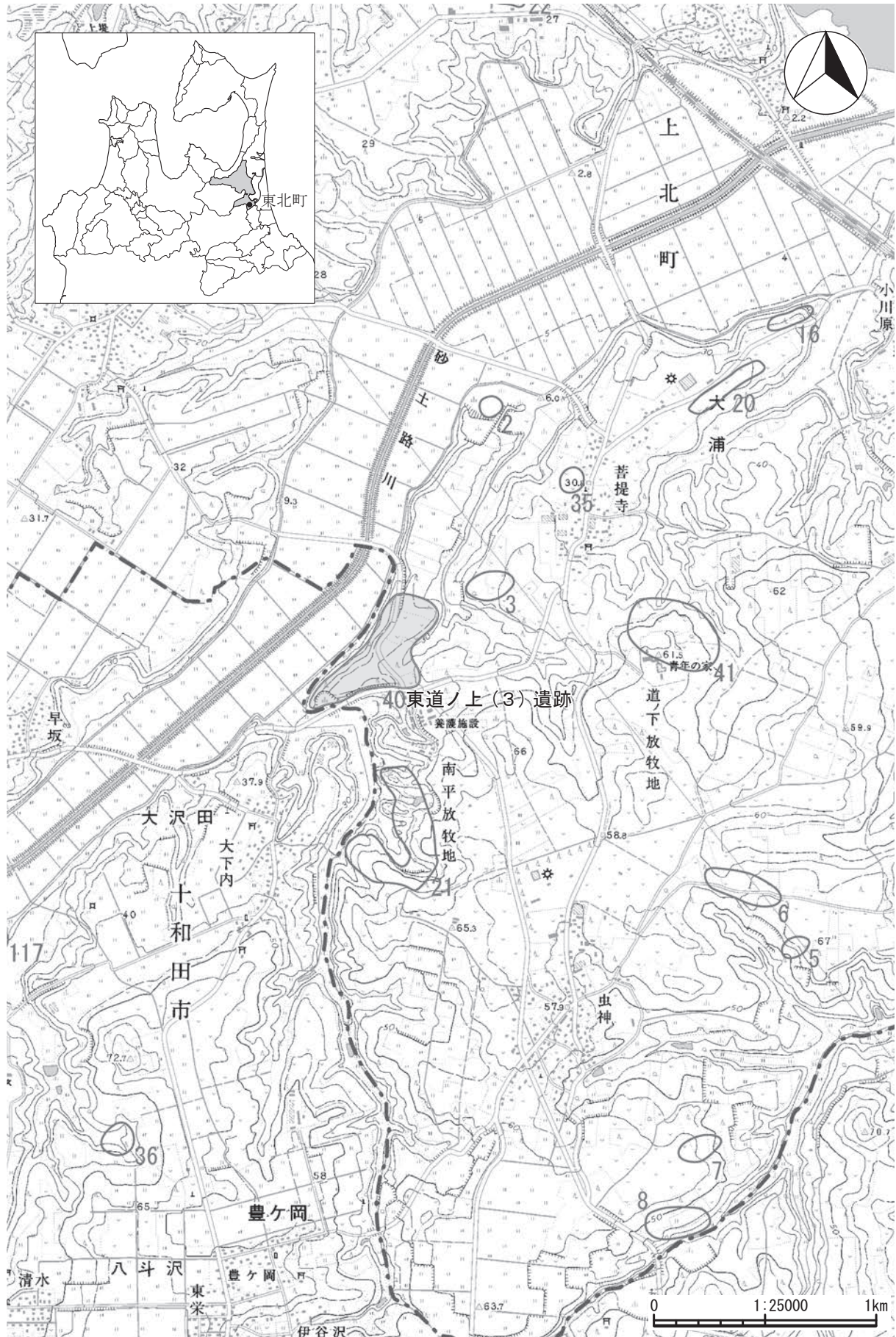


図1 遺跡位置図

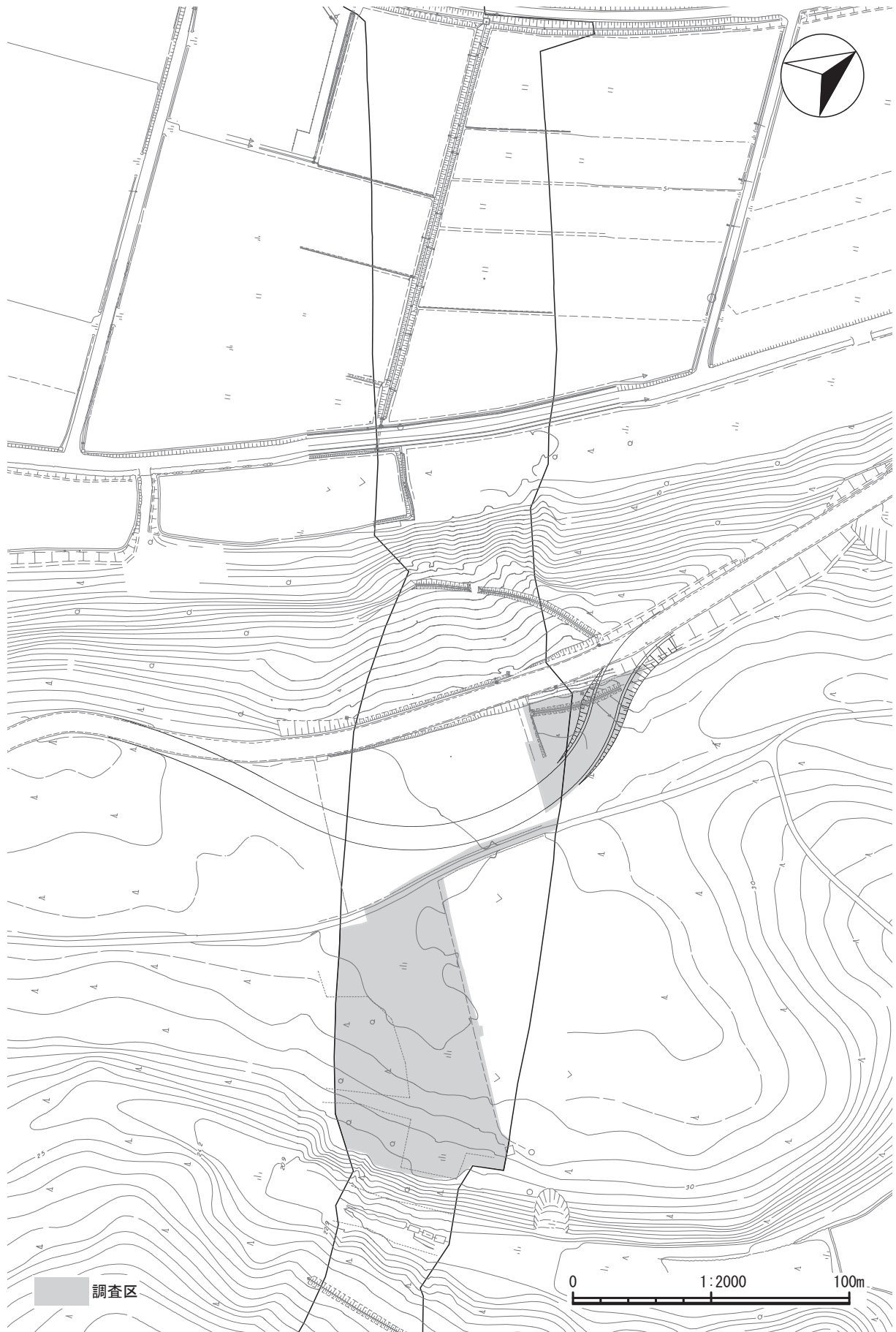


図2 路線図

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の地理的環境

東道ノ上(3)遺跡は、東北町大字大浦字道ノ上に所在し、砂土路川右岸に発達した標高20~40mの河岸段丘上に位置する。砂土路川とその支流にあたる小さな沢によって浸食された舌状台地上に縄文時代と古代の集落が展開していた。遺跡西側には急峻な段丘崖が発達しており、その下には砂土路川が流れる谷底平野が広がっている。

基本土層は、北側調査区、VIP-206グリッドの調査区際で確認し、第I層から第VI層に分層した。主に第III層が縄文時代の遺物包含層であり、第IV・V層が主な遺構確認面である。南側調査区においては、第V層上部に、やや粘性が強い黄褐色土が北側調査区よりも厚く堆積する。

なお、本遺跡は平成16・26年度に本センターで発掘調査が行われており、遺跡の地形と地質についての詳細は、既報告を参照されたい(青森県教委2006・2016)。

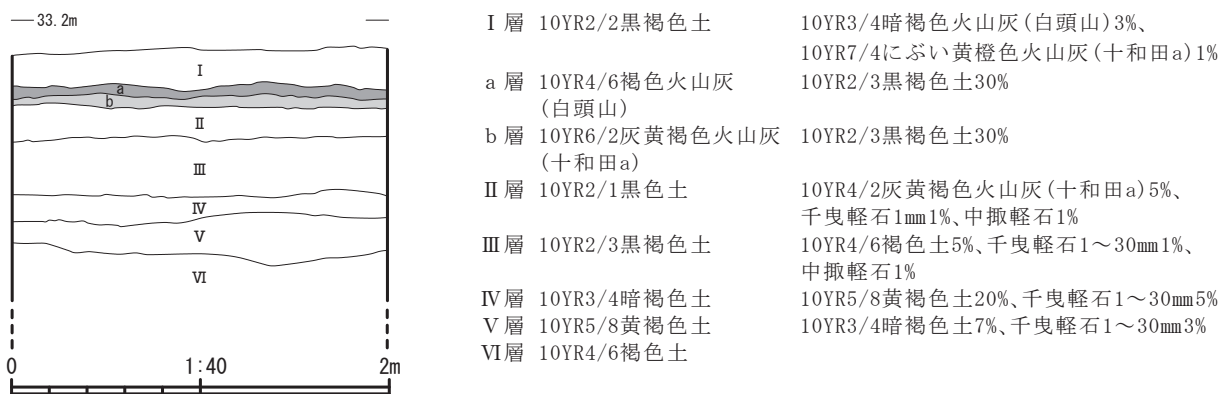


図3 基本土層



基本土層(南西から)

第2節 遺跡の歴史的環境

〔東道ノ上（3）遺跡の歴史的環境〕本遺跡は、平成16・26年度に本センターが発掘調査を実施している。平成16年度の調査においては、今回報告地点から南に約200m離れた地点を調査しており、西側の谷底平野を臨む急崖に形成された、縄文時代前期中葉の円筒下層a式を主体とする貝層が確認されているほか、台地上では、縄文時代前期中葉（円筒下層a式期）～中期前葉（円筒上層a式期）と古代の集落跡が確認されている。また、平成26年度の調査では、台地の西側縁辺部において、末期古墳が確認され、9～10世紀にかけて形成された、古代の墓域が確認されている。

〔周辺の遺跡（図5）〕本遺跡から出土した土器型式（縄文時代早期～後期）が属する時期を中心に、周辺の遺跡について記載する。なお、古代以降の周辺遺跡については既報告を参照されたい（青森県教委2016）。

縄文時代早期～前期前葉にかけては、本遺跡の北東約3.5kmに位置する小川原湖の東岸に、遺跡が濃密に分布する。野口貝塚は、貝層の最下層から縄文時代早期中葉のムシリⅠ式が出土している、本県最古級の貝塚である。また、早稲田（1）貝塚は、縄文時代早期後葉～前期前葉の土器型式である、早稲田5・6類の標式となった遺跡である。

前期中葉～中期にかけては、国史跡であり、円筒土器文化における拠点集落と考えられる二ツ森貝塚や前期末のフラスコ状土坑から成人女性の人骨が出土した、古屋敷貝塚などが確認されている。また、根井沼（3）遺跡からは円筒下層d式土器がまとまって出土している。

中期末葉～後期にかけては、大木10式併行期の竪穴建物跡が多数確認された猫又（2）遺跡や後期前葉（十腰内Ⅰ式期）の埋設土器が確認されている小田内沼（1）遺跡などが本遺跡周辺に所在する。



調査区遠景（西から）

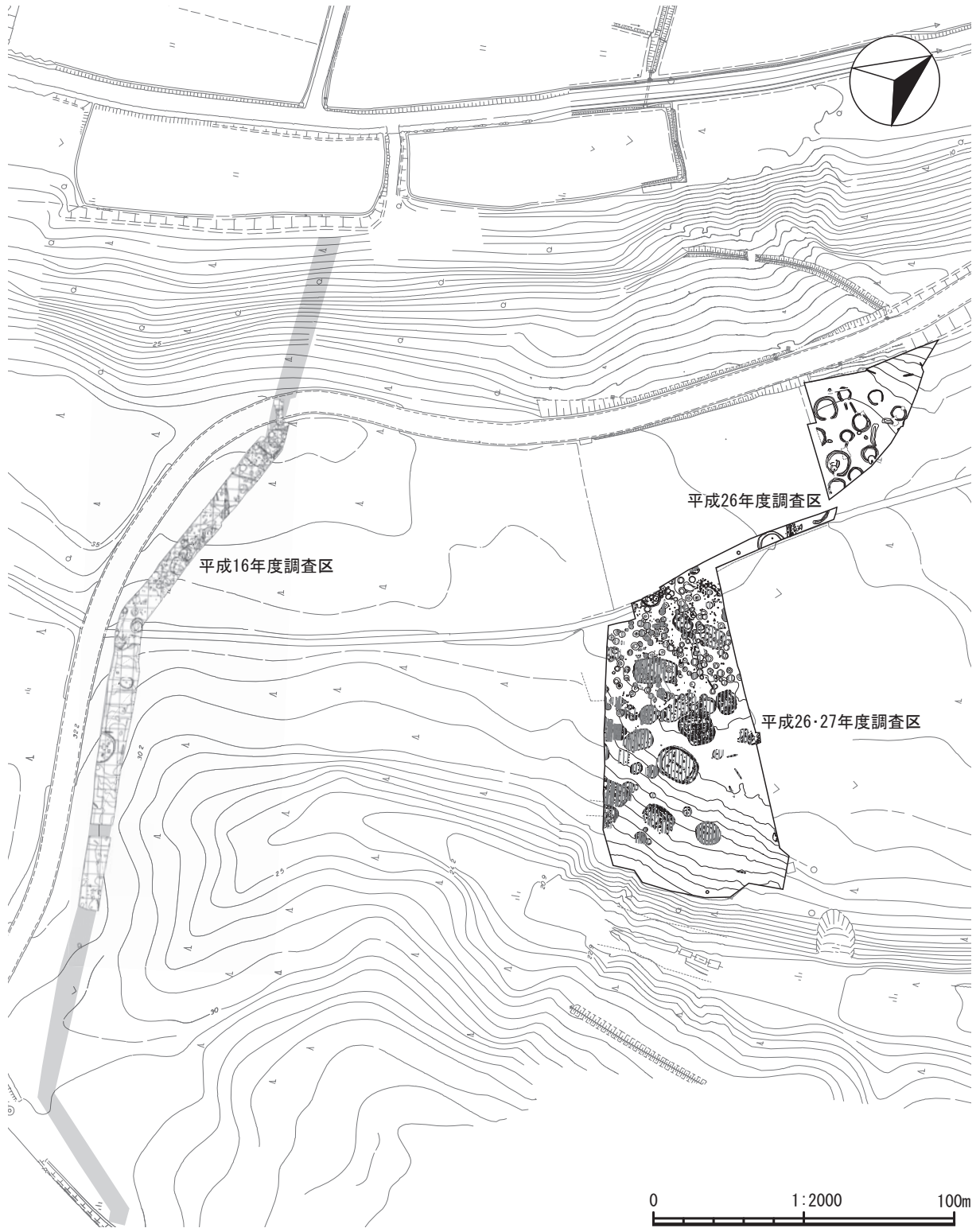


図4 平成16・26・27年度調査区

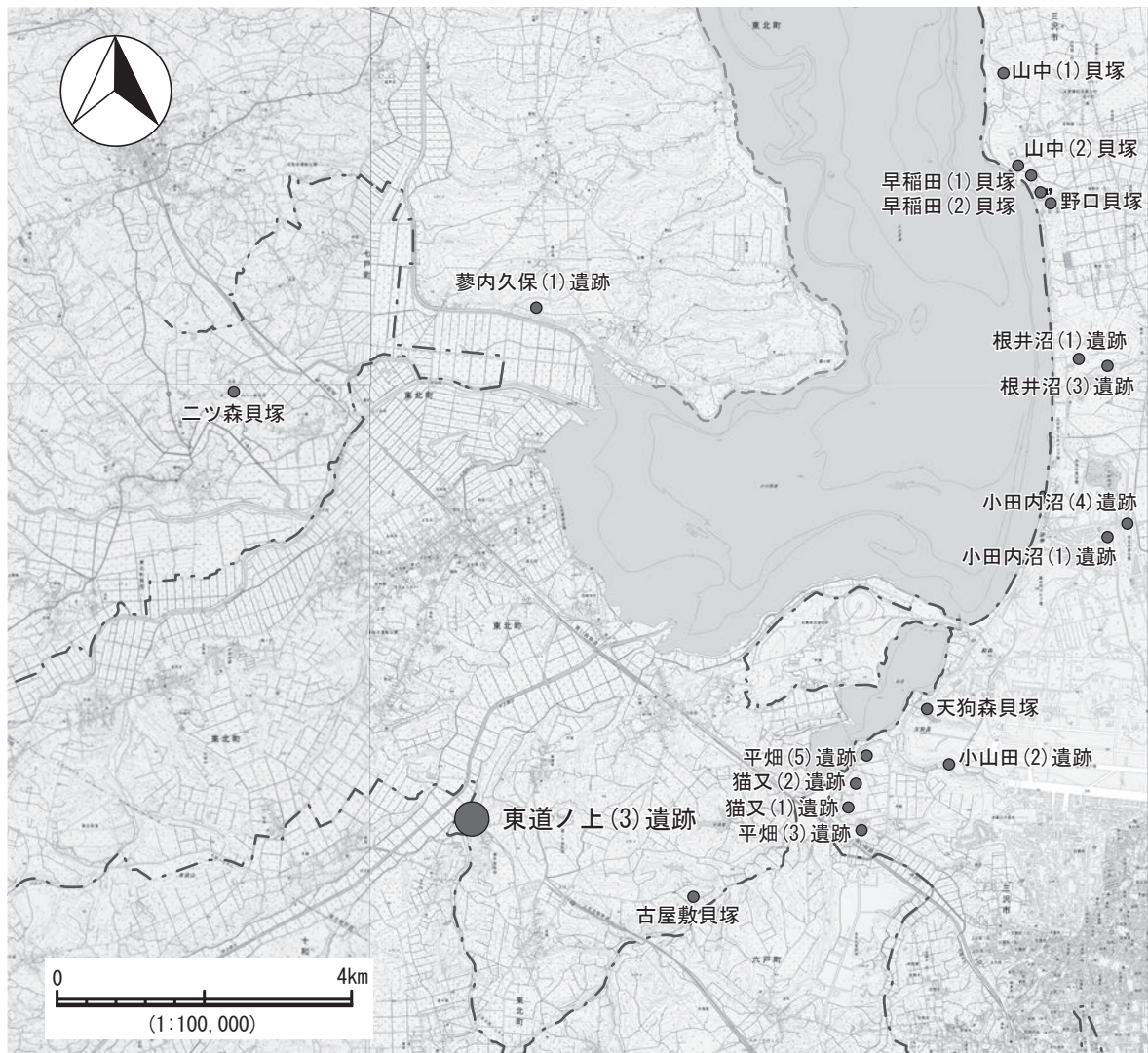


図5 周辺遺跡位置図

周辺遺跡一覧表

遺跡名	主な時期	主な文献	遺跡番号
野口貝塚	縄文時代早期中葉(ムシリI式)～前期末葉(円筒下層d式)・晩期	立教大学博物館研究 1963「青森県野口貝塚の発掘」『MOUSEION』9 三沢市教委 2015『野口貝塚 早稲田(1)貝塚』三沢市埋文報30	207008
山中(1)貝塚	縄文時代早期中葉(寺ノ沢・吹切沢式)・早期後葉(早稲田5類)	三沢市教委 2005『山中(1)貝塚』三沢市埋文報22	207015
山中(2)貝塚	縄文時代早期中葉(寺ノ沢式)～早期後葉(赤御堂式)	青森県立郷土館 1992『小川原湖周辺の貝塚-三沢市山中(2)貝塚・天間林村ニツ森貝塚発掘調査報告-』青森県立郷土館調査報告31(考古9)	207016
早稲田(1)貝塚	縄文時代早期中葉(ムシリI式)～前期前葉(早稲田6類)	二本柳正一(ほか) 1957「青森県上北郡早稲田貝塚」『考古学雑誌』43-2 日本考古学会 佐藤達夫(ほか) 1960「青森県上北郡早稲田貝塚」『上北考古学会報告』1 上北考古学会 三沢市教委 2015『野口貝塚 早稲田(1)貝塚』三沢市埋文報30	207017
根井沼(1)遺跡	縄文時代早期前葉(日計式)～早期中葉(寺ノ沢式)・前期、弥生後期	三沢市教委 1985『根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書』三沢市埋文報2 三沢市教委 1988『根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書』II 三沢市埋文報4 三沢市教委 1988『根井沼(1)遺跡緊急発掘調査報告書』III 三沢市埋文報5	207030
小田内沼(4)遺跡	縄文時代早期中葉(小田内沼I群3類(ほか))	三沢市教委 1988『小田内沼(1)・(4)遺跡発掘調査報告書』III 三沢市埋文報10	207035
根井沼(3)遺跡	縄文時代早期中葉(小田内沼I群3類)～前期末葉(円筒下層d式)・後期	三沢市教委 2008『根井沼(3)遺跡』三沢市埋文報23	207079
天狗森貝塚	縄文時代早期中葉(白浜式)～前期末葉(円筒下層d式期)	三沢市教委 1979「三沢市天狗森貝塚発掘調査概報」『考古風土記』4	207014
小山田(2)遺跡	縄文時代早期中葉(吹切沢式)	三沢市教委 1999『小山田(2)遺跡・天狗森(3)遺跡』三沢市埋文報17	207117
ニツ森貝塚	縄文時代前期中葉(円筒下層b式)～中期後葉(最花式)	青森県教委 1962『青森県ニツ森貝塚発掘調査概要』 青森県立郷土館 1992『小川原湖周辺の貝塚-三沢市山中(2)貝塚・天間林村ニツ森貝塚発掘調査報告-』青森県立郷土館調査報告31(考古9) 七戸町教委 2007『ニツ森貝塚-範囲確認調査報告書』七戸町埋文報71 天間林村教委 1993『ニツ森貝塚』天間林村埋文報1 (ほか)	402112
古屋敷貝塚遺跡	縄文時代前期末葉(円筒下層d式)～中期後葉(最花式)	上北町教委 1983『上北町古屋敷貝塚・I-遺物編-』上北町文報1 上北町教委 1986『上北町古屋敷貝塚・II-遺物編-』上北町文報2	408010
蓼内久保(1)遺跡	縄文時代前期前葉(早稲田6類)・中期末葉(大木10式併行)	東北町教委 2008『蓼内久保(1)遺跡』東北町埋文報17	408088
猫又(1)遺跡	縄文時代中期後葉(最花式)	三沢市教委 2008『根井沼(3)遺跡』三沢市埋文報23	207024
猫又(2)遺跡	中期末葉(大木10式併行)～後期初頭	三沢市教委 2014『猫又(2)遺跡IV 遺物編2』三沢市埋文報28(ほか)	207025
小田内沼(1)遺跡	縄文時代後期前葉(十腰内I式)	青森埋文 1988『小田内沼(1)遺跡』青埋文報107 三沢市教委 1992『小田内沼(1)・(4)遺跡発掘調査報告書』三沢市埋文報10	207026
平畑(3)遺跡	縄文時代早期後葉(早稲田5類)	三沢市教委 1996『平畑(3)遺跡』三沢市埋文報14	207003
平畑(5)遺跡	縄文時代後期前葉(十腰内I式)	三沢市教委 1991『平畑(5)遺跡I』三沢市埋文報8(ほか)	207033

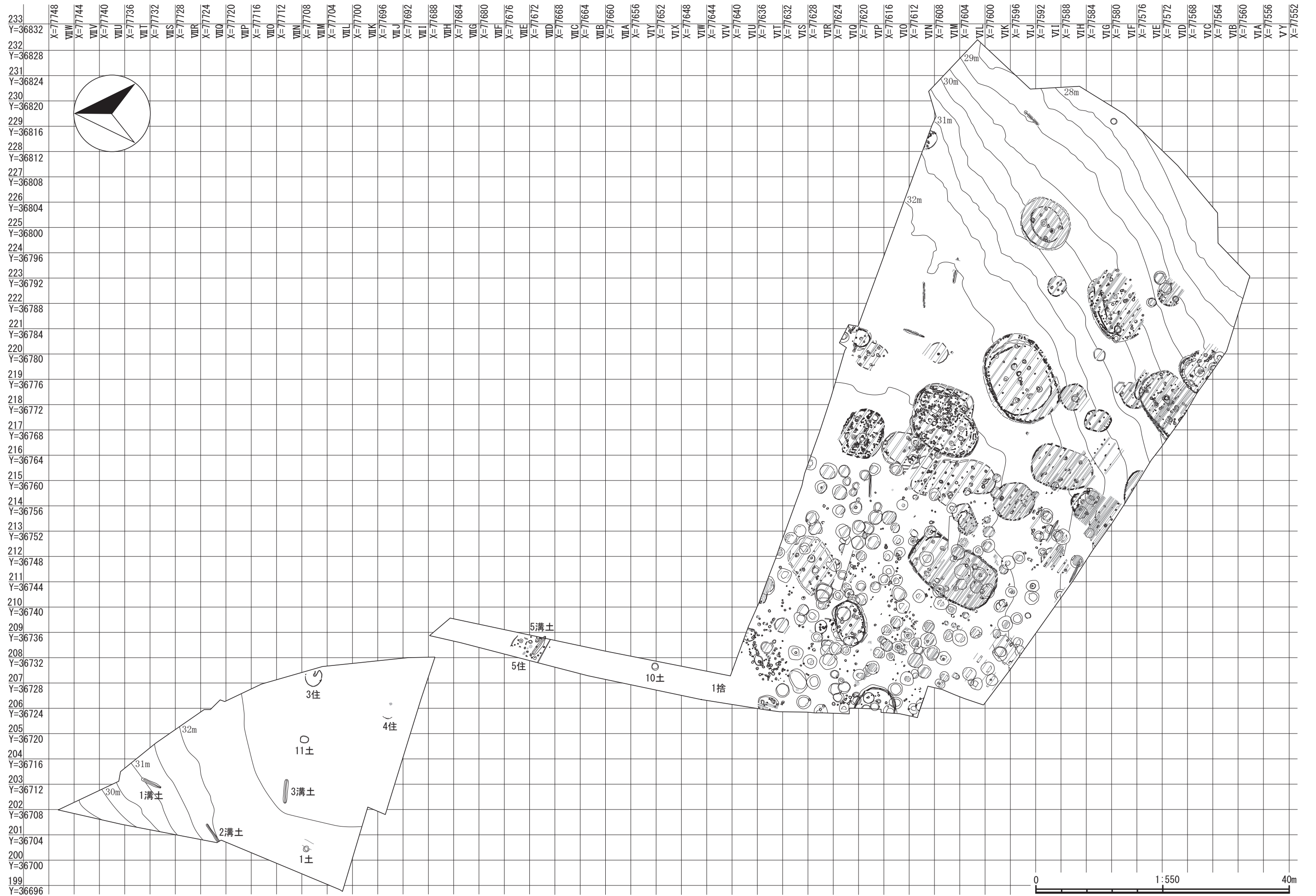


図6 遺構配置図

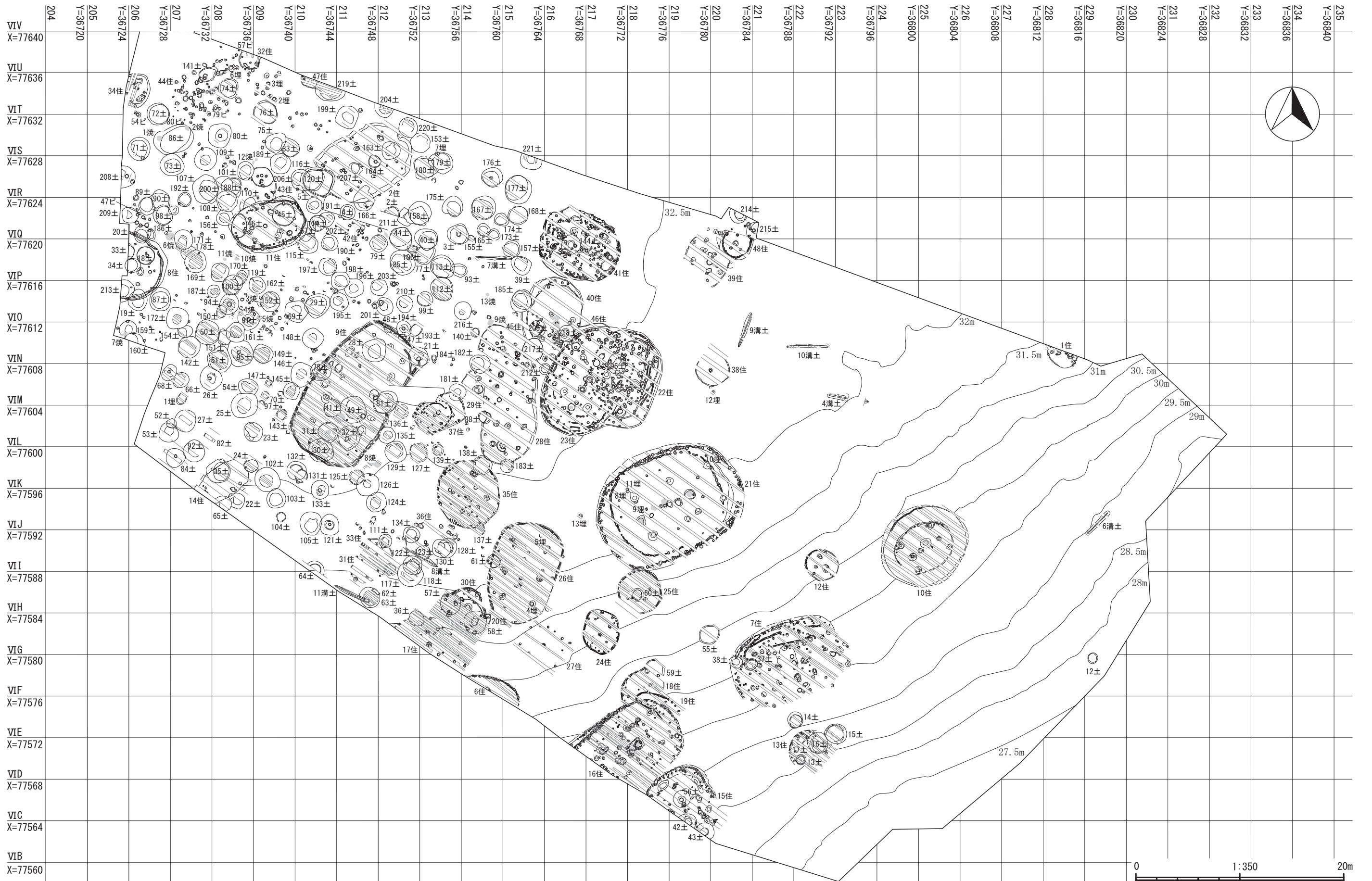


図7 南側調査区遺構配置図

第3章 検出遺構と出土遺物

第1節 後期旧石器時代の出土遺物

1 石器 (図8・写真138)

本遺跡からは、珪質頁岩製の細石刃石核が1点(図8-a)とそれに接合するスキー状削片(b)、削片(c)が出土している。その加工のあり方や接合状況から、湧別技法による細石刃関連資料と考えられる。

その製作工程は以下の通りである。1. 素材となる削片の縁辺部に剥離を加え、全体の形状は不明であるが、両面加工石器(ブランク)を製作。また、cにはbと方向を同じくする削片剥離の痕跡が認められる。打点側は失われているが、全体的な剥離面の構成などから、c上面は、稜付き削片を剥離した後の甲板面と推定される。この甲板面にはbに見られる側縁調整は見られない。接合状況から見ると、この削片剥離後、bの剥離に至るまで複数回の削片剥離がなされたことが推測される。2. 長軸方向の先端部付近が欠損(c)。この欠損は次工程のために意図的に「割取り」を行った可能性もある。3. 1により作出された甲板面の一侧縁に剥離を加え、稜を形成。4. 細石刃作出のための打面形成のために、長軸方向右側から打撃を加え、削片を剥離(b)。この削片には被熱の痕跡が確認される。5. 4により作出した甲板面の長軸方向右側から細石刃を剥離。aの細石刃剥離作業面を見ると、少なくとも7枚以上の細石刃を剥離しており、bの長さから推測すると、数十枚の細石刃が剥離されたことが推測されるが、今回の調査においては、細石刃は確認されていない。打面と細石刃剥離作業面の角度は75°前後である。また、a、b、cいずれの甲板面にも擦痕は確認されない。

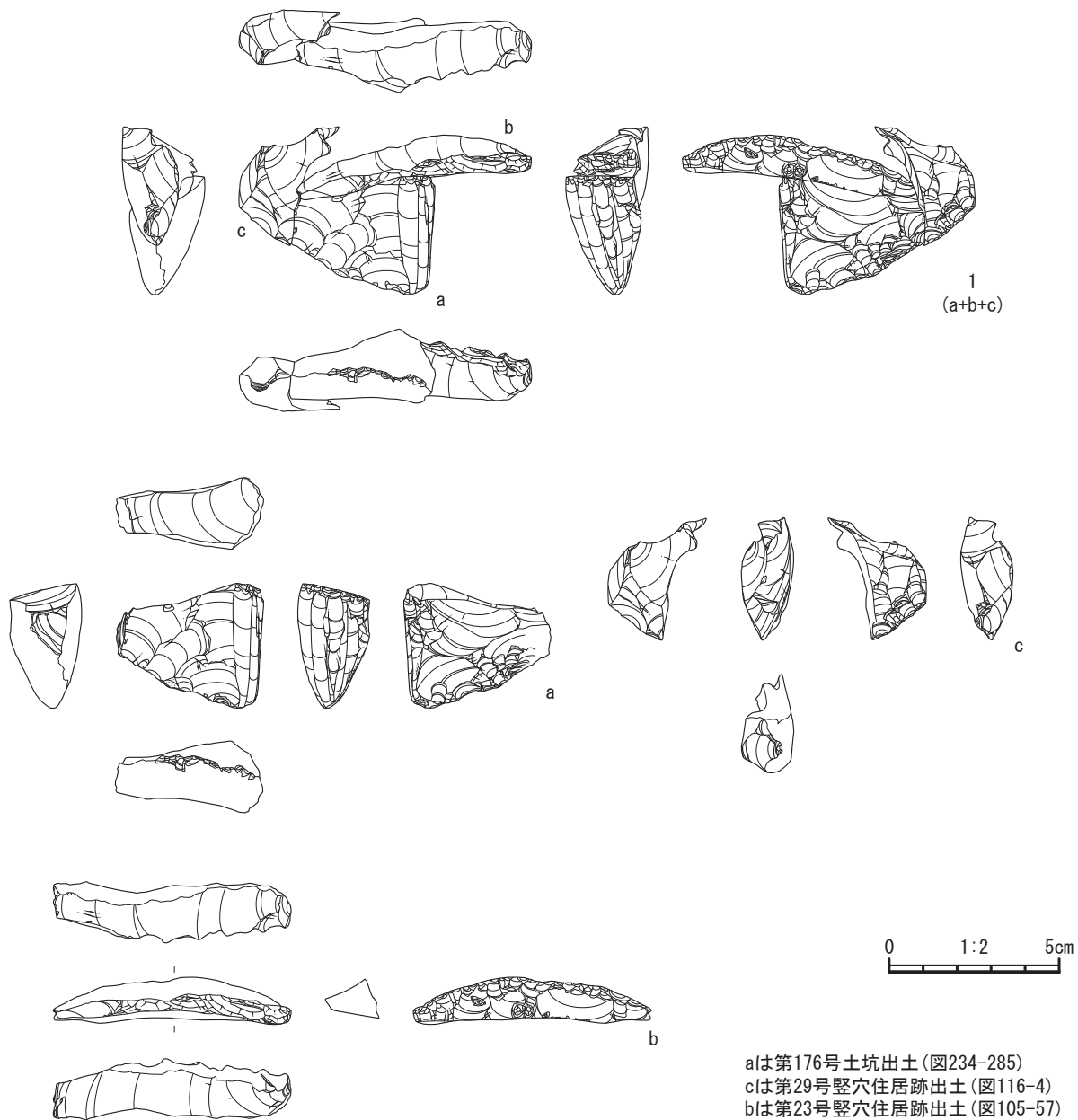


図8 細石刃石核接合図

第2節 縄文時代の検出遺構と出土遺物

調査区は東西が急峻な段丘崖となる台地上に位置しており、調査区の大半は耕作（トレンチャー）により削平された状況であった。遺構は台地平坦部から東側の緩斜面にかけて密に分布しており、竪穴住居跡48軒、土坑217基、埋設土器13基、焼土遺構13基、捨て場1箇所、溝状土坑11基などを検出した。これらの遺構は重複し、複雑な様相であった。以下に、遺構ごとに詳細を記載する。なお、調査区の呼称については、VIIAグリッドラインから北を北側調査区、南を南側調査区と区分した。

（1）竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（図9、写真4・139）

〔位置・確認〕南側調査区、VIN-228グリッドに位置する。V層で、暗褐色土の広がりとして確認した。

〔構造〕調査区外へ及ぶため、明確な平面形は不明だが、円形か楕円形を呈すると考えられる。確認時における短軸は309cm残存し、長軸は不明である。底面の短軸は293cm残存し、長軸は不明である。深さは23cmで、残存する床面積は3.55㎡である。主軸方位はN-17°-Eと推測される。貼床は施されておらず、床面は、概ね平坦に仕上げられている。西側の壁は外傾して立ち上がるが、南から東側の壁は明瞭ではない。炉は確認されていない。本遺構に付属すると考えられるピットは9基確認されているが、支柱穴や柱穴配置は不明である。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とし、ローム粒や焼土塊を含む。人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から床面直上にかけて、円筒下層d式～上層a式土器が出土しており、床面から出土した2点（1・2）を図示した。

〔時期〕床面出土遺物より、縄文時代前期末から中期初頭（円筒下層d2～上層a1式期）と考えられる。

第2号竪穴住居跡（図10～12、写真4・5・139）

〔位置・確認〕南側調査区、VIR・VIR-217～212グリッドに位置しており、IV層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第5・163・164・166・207号土坑と重複する。本竪穴住居跡は第163・166・207号土坑より新しく、第5・164号土坑より古い。

〔構造〕北東及び南西側の壁を失っており不明であるが、残存する壁から主軸方位N-42°-Eの隅丸方形の平面形状であったと推定される。床面はV層上面に若干の起伏をもって形成される。壁は床面から外傾して立ち上がる。検出面の残存長軸は877cm、短軸は707cm、床面の残存長軸820cm、短軸630cm、深さは57cmである。床面積は41.69㎡と推定される。炉は土器埋設炉を1基検出した。トレンチャーにより北東側が失われているが残存する掘方は、開口部の長軸60cm、短軸33cm、深さ27cmを計り、口縁部から底部までの土器が正立で埋設される。炉の周辺から炭化材が出土しており、樹種同定の結果、ハンノキ属ハンノキ亜属とクリが確認された（詳細は第4章第1節参照）。柱穴はピット1～25の25基が検出された。深さ40cmを超えるピット1・3・5・6・8・15・17・20の8基が支柱穴であったと考えられ、長方形配置をなしていたと考えられる。

〔堆積土〕暗褐色土・褐色土を主体とする。黄褐色土が混入する。堆積状況から人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕土器は土器埋設炉から円筒上層a式土器（1）、堆積土から円筒下層d2～上層a1式土器が出土した（2・3）。石器は堆積土からスクレイパー、楔形石器、磨製石斧、半円状扁平打製石器、磨石、台石が出土した（4～9）。土製品は堆積土から土偶が出土した（10）。

〔時期〕炉体土器から、縄文時代中期初頭から前葉と考えられる。

第3号竪穴住居跡（図13、写真6・139）

〔位置・確認〕北側調査区、ⅧM-207グリッドに位置しており、Ⅴ層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第4号墳と重複しており、本竪穴住居が古い。

〔構造〕東側が調査区外に及び、全容は不明である。平面形状は円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-118° -Eである。検出面の長軸は288cm残存しており、短軸は264cm残存している。深さは14cm、床面積は5.7㎡と推定される。炉跡は中軸上から1基検出した。南東側に楕円形と推定される浅い落ち込みがあり、中央寄りの部分に火床面が形成される。ピットは南壁際から1基検出した。

〔堆積土〕黒色土を主体とする。堆積状況から、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕最花式の破片が出土した（1）。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代中期後葉の可能性が考えられるが、詳細は不明である。

第4号竪穴住居跡（図14、写真6・139）

〔位置・確認〕北側調査区、ⅦJ-206グリッドに位置しており、Ⅴ層で硬化面の広がりとして確認した。

〔重複〕第5号墳と重複しており、本竪穴住居が古い。

〔構造〕床面の一部を検出したのみで、全容は不明である。地床炉を1基検出し、その周囲に硬化面が形成される。

〔出土遺物〕1・3は円筒下層d式である。2は底部のみで詳細は不明あるが、胎土に植物繊維が含まれる。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代前期末以降と考えられる。

第5号竪穴住居跡（図15・16、写真7・8・139）

〔位置・確認〕北側調査区、ⅦD-208グリッドに位置しており、Ⅲ層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第5号溝状土坑と重複しており、本竪穴住居が古い。

〔構造〕東西が調査区外に及び、全容は不明である。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-118° -Eと推定される。検出面の長軸は418cm残存しており、短軸は514cm残存している。深さは44cmであった。地床炉3基、埋設土器1基、土坑2基、炉の周辺から支柱穴などの可能性が考えられるピットを検出した。埋設土器については、炉に隣接することから、炉との関連性が考えられる。

〔堆積土〕 黒色土や暗褐色土を主体とする。堆積状況から、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋設土器1は円筒下層d式の土器が埋設される。上部は欠損し正立の状態であった(1)。石器はスクレイパー類2点と凹石が出土した(4・5)。

〔時期〕埋設土器から、縄文時代前期末と考えられる。

第6号竪穴住居跡(図17、写真9・139)

〔位置・確認〕南側調査区、VIF-214グリッドに位置する。V層で、暗褐色土の広がりとして確認した。

〔構造〕大部分が調査区外に及ぶため、明確な平面形は不明だが、楕円形を呈すると考えられる。確認時における長軸は不明で、短軸は579cm残存する。底面の長軸は不明で、残存する短軸は570cm、深さは53cm、残存する床面積は5.906㎡である。一部に黄褐色を呈した貼床が施され、床面は平坦に仕上げられている。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は確認されていない。主軸方位はN-35°-Eと推測される。ピット1は柱穴と考えられるが、柱穴配置等は不明である。北から北東側にかけて壁溝と小ピットが確認されている。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とし、褐色土が混じる。総じて人為堆積と考えられるが、上位層の一部は自然堆積の可能性がある。

〔出土遺物〕堆積土から、円筒下層d式土器が出土している(1)。石器は、石鏃、スクレイパー類、半円状扁平打製石器、磨石2点が出土している(2～5)。

〔時期〕堆積土出土遺物から、縄文時代前期末頃と考えられる。

第7号竪穴住居跡(図18～27、写真10・11、140～142)

〔位置・確認〕南側調査区、VIF-221グリッドに位置しており、III層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第38・37号土坑と重複する。本竪穴住居は第38号土坑より新しく、第37号土坑より古い。

〔構造〕緩斜面に構築されており、壁は北西側のみ検出した。平面形状は楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-75°-Eである。検出面の長軸は10.68m残存しており、短軸は7.72mと推定される。深さは108cm、床面積は65㎡と推定される。炉跡は中軸上から9基検出した。炉1～4・7・9は土器埋設炉である。炉6は地床炉、炉5は火床面を検出したが、詳細は不明である。炉6と炉9は重複しており、炉6が新しい。炉8は火床面の一部に土器片を巡らせた状態であった。中軸線を挟んで支柱穴と考えられるピットを検出した。北西側から壁溝と考えられる溝跡、壁柱穴と考えられる小ピットを検出した。支柱穴は重複しており、壁溝や壁柱穴の検出状況から、建替や拡張が複数回行われたと考えられる。

〔堆積土〕黒色土・黒褐色土・暗褐色土を主体とする。また、2層を主体に多量の遺物が廃棄されている。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕炉1・7は円筒下層d1式の土器を炉体とする(1・5)。1は口縁部を欠損する。炉2～4・9は円筒下層d式の土器を炉体としており、それらは上部を欠損する(2～4・6)。また、2層を主体に多量の遺物が出土した。土器は円筒下層d1～上層a1式が出土した(7～32)。それらは、

個体土器が横位で潰れた状態や、破片が散在した状態であった。石器は石鏃13点、石槍、石匙3点、スクレイパー類14点、石篋、楔形石器、石錐、石核、R・F4点、打製石斧、磨製石斧3点、敲石2点、磨石2点、半円状扁平打製石器10点、礫器2点、台石2点が出土した(33~58)。土製品はミニチュア土器8点、土器片利用円盤、有孔土製品、鐸形土製品が出土した(59~69)。石製品は軽石製品が出土した(70)。

[小結] 時期は炉体土器から、縄文時代前期末と考えられる。また、廃絶後は遺物の廃棄が行われ、捨て場として使用された。

第8号竪穴住居跡(図28~34、写真12・143~145)

[位置・確認] 南側調査区、VIP-206グリッドに位置しており、IV層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 第18~20・33・34・213号土坑と重複しており、本竪穴住居が新しい。

[構造] 西側が調査区外に及び、全容は不明である。平面形状は楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は南側がほぼ垂直に立ち上がるが、北側は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-105° -Eと推定される。検出面の長軸は438cm残存しており、短軸は654cm残存している。深さは84cmであった。ピット1・6は支柱穴と考えられ、ピット2は棟持柱の可能性が考えられる。壁溝は検出した範囲でほぼ全周する。

[堆積土] 黒褐色土・暗褐色土・褐色土を主体とする。また、3・5層を主体に多量の遺物が廃棄されている。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

[出土遺物] 土器は主に円筒上層a式が出土した(1~23)。それらは、個体土器が横位で潰れた状態や、破片が散在した状態であった。1・2は円筒下層d2式と考えられ、同一個体の可能性がある。底面には穿孔と考えられる痕跡がみられる。4は大木系土器と考えられる。石器は石鏃3点、石槍2点、石匙、スクレイパー類2点、楔形石器、石錐2点、R・F、U・F、打製石斧、磨製石斧、敲石5点、凹石2点、磨石7点・半円状扁平打製石器3点、砥石、石錘2点が出土した(24~42)。

[小結] 時期は床面出土遺物から、縄文時代前期末から中期前葉と考えられる。また、廃絶後は遺物の廃棄が行われ、捨て場として使用された。

第9号竪穴住居跡(図35~37、写真2・13~16・145)

[位置・確認] 南側調査区、VIM-211グリッドに位置しており、IV層で黒色土の広がりとして確認した。

[重複] 第21・28・30~32・41・47~49・78・81号土坑と重複しており、本竪穴住居が新しい。

[構造] 平面形状は隅丸長方形である。床面は平坦で、壁は外傾かほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は、N-35° -Eである。検出面の長軸は14.64m、短軸は8.92mである。床面の長軸は14.04m、短軸は8mである。深さは72cm、床面積は96.02㎡であった。炉跡は中軸上から地床炉を4基検出した。中軸線を挟み支柱穴と考えられるピット、中軸線の両端に棟持柱の可能性が考えられるピットを検出した。壁溝はほぼ全周すると考えられる。土坑は壁寄りから4基検出しており、いずれも浅い掘り込みである。

〔堆積土〕 黒色土・暗褐色土・褐色土を主体とする。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕 遺物は少なく、散在した状況であった。土器は円筒上層a式と縄文時代後期前葉の土器が出土した（1～10）。1は横位で潰れた状態であった。石器は石鏃4点、石槍、スクレイパー類3点、石篋、R・F2点、敲石2点、凹石2点、磨石4点、半円状扁平打製石器3点、台石が出土した（11～19）。土製品はミニチュア土器3点と土器片利用土製品が出土した（20～23）。

〔時期〕 出土遺物から、縄文時代中期前葉以前と考えられる。

第10号竪穴住居跡（図38～41、写真17・146）

〔位置・確認〕 南側調査区、VI I-224グリッドに位置する。V層で、黒褐色土の広がりとして確認した。なお、本遺構は拡張が行われており、古段階のものに関しては、新段階の床面精査時に確認した。

〔構造〕 前記の通り、本遺構は拡張が行われているため、以下【古段階】と【新段階】に分けて、それぞれの構造を記載する。

【古段階】 楕円形を呈し、確認時における長軸は576cm、短軸は460cm、底面の長軸は560cm、短軸は446cmで、残存する深さは14cm、床面積は20.15m²である。主軸方位はN-48.6° -Eである。貼床は施されておらず、床面は平坦に仕上げられている。壁は外傾して立ち上がる。中央やや北東よりに掘り込みの浅い地床炉（炉1）があり、それを挟んで、支柱穴が中軸線上に2本配置される（ピット1・2）。また、西から北側には壁柱穴と考えられる小ピットが確認されている。

【新段階】 楕円形を呈し、確認時における長軸は868cm、短軸は766cm、底面の長軸は817cm、短軸は701cmで、深さは85cm、床面積45.73m²である。主軸方位はN-35.3° -Eである。古段階の堆積土上位には堅くしまった褐色土が確認されており、新段階における貼床と考えられる。中央付近に浅い凹みを確認され（炉2）、地床炉の可能性が高いが、火床面は確認されていない。その炉を囲むように4本の支柱穴（ピット3～6）が配される。北西側の一部には壁溝が確認されている。

〔堆積土〕 黒褐色土および暗褐色土を主体とする。ローム粒やロームブロックを含み、総じて人為堆積と考えられるが、上位層の一部は自然堆積の可能性もある。また、1・2層は多量の土器を包含する。

〔出土遺物〕 堆積土中から円筒下層d～上層a式が出土している（1～5）。石器は、石篋、スクレイパー類、石錐、R・F、U・F、磨製石斧、石錘、敲石、半円状扁平打製石器6点、磨石、砥石が出土している（6～15）。土製品は、土器片利用土製品（16）が出土している。

〔時期〕 堆積土出土遺物より、縄文時代前期末から中期前葉頃と考えられる。

第11号竪穴住居跡（図42～48、写真2・18～20・147～148）

〔位置・確認〕 南側調査区、VI Q-209グリッドに位置しており、IV層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 第43号竪穴住居と第45・67・110・115・46号土坑と重複する。本竪穴住居は、第43号竪穴住居跡と第45・67・110・115号土坑より新しく、第46号土坑より古い。

〔構造〕平面形状は楕円形である。床面は平坦で、壁は外傾かほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は、N-74° -Eである。検出面の長軸は740cm、短軸は506cmである。床面の長軸は656cm、短軸は416cmである。深さは108cm、床面積は22.172㎡であった。炉は中軸上の中央付近で1基検出した。浅い掘り込みの底面に、土器の底が外面を上にした状態で置かれており、その上に間層を挟み3面の土器片敷きを確認した。それらの破片は、口縁部を欠損するが、同一個体であった(1)。炉を囲むように支柱穴と考えられるピット、中軸線の両端から棟持柱の可能性が考えられるピットを検出した。壁溝は全周せず、壁際の一部から小ピットを検出した。

〔堆積土〕黒色土や褐色土を主体に、下位に遺物が廃棄されている。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕1は炉1、2はピット3から出土しており、円筒下層d2～上層a1式と考えられる。また、下位からまとまって遺物が出土した。土器は主に円筒上層a式が出土した(4～11)。それらは個体土器が、横位や横位で潰れた状態であった。石器は石鏃3点、石槍、石匙2点、スクレイパー類6点、U・F2点、石核、磨製石斧4点、敲石、凹石3点、磨石5点、半円状扁平打製石器4点、礫器、台石が出土した(12～29)。石製品は軽石製品が出土した(30)。

〔小結〕炉1出土土器から、縄文時代前期末から中期初頭と考えられる。また、廃絶後は遺物の廃棄が行われ、捨て場として使用された。

第12号竪穴住居跡(図49、写真21・148)

〔位置・確認〕南側調査区、VI I-222グリッドに位置する。IV層で黒褐色土の広がりを確認した。

〔構造〕円形を呈し、確認時における長軸は323cm、短軸は290cm、底面の長軸は308cm、短軸は274cmで、深さは38cm、床面積は6.955㎡である。主軸方位はN-126° -Eである。貼床は施されておらず、床面は東側に向かいやや傾斜して下がる。壁は外傾して立ち上がる。炉は床面中央やや南東よりに楕円形の地床炉が付属する。3本の支柱穴と考えられるピット(ピット4～6)が確認されている。西から北壁際には壁溝が付属する。

〔堆積土〕黒褐色土および暗褐色土を主体とした、人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕床面直上から円筒下層d2式土器(1)、砥石(8)が出土しているほか、堆積土から円筒下層d～上層a式土器が出土している(2～4)。石器は、磨製石斧3点(5～7)と砥石が2点出土している。

〔時期〕床面直上出土遺物より、縄文時代前期末(円筒下層d2式期)と考えられる。

第13号竪穴住居跡(図50、写真22・148)

〔位置・確認〕南側調査区、VI D-222グリッドに位置しており、III層で同色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第17・13・16号土坑と重複する。本竪穴住居は第17号土坑より新しいが、第13・16号土坑との新旧関係は不明である。

〔構造〕緩斜面に構築されており、壁は北西側のみ検出した。平面形状は円形か楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-126° -Eと推定される。炉は中軸上から

地床炉を1基検出した。ピット3・8・9は主柱穴と考えられ、北西側から壁柱穴と考えられるピットを検出した。

〔堆積土〕黒褐色土を主体とする。堆積状況から、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕円筒下層d～上層a式の破片が出土した（1・2）。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代前期末以降と考えられる。

第14号竪穴住居跡（図51、写真22・148）

〔位置・確認〕南側調査区、VIK-208に位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第24・35号土坑と重複する。本竪穴住居は第24号土坑より古い、第35号土坑との新旧関係は不明である。

〔構造〕南西側が調査区外に及び、全容は不明である。平面形状は楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-52° -Eである。検出面の長軸は512cm残存しており、短軸は366cmである。深さは60cm、床面積は13.22㎡と推定される。壁際からピットを検出した。

〔堆積土〕上位は黒褐色土、下位はローム土や褐色土を主体とする。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕2層から円筒上層a式の土器が出土した（1・2）。石器は石鏃、敲石、半円状扁平打製石器が出土した（3）。

〔時期〕出土遺物から、縄文時代中期前葉以前と考えられる。

第15号竪穴住居跡（図52～60、写真23・149～151）

〔位置・確認〕南側調査区、VIC-219グリッドに位置する。IV層で黒色土の広がりを確認した。

〔重複〕第42・43号土坑より古く、第56号土坑より新しい。第16号竪穴住居跡と近接するが、重複の有無は不明である。

〔構造〕南西側が調査区外へ及ぶため、明確な平面形は不明だが、楕円形を呈すると考えられる。確認時における長軸は556cm残存し、短軸は668cm残存する。底面の長軸は536cm残存し、短軸は657cm残存する。深さは51cmで、残存部分の床面積は25.39㎡である。主軸方位はN-34° -Eである。貼床は施されておらず、床面は、東側に向かいやや傾斜を下げる。壁は、外傾して立ち上がる。炉は、確認された範囲の中央やや南東よりで土器埋設炉（炉1）および、南東側に隣接して浅く凹む地床炉が確認されている。また、南東隅で焼土が確認されており、地床炉の可能性もある。北西から北東側にかけて壁柱穴が2列並ぶ箇所が確認されること、北東側の壁が一部不自然にくびれること、北西側の一部では床面が段を有することなどから、本遺構は拡張あるいは複数の遺構が重複している可能性がある。柱穴と考えられるピットは複数確認されているが、先述の通り、拡張あるいは複数の遺構が重複する可能性があることから、柱穴配置は不明である。

〔堆積土〕ローム粒や焼土を含む、人為堆積と考えられる。2・4層からは多数の復元個体が出土している。

〔出土遺物〕炉1の炉体として円筒下層d2式土器（1）が出土しているほか、主に2・4層から円筒下層d～上層a式土器が出土している（2～27）。石器は、石鏃、石筥、スクレイパー類2点、石核、

R・F 3点、磨製石斧2点、抉入扁平磨製石器、敲石2点、半円状扁平打製石器8点、台石が出土している(28~34)。そのほか、ミニチュア土器(35~38)、石製品(39・40)が出土している。

[小結] 炉体土器から、縄文時代前期末(円筒下層d2式期)と考えられる。また、本遺構廃絶後は、中期初頭頃まで捨て場として利用されていたと考えられる。

第16号竪穴住居跡(図61~66、写真24・25・152・153)

[位置・確認] 南側調査区、VID-217グリッドに位置する。V層で、黒褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 第18・19号竪穴住居跡より新しい。また、第15号竪穴住居後と近接するが、重複の有無は不明である。

[構造] 調査区外へ及ぶため、明確な平面形は不明だが、楕円形を呈すると考えられる。確認時における長軸は842cm残存し、短軸は701cm残存する。底面の長軸は820cm残存し、短軸は646cm残存する。主軸方位はN-37°-Eである。深さは121.6cmで、残存する床面積は55.32m²である。貼床は施されておらず、床面は東側に向かい緩やかに傾斜を下げる。緩斜面上に構築されており、西側の壁は外傾して立ち上がるが、南東側の立ち上がりは判然としない。

炉は、中央やや東寄りに周堤炉(炉1)と石囲炉(炉2)の2基が確認された。炉1は、地床炉として機能した(炉1下面)後、環状に周堤が構築されており、最終的には周堤炉として機能していたと考えられる(炉1上面)。炉2は、一部のみが残存しているが、板状礫を環状に巡らせた石囲炉である。ただし、最終段階の支柱穴と考えられるピット10と重複し、石囲炉が新しいことから、炉2は本遺構に付属しない可能性がある。

壁溝と壁柱穴の配置、ピット1・2・4の柱痕が重複することなどから、本遺構は、少なくとも2度以上建て替えられたと考えられる。最終段階においては、ピット1・2・4・8・10・6が支柱穴と考えられる。南西側が調査区外に及ぶことを考慮すると、本遺構は6本以上の支柱穴を有することが予想される。

[堆積土] 黒褐色土や暗褐色土を主体とし、ロームブロックや軽石が混じる。総じて人為堆積と考えられるが、上位は自然堆積の可能性もある。2層からは復元個体を多数含む、多量の土器が出土している。

[出土遺物] 堆積土中からは、円筒下層c~d式土器が出土している(1~16)。13は大木系土器の可能性もある。石器は、石鏃7点、スクレイパー類11点、R・F 5点、磨製石斧2点、磨石2点、凹石3点、敲石9点、半円状扁平打製石器13点、砥石、台石2点、柱状節理の棒状礫が出土している(17~35)。土製品は、ミニチュア土器(36~40)、土器片利用円盤(41)、土器片利用土製品(41)が出土している。

[時期] 堆積土出土遺物より、縄文時代前期末(円筒下層d2式期)頃と考えられる。

第17号竪穴住居跡(図67、写真26)

[位置・確認] 南側調査区、VIG-213グリッドに位置する。周辺は攪乱により大きく削平されていたため、50cmほど掘り下げ、柱穴群と一部壁が残存している箇所を確認した。

〔重複〕第36号土坑と重複するが、新旧関係は不明である

〔構造〕攪乱のため、明確な平面形・規模は不明である。残存する深土は24cmである。貼床は施されておらず、床面は、東側に向かい、緩やかに傾斜を下げる。北西側の壁が一部残存し、ほぼ垂直に立ち上がる。炉は確認されていない。柱穴は複数確認されたが、支柱穴や柱穴配置等は不明である。

〔堆積土〕暗褐色土、黒褐色土にローム粒が混入する。人為堆積の可能性があるが、残存部分が少ないため、詳細は不明である。

〔出土遺物〕堆積土中から円筒下層d式土器が出土している。

〔時期〕堆積土出土遺物より縄文時代前期末頃と考えられる。

第18号竪穴住居跡（図68、写真26）

〔位置・確認〕南側調査区、VIF-218に位置しており、Ⅲ層で黄褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第19・16号竪穴住居跡と第59号土坑と重複しており、第18号竪穴住居跡、第19号竪穴住居跡、第16号竪穴住居跡の順に新しい。第59号土坑との新旧関係は不明である。

〔構造〕平面形状は楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-40° -Eである。検出面の長軸は416cm残存しており、短軸は340cm残存している。深さは64cmであった。ピットと西側から壁溝を検出した。

〔堆積土〕黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土を主体に、ローム土が混入する。堆積状況から、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕土器は円筒下層d～上層a式の破片が出土した。石器は磨石が出土した。

〔時期〕重複関係から、縄文時代前期末以前と考えられる。

第19号竪穴住居跡（図68、写真26・154）

〔位置・確認〕南側調査区、VIE-218グリッドに位置しており、第18号竪穴住居跡の床面で確認した。

〔重複〕第19・16号竪穴住居跡と重複しており、第18号竪穴住居跡、第19号竪穴住居跡、第16号竪穴住居跡の順に新しい。

〔構造〕床面の一部を検出したのみで、詳細は不明である。床面は平坦で、西側から壁溝、東側から壁柱穴と考えられるピットを検出した。

〔出土遺物〕円筒下層d式の破片が出土した（1）。

〔時期〕重複関係から、縄文時代前期末以前と考えられる。

第20号竪穴住居跡（図69、写真27・154）

〔位置・確認〕南側調査区、VIH-214グリッドに位置する。Ⅳ・Ⅴ層で褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第30号竪穴住居跡、第57号土坑より新しく、第58号土坑より古い。

〔構造〕攪乱により、明確な平面形は不明だが、1辺が304cm以上の円形か楕円形を呈すると考えられる。残存する深さは29.6cmである。主軸方位はN-31° -Eと推測される。床面には若干の起伏があり、壁は、床面から外傾して立ち上がる。また、北東側の床面は一段高くなっており、いわゆる

「テラス状遺構」であった可能性もあるが、他遺構が重複している可能性も考えられ、詳細は不明である。炉は、土器埋設炉である（炉1）。炉内堆積土からは土器片が出土しており、土器片敷だった可能性もあるが、攪乱により不明である。柱穴等も複数確認されたが、遺構の重複や攪乱のため、どの柱穴が本遺構にともなうかは不明である。

〔堆積土〕 褐色土を主体とし、全体にロームが混入する。人為堆積の可能性はあるが、攪乱により、詳細は不明である。

〔出土遺物〕 炉内堆積土および堆積土中から円筒下層d～上層a式土器が出土しており、炉体（1）、炉内堆積土出土土器（2～5）を図示した。石器は、石鏃2点、スクレイパー類、磨製石斧、台石が出土している（6～8）。

〔時期〕 炉体土器および炉内出土土器より、縄文時代前期末から中期初頭と考えられる。

第21号竪穴住居跡（図70～87、写真3・28～31・154～161）

〔位置・確認〕 南側調査区、VI I～K-217～220グリッドに位置しており、IV層で黒色土の広がりとして確認した。

〔重複〕 第8・9・10・12号埋設土器と重複しており、本竪穴住居跡が古い。

〔構造〕 計3回の構築及び建て替えが行われている。壁溝及び壁柱穴列の配置から初期のⅠ期では隅丸方形に近い楕円形、続くⅡ期と最終段階のⅢ期では長楕円形を呈していたと推定される。長軸×短軸はⅢ期の検出面で14.2×10.72m、Ⅱ期の壁柱間で13.85×9.77m、Ⅰ期の残存壁及び壁柱間で11.58×9.1mで、床面積はⅢ期で120.472㎡、Ⅱ期で115㎡、Ⅰ期で88㎡、深さはⅢ期で132cm、主軸方位は各期N-62° -Eであったと推定される。床面はⅠ期においてV層中に平坦に作られ、Ⅱ期又はⅢ期において拡張した床面の凹凸と、旧施設を覆う貼床がなされる。Ⅲ期の壁は傾斜しているが、亀裂・ズリ落ち箇所も多く認められたため、崩落の結果であることも考えられる。炉跡は、炉1・炉2とした竪穴炉が貼床上面で、炉3・炉4の地床炉が貼床直下で検出された。柱穴は貼床上でピット2～5・7～9・20・21が一部のⅢ期壁柱穴・壁溝とともに、貼床直下ではピット12・24が一部のⅠ・Ⅱ期壁柱穴・壁溝とともに検出された。Ⅲ期では、深さ90cmを超えるピット1～3・5～7の6基が支柱穴であったと考えられ、774×400（ピット1－5間は343）cmの長方形配置をなしていたと考えられる。Ⅰ期及びⅡ期の支柱穴は不明であるが、ピット5に見られる柱痕土層と柱アタリの不整合等から、同一柱穴内での数次にわたる柱の建て替えも想定される。

〔堆積土〕 黒褐色土及び暗褐色土を主体とし、2～3層では土器を中心とした廃棄層が形成される。また、5層は、ピット2とピット3直上で落ち込んで直下の土層と不整合をなし、ピット3中では4個体分の土器を伴っていた。2～3層とともに5層も人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕 堆積土中に形成された廃棄層からは、円筒下層d1～d2式土器を中心とした大量の遺物が出土した。石器は石鏃・石槍・石匙・石篋・石錐・楔形石器・スクレイパー・石核・打製石斧・磨製石斧・敲石・凹石・磨石・半円状扁平打製石器・擦り切り具・挟入扁平磨製石器・礫器・台石（85～161）が、土製品ではミニチュア土器・土器片利用円盤・環状土製品等（162～194）と、石棒を含む石製品（195～198）が出土した。

〔小結〕 出土土器から、縄文時代前期末葉の円筒下層d1式期に構築、建て替え、廃絶し、円筒下層d2

式期から中期初頭の円筒上層a1式期にかけては捨て場として使用されたものと考えられる。

第22号竪穴住居跡（図88～91・96～100、写真3・32～39・162～164）

〔位置・確認〕調査区ほぼ中央VIN-217～VIL-218に位置する。V層面に黄褐色土で楕円形範囲のなかに黒褐色土が入るドーナツ状の広がりとして確認した。西側が第23号竪穴建物跡と重複しているが、検出時は重複の境界を区分できず新旧も確定できなかった。精査により床面遺物から、本建物跡が新しく第23号竪穴建物跡が古いことが確認された。

〔堆積土〕検出範囲に5本のベルトを設定し掘り下げた。全体に暗褐色土を主体とし、混入率の多寡はあるもののほとんどの層に焼土粒、炭化物粒を含む。周壁の崩落や多少の流入土はあると思われるが、大半は人為に埋められた廃棄土と考えられる。覆土中の土器片の出土も多い。

第22号竪穴建物跡においては、図示したように東端土層ベルトの表裏となるA-A'とB-B'でも整合性をとることができなかった。分層に際して、土色を詳細に捉えきれなかったことは否めないが、第22号竪穴建物跡の範囲内では、土層図に見られるようにS I 22-a～dまで4棟の重複であることが見て取れる。

〔構造〕本竪穴建物跡は、各土層面と一部の段差や柱穴の並びから、ほぼ同一範囲に複数棟の重複ないしは拡張が認識されたが、各々を面的に捉えることができず詳細に把握されてはいない。これらについては後述するが、各々建物跡は柱穴の並びだけから想定したもので、以下に記載する各炉跡や施設がどの建物跡に帰属するかは不明である。

全体の範囲として捉えられる本竪穴建物跡の最大規模は、長軸約900cm、短軸約600cmで、形状は隅丸長方形ないしは楕円形である。全体範囲の面積は、約63.2㎡である。

壁は、東壁（S I 22-c）で25～30cmが残っている。土層面からは、S I 22-aで約50cm、S I 22-bで最大70cm、S I 22-dで35～50cmの高さが確認できる。床面は、東側の段差内を含めほぼ平坦である。壁溝は、本建物跡範囲内の東側壁直下に複数検出している。しかし各々が途切れておりレベル差もあり、どの建物段階の壁溝であるか明らかではない。

本竪穴建物跡範囲内からは、土器埋設炉4基と掘り込み炉1基を検出している。土器埋設炉1と掘り込み炉は近接してVIL-218西端に位置し、土器埋設炉3は掘り込み炉の北側に20cm離れて位置する。土器埋設炉4と5は、土器埋設炉3の西側に70cm程離れたVIL-217の東端に近接している。

各々の規模は、炉1が45cmの円形で深さ26cmの掘り込みに、口縁上部と底部を割った円筒上層a1式土器の胴部（316a・b）を設置している。炉体内部に割った破片を雑然と敷いており、周壁は強く焼けている。

炉2は、40cmのほぼ円形の掘り込み炉で、深さは10cmある。周壁の焼成は強い。

炉3は、耕作トレンチャーにより北側半分を壊されている。34cmの円形で深さ20cmの掘り込みに、口縁上部と底部を割った円筒上層a式土器胴部（3・4）を設置している。周壁の焼成は強い。

炉4は、36cmの円形で深さ20cmの掘り込みに、口縁部と底部を割った土器胴部（5）を設置している。炉体の一部は欠失している。胴部文様から円筒下層d式と思われる。周壁の焼成は強い。

炉5は、34cmの円形で深さ36cmの掘り込みに、口縁上部と底部を割った土器胴部（6・7）を設置している。胴部文様から円筒下層d2式ないしは円筒上層a1式の可能性がある。炉体内には、土を充填

した上に8個の礫を敷設している。礫と周壁は強く焼けている。

検出された4基の土器埋設炉と1基の掘り込み炉については、推測であるが検出の状況からみて、炉1と炉2が共伴して機能していたものと思われる。また、炉4と炉5も共伴していた可能性が高い。しかし、前記したが重複および拡張された、どの竪穴建物跡に伴うものかは把握されていない。

付帯施設として、周堤ピットと埋設土器を検出している。周堤ピットは、本竪穴建物跡南端部VI L-217に検出している。全体形状は楕円形で、第V層の黄褐色粘質土を90cm×70cmのドーナツ状に、床面から約10cmの高さで盛土している。周堤内のピットは周囲のものより大きい、深さは60cm程である。他に建物内埋設土器が検出されている。埋設土器(8)は、周堤ピットの北側に80cm程離れて設置されており、掘り方は約20cmの大きさで深さは30cmある。口縁から頸部まで割られた胴部が設置されている。土器は円筒下層d2式ないしは円筒上層a1式と思われる。

柱穴と捉えたピットは、本建物範囲内から187基検出した。前記したが、柱穴並びから6棟を想定したが、これ以外にも想定は可能である。また、これら新旧および各炉跡の帰属は不明である。

a棟、11基のピットで構成され、床面積はおよそ13.2㎡である。土層図FのS I 22-aに相当する。小型の建物跡である。b棟、15基のピットで構成され、床面積はおよそ39.6㎡である。土層図AとCに示したS I 22-bに相当するが、土層面Bでは捉えられなかった。柱穴配置から周堤ピットを伴う可能性が高い。c棟、20基のピットで構成され、床面積はおよそ48.6㎡である。土層図A～Cに示したS I 22-cに相当する。d棟、12基のピットで構成され、床面積はおよそ21.6㎡であるが、土層図に示したS I 22-dとは異なるもので想定した。土層図に示したS I 22-dは、写真34に見られるようにS I 23の覆土中に掘り込まれた、遺構のピット埋土のローム粘土で確認できたものである。

e棟、24基のピットで構成され、床面積はおよそ26.8㎡であるが、土層図に示したものではない。f棟、13基のピットで構成され、床面積はおよそ46.0㎡であるが、土層図に示したものではない。

187基のピットのうち95基のピットの並びから、6棟を想定した。建物の中央に炉が作られるものと仮定してみると、b～e棟のいずれかに土器埋設炉4・5が帰属する可能性がある。土器埋設炉1・3および掘り込み炉2が帰属する建物跡を想定できなかったが、位置的にb棟に帰属するかもしれない。残り92基のピットと組み合わせから、別の建物が多分に想定される。

[出土遺物] 土器は前記したが、床面の円筒下層d式および円筒上層a1式の土器埋設炉の炉体と、埋設土器のほか、床面直上と覆土中からは円筒上層a1式土器が主体に出土している。ほかに、それ以前の円筒下層a式や縄文時代中期中葉以降の土器片も少なからず出土している。土製品は、小型・ミニチュア土器(47・48)、土器片円盤(49～52)、周縁研磨土器片(53)、石器は、石鏃(28・29)、石錐(30・31)、石匙(32・33)、楔形石器(34)、スクレイパー(35)、磨製石斧(36・37)、敲石(38・39)、凹石(40・41)、半円状扁平打製石器(42～44)、礫器(45)、砥石(46)、石製品(54)が出土している。

[小結] 前記のとおり、柱穴から複数の重複および拡張が想定されるがそれぞれ詳細にない。本竪穴建物跡範囲内の床面からは、円筒下層d2式から円筒上層a1式土器が出土しており、概ねその時期に帰属すると捉えられる。特異な点は、周囲の竪穴建物跡もほぼ同時期で、しかも単一であるのに対し、本範囲内には複数の重複が認められることにある。特殊な遺物は出土していないが、本集落において何らかの意味をもった建物、ないしは場所であったと思われる。

第23号竪穴住居跡（図88・92～95・101～106、写真3・32～39・164～167）

〔位置・確認〕調査区ほぼ中央のVIN-216～VIL-217リッドの範囲に位置する。V層面に暗褐色土の長楕円形範囲で確認した。東側が、第22号建物跡とした複数の建物跡と重複している。検出時は重複の境界を区分できず新旧も確定できなかったが、精査により本建物跡が古く、第22号竪穴建物跡が新しいことが確認された。

〔堆積土〕第22号建物跡と同じ土層ベルトである。覆土は第22号と大きく違わないが、黄褐色土が主体で全体にやや明るい土色である。混入物にも大きな違いはないが、人為堆積なのか自然堆積なのか明確に判断できない。覆土中の土器片の出土も同様であるが、第22号建物跡範囲の破片と異なり、円筒下層d式の破片が多いことから、本遺構の方が古いと判断していた。また、各土層ベルトの北側と西側は層的にも対応し、重複の痕跡は確認されない。

〔構造〕規模は長軸約11m、短軸約7.5mで、形状は長楕円形である。全体範囲の面積は、約63.1㎡である。壁は重複している東壁を除き、西壁50～70cm、南壁50cm、北壁55cmの高さである。床面は硬く、ほぼ同一レベルで平坦である。当初、1棟の建物跡と把握していたが床面精査により、拡張・拡幅を行っていることが判明した。拡張・拡幅については後述することとし、先に検出された各炉跡と支柱穴について記述する。

炉は、周堤炉2基と掘り込み炉3基を検出している。周堤炉1と2は、検出時にピット5とピット6として精査され、周堤が設けられていることが確認された。2つとも建物跡のほぼ中央に位置しており、炭化物が多量に土と混合した楕円形範囲内に、50cm程離れて検出された。

周堤炉1（ピット5）は80cmの円形に、明黄褐色粘土がドーナツ状に盛土され、中央部分が50cmの深さで掘り抜かれている。周堤炉2（ピット6）は1m程の楕円形に、同様に粘土が盛土され、同じく40cmの深さで中央部が掘り抜かれている。ともに、中央の掘り込みから検出当初はピットとしていたが、断面に見えるように、盛土の下に炭化層と焼成層が確認されたことから炉とした。しかし、盛土が被熱しておらず、中央のピット覆土にも明確な焼成面がないことから、実際に炉として機能したものか断定できない。さらに、周堤炉2の断面を見ると、炭化層と焼成層は4層を介し互層になっており、9層を中央部のピット覆土と仮定すれば、盛土を明確にできなかったものの、もう一つ周堤炉が存在した可能性がある。構築においては、床面を浅く掘りくぼめた後、その面で火が焚かれその後、穴が掘られ盛土されるが、穴と盛土の構築順は不明である。なお、周堤内の穴は柱穴であったものかも断定できない。この2つの周堤であるが、同時存在なのか時間差があるものか不明である。ただ、周堤には高低差が認められ、周堤炉2の方が若干高く、古い方は片づけられるために低いという考えを前提にすれば、周堤炉2の下位の炭化焼成層も含め、2回の造り替えがあったものと考えられる。

掘り込み炉1～3は、周堤炉を挟むように位置する。3基とも掘り込みは浅く、床面から10cm以内の深さである。炉1と2は70cm程の円形で、炉1には薄い焼成面と炭化層が確認された。炉3は50cm程の隅丸方形で、薄い炭化層が確認された。炉1は、周堤炉1の南側に2m離れてあり、炉2は周堤炉2の北側に1.5m、炉3は周堤炉2から同じく2.5m離れている。これらは、本建物の中軸線上に並び、支柱穴と考えられるピット1～4を含め整然とした配置である。周堤炉と掘り込み炉が、各々単独で機能したとは考え難く、対になり機能したものと考えられるが、組み合わせの前後関係は不明で

ある。本建物が拡張拡張されていることは前記したが、それに伴い炉も作り替えられているものと判断される。

壁溝は、北壁から反時計回りに南壁の直下に検出された。周壁直下の壁溝は、本建物の最終段階のもので、この壁溝の内側床に断続する溝跡を検出している。床面の溝跡は、本建物の長軸方向南側を主体に4条確認される。各々の溝跡は、幅5～15cm、深さは3～10cmで見ため、端部に柱穴を伴う。断続的ではあるが弧状の溝跡と柱穴から、本建物を4回拡張拡張していることが判明した。

柱穴と捉えられるピットは、前記した主柱穴と考えられるピット1～4を含めて本建物範囲内から147基検出された。図95に、溝跡と柱穴から想定される4回の拡張・拡張された建物を示した。

1期、壁柱穴との間隔から柱穴1～4を含まない、27基のピットで構成される。床面積はおよそ37.9㎡である。周堤炉と炉2を付随するものと想定している。2期、主柱穴1～4を含む、26基のピットで構成され、床面積はおよそ46.7㎡である。付随する炉を想定できない。3期、主柱穴1～4を含む、23基のピットで構成され、床面積はおよそ52.5㎡である。付随する炉を想定できない。4期、主柱穴1～4を含む、20基のピットで構成され、床面積はおよそ59.3㎡である。付随する炉を想定できない。5期、主柱穴1～4を含む、45基のピットで構成され、床面積はおよそ63.1㎡である。最終段階掘り上がりの状態である。この他に、各期に帰属しないピット18基あるが、いずれかに時期に付随するものと思われる。

[出土遺物] 床面と直上から、円筒下層d1式土器(図101～図104)が出土している。堆積土中からは下層d1式土器を主にしながらも、他時期の土器(39～41・619)も少なからず出土している。土製品は、小型・ミニチュア土器(68～72)、石器は、石鏃(42～45)、小型石槍(46)、石匙(47・48)、石筥(49)、スクレイパー(50～56)、磨製石斧(58～60)、敲石(61～63)、凹石(65～66)半円状扁平打製石器(64)、砥石(67)が出土している。石棒(73)は堆積土上位からの出土で、SI22に伴う可能性ある。また、別項で扱った、細石刃核削片(57)が覆土から出土している。同じく覆土出土のスクレイパー(56)は縦長素材で打瘤の小ささから、細石刃の時期に帰属する可能性がある。

[小結] 床面出土遺物から、縄文時代前期末葉(円筒下層d1式期)の建物跡と考えられる。周囲の同時期の竪穴建物の中では、中位の規模であるが拡張・拡張の回数はやや多い。円筒下層d1式期の建物に拡張・拡張が多いことから、集落自体が盛行していく時期のものとして判断される。また、他には見られない、周堤炉(周堤ピット)を有することから、特異な建物であった可能性も指摘される。

第24号竪穴住居跡(図107・108、写真40・168)

[位置・確認] 南側調査区、VIG-217グリッドに位置する。IV層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 平面形は楕円形を呈し、確認時における長軸は432cm、短軸は354cmである。底面の長軸は427cm、短軸は328cmで、深さは49cm、床面積は11.28㎡である。主軸方位はN-4°-Eである。東側の一部には、黄褐色を呈した貼床が施され、床面は東側に向かいやや傾斜を下げる。壁はほぼ垂直に立ち上がる。炉は、中軸中央やや南寄りに土器埋設炉が構築される(炉1)。それを囲むように4本の主柱穴が方形に配される(ピット1～4)。また、一部途切れる部分もあるが、壁溝がほぼ全周する。北側と南側の壁際には小ピットが複数確認されている。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、中礫軽石やロームブロック等が混入する。総じて人為堆積と考えら

れるが、上位は自然堆積の可能性がある。

[出土遺物] 堆積土中から円筒下層d～上層a式土器が出土している(2・3)。炉1の炉体は円筒下層d2～上層a1式である(1)。石器は、石匙、スクレイパー類2点、半円状扁平打製石器、磨石、砥石が出土している(4・5)。

[時期] 炉体土器及び堆積土出土土器から、縄文時代前期末から中期初頭(円筒下層d2～上層a1式期)と考えられる。

第25号竪穴住居跡(図109・110、写真41・168・169)

[位置・確認] 南側調査区、VII I-217グリッドに位置する。IV層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 第60号土坑より新しい。

[構造] 平面形は円形を呈すると考えられる。確認時における長軸は385cm残存し、短軸は428cmである。底面の長軸は362cm残存し、短軸は390cmである。深さは57cmで、残存部分の床面積は12.417㎡、主軸方位はN-126°-Eである。床面は南側に向かいゆるやかに傾斜を下げ、貼床は施されていない。壁はやや外傾して立ち上がる。炉は、確認されていない。中央やや南よりに三基の支柱穴と考えられるピットが確認された(ピット1・2・3)。南側を除き、壁溝と小ピットが壁際に巡る。

[堆積土] 暗褐色土や黒褐色土を主体とし、ローム粒やロームブロックが混入する。総じて人為堆積と考えられるが、上位は自然堆積の可能性がある。

[出土遺物] 主に2層から、円筒下層c～d式土器が出土している(1～10)。11は縄文時代中期後葉の最花式土器である。石器は、スクレイパー類、半円状扁平打製石器、砥石が出土している(12・13)。

[時期] 堆積土出土遺物から、縄文時代前期後葉から末頃と考えられる。

第26号竪穴住居跡(図111・112、写真42・169)

[位置・確認] 南側調査区、VIH-214グリッドに位置する。V層で暗褐色土の広がりを確認した。

[重複] 第61号土坑より新しく、第5号埋設土器より古い。

[構造] 平面形は楕円形を呈する。確認時における長軸は995cm残存し、短軸は646cm残存する。底面の長軸は962cm、短軸は614cmで、深さは33cm、床面積は51.547㎡程である。主軸方位は、N-16°-Eである。貼床は施されておらず、床面は平坦に仕上げられ、壁は、外傾して立ち上がる。炉は、中軸線上の中央やや南寄りに2基(炉1・炉2)確認された。いずれも土器埋設炉である。炉を囲むように支柱穴と考えられる6基のピットが配される(ピット1・3・5a・6・7a・9)。作図はしていないが、発掘調査時の所見では、西側と北側の柱穴を内側にずらした痕跡を確認しており、本来あった竪穴住居を、縮小して建て替えた可能性がある。建替後の支柱はピット2・4・5b・6・7b・8の6本と考えられる。壁溝は南～南東側を除き、1条が巡る。壁溝内には小ピットも確認されている。

[堆積土] 暗褐色土を主体とし、下位には黄褐色を呈したローム質土が堆積する。人為堆積と考えられる。また、炉内堆積土については、図IIIの土層注記を参照されたい。

[出土遺物] 堆積土中から円筒下層d～上層a式土器が出土している。炉体土器は、円筒下層d2式(1)、円筒下層d2～上層a1式と考えられる(2)。石器は、石鏃、スクレイパー類、楔形石器、R・

F 2点、磨製石斧、敲石が出土している（3～6）。

〔時期〕遺構の重複関係及び炉体土器から、縄文時代前期末～中期初頭（円筒下層d2～上層a1式期）と考えられる。

第27号竪穴住居跡（図113、写真43・169）

〔位置・確認〕南側調査区、VIG-216グリッドに位置する。V層で土器埋設炉を確認し、周辺を精査したところ、小ピットが環状に巡ることを確認した。

〔構造〕不明だが、周辺の小ピットが壁柱穴の可能性もある。炉1の内部には、土器片が確認された。

〔堆積土〕竪穴住居跡の堆積土は不明である。炉内堆積土は3層に分層した。

〔出土遺物〕炉体に円筒上層a1式土器を利用している。

〔時期〕炉体土器から縄文時代中期初頭（円筒上層a1式期）と考えられる。

第28号竪穴住居跡（図114～116、写真44～47・169・170）

〔位置・確認〕南側調査区、VIL-214グリッド外に位置する。IV層で暗褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第88・182土坑より古く、第29・45号竪穴住居跡および第183号土坑より新しい。第217号土坑との新旧は不明である。

〔構造〕正確な平面形は不明だが、楕円形を呈すると考えられる。確認時における長軸は不明で、短軸は531cm、床面の長軸は不明で、短軸は492cmである。深さは13.4cmで、床面積は不明である。主軸方位はN-7° -Eである。床面は平坦に仕上げられており、壁は、床面から外傾して立ち上がる。中軸上のやや南寄りに地床炉（炉1）、やや北寄りに土器片敷の可能性のある炉（炉2）が付属する。柱穴配置についても不明な点が多いが、炉を囲むように配された10本が主柱と考えられる（ピット1～6・9・13～15）。2基の炉を囲むように方形に8本が配され、中軸上に棟持柱の可能性のある2本を配する。また、ピット7の周りを半周するように、周堤が確認されており、いわゆる「特殊施設」の可能性もある。この周堤が周囲の地山を削り出して構築したものなのか、床面にロームを貼り付けて構築したかについては、判断しがたい。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とし、ロームブロックやローム粒が混じる、人為堆積と考えられる。なお、ピット等の堆積土については、図114の土層注記を参照されたい。

〔出土遺物〕ピット6、炉2、堆積土から円筒上層a式土器が出土している（1～8）。1は、ピット6の上面から、倒立した状態で出土している。石器は、石鏃、石匙、スクレイパー類3点、R・F、凹石、半円状扁平打製石器2点、磨石が出土している（9～12）。

〔時期〕遺構の重複関係および堆積土出土遺物より、縄文時代中期初頭～前葉と考えられる。

第29号竪穴住居跡（図114・116、写真44～47・170）

〔位置・確認〕南側調査区、VIN-214グリッドに位置する。IV層で暗褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第28号竪穴住居跡および第88・182土坑より古く、第45号竪穴住居跡より新しい。また、第217号土坑との新旧は不明である。

〔構造〕平面形・規模は不明である。土器埋設炉（炉3）が本遺構に付属すると考えられる。柱穴配置は不明だが、ピット16～18が本遺構に付属すると考えられ、ピット17は棟持柱の可能性はある。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とし、ロームブロックやローム粒が混じる、人為堆積と考えられるが、断面図を作成していないため、詳細は不明である。なお、ピット等の堆積土については、図114の土層注記を参照されたい。

〔出土遺物〕炉3の炉体は、円筒下層d2～上層a1式に比定される（11）。炉内堆積土からも底部が出土している（12）が、同一個体であるかどうかについては、不明である。堆積土中からは主に円筒上層a式土器が出土している（13）。石器は、細石刃石核関連資料と磨石が出土している（14・15）。なお、細石刃石核関連資料については第3章第1節に記載があるため、そちらを参照されたい。

〔時期〕遺構の重複関係および炉3の炉体土器より、縄文時代前期末～中期初頭（円筒下層d2～上層a1式期）と考えられる。

第30号竪穴住居跡（図69、写真27・170）

〔位置・確認〕南側調査区、VIH-214グリッドに位置する。IV・V層で褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第20号竪穴住居跡より古く、第57・58号土坑との新旧は不明である。

〔構造〕明確な平面形は不明だが、円形か楕円形を呈すると考えられる。確認時における長軸は不明で、短軸は226cm残存する。主軸方位はN-35° -Eと推測される。床面の長軸は不明で、短軸は185cm残存する。深さは16cmで、床面積は不明である。貼床は施されておらず、床面はほぼ平坦に仕上げられている。壁は、外傾して立ち上がる。炉は確認されていない。北から北東側の壁際に壁溝が確認されている。周辺で複数のピットが確認されているが、本遺構にともなうかは不明であり、柱穴配置は不明である。

〔堆積土〕褐色土を主体とする。残存部分が少なく、人為堆積か自然堆積かについては、不明である。

〔出土遺物〕堆積土中から円筒下層d式土器が出土している。石器は、半円状扁平打製石器、砥石が出土している（9）。

〔時期〕遺構の重複関係から、縄文時代中期初頭以前と考えられる。

第31号竪穴住居跡（図117、写真48）

〔位置・確認〕南側調査区、VI I-211グリッドに位置しており、V層で暗褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第33号竪穴住居跡と第117号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

〔構造〕床面のみの検出で、詳細は不明である。平面形状は楕円形か隅丸長方形と推定される。床面は平坦である。主軸方位は、N-69° -Eである。床面の長軸は290cm残存しており、短軸は216cm残存している。深さは14cmであった。ピットは中軸線の南東側と壁際から検出しており、ピット1・2は支柱穴の可能性が考えられる。

〔堆積土〕暗褐色土を主体に、ローム土が混入する。堆積状況から、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕出土していない。

[時期] 堆積土から、縄文時代と考えられるが、詳細は不明である。

第32号竪穴住居跡 (図118、写真48・170)

[位置・確認] 南側調査区、VIU-208グリッドに位置しており、IV層で黒褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 北側が調査区外に及び、全容は不明である。平面形状は楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-19° -Eと推定される。検出面の長軸は152cm残存しており、短軸は206cm残存している。深さは20cmであった。壁際からピットを検出しており、ピット1は柱穴の可能性が考えられる。

[堆積土] 黒褐色土を主体に、ローム土が混入する。堆積状況から、人為堆積の可能性が考えられる。

[出土遺物] 土器は円筒下層d～上層a式の破片が出土した。石器は石鏃が出土した(1)。

[時期] 出土遺物から、縄文時代前期末以降と考えられる。

第33号竪穴住居跡 (図119、写真49・170)

[位置・確認] 南側調査区、VI I-211グリッドに位置しており、V層で暗褐色土の広がりとして確認した。

[重複] 第31号竪穴住居跡と第111・117号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

[構造] 床面の一部を検出したのみで、詳細は不明である。床面は平坦で、ピットを検出した。

[堆積土] 暗褐色土を主体に、ローム土が混入する。堆積状況から、自然堆積と考えられるが、判断し難い。

[出土遺物] 円筒下層c～d式の破片が出土した。

[時期] 出土遺物から、縄文時代前期後葉以降と考えられる。

第34号竪穴住居跡 (図120、写真50・170)

[位置・確認] 南側調査区、VIT-206グリッドに位置しており、V層で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

[構造] 西側が調査区外に及び、全容は不明である。平面形状は楕円形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-95° -Eと推定される。検出面の長軸は228cm残存しており、短軸は328cm残存している。深さは23cmであった。ピットと浅い掘り込みを検出した。

[堆積土] 灰黄褐色土を主体に、ローム土が混入する。堆積状況から、人為堆積の可能性が考えられる。

[出土遺物] 土器は円筒下層d～上層a式の破片が出土した。石器は石鏃が出土した(1)。

[時期] 出土遺物から、縄文時代前期末以降と考えられる。

第35号竪穴住居跡 (図121～123、写真50・51・171)

[位置・確認] 南側調査区、VI J-214グリッドに位置しており、IV層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第138・137号土坑と重複する。本竪穴住居は第138号土坑より古い、第137号土坑との新旧関係は不明である。

〔構造〕平面形状は円形である。床面は平坦で、壁は外傾かほぼ垂直に立ち上がる。主軸方位は、N-146° -Eである。検出面の長軸は664cm、短軸は612cmである。床面の長軸は644cm、短軸は592cmである。深さは44cm、床面積は29.78㎡であった。中軸線を挟んで支柱穴と考えられるピットを検出した。壁際から壁柱穴と考えられる小ピット、北西側から壁溝と考えられる溝跡を検出した。支柱穴は重複しており、ピット1（古）・2（古）・4・5からピット1（新）・2（新）・3・4への変遷が考えられる。

〔堆積土〕黒褐色土や褐色土を主体に、1層に遺物が廃棄されている。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性も考えられる。

〔出土遺物〕土器は円筒下層c式が出土した（1～8）。それらは、個体土器が横位で潰れた状態や、破片が散在した状態であった。石器は石鏃3点、石匙4点、スクレイパー類7点、U・F、磨製石斧、磨石2点、半円状扁平打製石器5点が出土した（9～22）。石製品は石棒が出土した（23）。

〔小結〕出土遺物から、縄文時代前期後葉以前と考えられる。また、廃絶後は遺物の廃棄が行われ、捨て場として使用された。

第36号竪穴住居跡（図124、写真52・172）

〔位置・確認〕南側調査区、VI I-213グリッドに位置しており、IV層で確認した。

〔重複〕第8号溝状土坑、第123・128・130・134号土坑と重複する。本竪穴住居は第8号溝状土坑より古い、第123・128・130・134号土坑との新旧関係は不明である。

〔構造〕床面の一部を検出したのみで、詳細は不明である。床面は平坦で、土器埋設炉1基とピットを検出した。

〔出土遺物〕炉1は円筒下層d式の土器を炉体とする（1・2）。1と2は同一個体の可能性が考えられ、埋設された底部の欠損部分を補うように、胴部上半の破片が出土した。

〔時期〕炉体土器から、縄文時代前期末と考えられる。

第37号竪穴住居跡（図125～127、写真52～54・172）

〔位置・確認〕南側調査区、VII L-213グリッドに位置しており、IV層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第181号土坑と重複しており、本竪穴住居が古い。

〔構造〕平面形状は隅丸長方形である。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-66° -Eである。検出面の長軸は498cm、短軸は322cmである。床面の長軸は474cm、短軸は304cmである。深さは42cm、床面積は13.1㎡と推定される。炉は中軸上のほぼ中央から1基検出しており、地床炉で浅く掘り込まれている。炉を囲むように支柱穴と考えられるピットを検出しており、ピット4～7、ピット4～6・8の配置が考えられる。壁溝は全周しないが、北西側は二重になっている。支柱穴や壁溝の検出状況から、建替や拡張による3期の変遷が考えられる。

〔堆積土〕黒褐色土や暗褐色土を主体に、1層に遺物が廃棄されている。堆積状況から、上位は自然

堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕土器は円筒下層c式が出土した（1～8）。それらは、個体土器が横位で潰れた状態や、破片が散在した状態であった。9は大木系土器と考えられる。石器は石匙2点、スクレイパー類2点、磨製石斧、凹石、礫器、台石が出土した（10～14）。土製品はミニチュア土器が出土した（15）。

〔小結〕時期は出土遺物から、縄文時代前期後葉以前と考えられる。また、廃絶後は遺物の廃棄が行われ、捨て場として使用された。

第38号竪穴住居跡（図128、写真55・173）

〔位置・確認〕南側調査区、VIM・N-219・220グリッドに位置しており、東側は漸移層のIV層で暗褐色土の広がりとして、西側はV層上面において硬化を伴う貼床範囲として確認した。

〔構造〕北側の壁を失っているが、残存する貼床範囲からはほぼ円形の平面形状と推定される。主軸方位は、N-143° -Eと推定される。床面はV層上面に若干の起伏をもって形成され、暗褐色土によって平坦に貼床される。壁は床面から外傾して立ち上がる。検出面での長軸は残存長で332cm、短軸328cm、床面での長軸は残存長で310cm、短軸308cm、深さは17cmである。床面積は、3.941㎡と推定される。炉は、床面中央で土器埋設炉1基を検出した。開口部43×35cm、深さ20cmの掘方に、底部を含む土器の下半部が正立で埋設される。掘方は貼床で覆われており、土器周囲の貼床上と土器の内部土層下位に焼土が形成される。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とする。下位はブロック状の土壌混入が認められ、人為堆積と思われる。

〔出土遺物〕炉から円筒下層d1又はd2式と考えられる土器下半部が出土した。

〔時期〕炉に使用された土器から、縄文時代前期末葉の円筒下層d1又はd2式期と考えられる。

第39号竪穴住居跡（図129・130、写真56・173）

〔位置・確認〕南側調査区、VIO～Q-219・220グリッドに位置しており、漸移層のIV層で暗褐色土の広がりを、耕作溝の壁面で地床炉を確認した。

〔重複〕第48号竪穴住居跡と重複しており、本竪穴住居跡が新しい。

〔構造〕北東及び南西側の壁を失っており不明であるが、残存する壁から主軸方位N-25° -Eの楕円形の平面形状であったと推定される。床面はV層上面に若干の起伏をもって形成され、炉の周囲とその西側では黒褐色土の貼床がなされる。壁は床面から外傾して立ち上がる。検出面での長軸残存長は509cm、短軸439cm、床面の長軸残存長492cm、短軸415cm、深さは14cmである。床面積は、6.962㎡と推定される。炉は、南東側の貼床上で地床炉1基を確認した。ピット6は炉に伴う施設である可能性がある。柱穴は、V層の床面でピット1～4・7・14・15・17・19の9基を、貼床下でピット8～10・13の4基を、貼床上でピット6を検出した。柱痕はピット14と、図示しなかったがピット2・10・19から検出されている。ピット4では、柱の抜き取りによるものと思われる土層の乱れが認められた。主柱穴とその配置構成については不明である。

〔堆積土〕暗褐色土の単層として認識した。含有物が少なく均質なことから、自然堆積と考えられる。

〔出土遺物〕堆積土から円筒下層d2式に相当する土器が出土した（222）。

〔時期〕出土土器から、縄文時代前期末葉と考えられる。

第40号竪穴住居跡 (図131～135、写真57・58・173・174)

〔位置・確認〕南側調査区、VIN・O-215・216グリッドに位置しており、漸移層のIV層で暗褐色土の広がり、耕作溝の壁面で土器埋設炉の断面を確認した。

〔重複〕第23・46号竪穴住居跡、第185・205・217・218号土坑と重複する。本竪穴住居跡は第205号土坑より新しく、第46号竪穴住居跡及び第185号土坑より古い。第23号竪穴住居跡及び第217・218号土坑との新旧関係については不明である。

〔構造〕南側の壁を失っており不明であるが、残存する壁から、主軸方位N-8°-Eの楕円形の平面形状であったと推定される。床面はV層中に形成され、北壁と西壁側では最大幅70cm、最大高低差18cmの不明瞭なテラス状構造が認められる。貼床はテラス部を除いた住居南側で部分的に確認されたが、地山土と酷似している事から識別が困難であり、正確な範囲把握に至らなかった。壁は床面から外傾して立ち上がり、壁溝を伴わない。検出面での長軸は残存長903cm、短軸575cm、床面の長軸残存長739cm、短軸558cm、深さは28cmである。床面積は、34.044㎡と推定される。炉は、入れ子状構造を含む土器埋設炉が6基検出された。床面中央から南側にかけて直線状に並んでおり、範囲内の貼床上面には焼土が形成される。炉2と炉5、炉3・炉4・炉6は重複しており、炉5→炉2、炉6→炉4→炉3の新旧関係が把握されている。炉3は、炉4の焼土及び炉体土器北側を破壊・掘削して構築されるが、新たに形成された焼土は炉3・炉4で連続しており、炉3構築後も炉4残存部が機能していたと考えられる。炉体土器の入れ子状構造は炉2・炉3・炉4で確認された。何れも下半部を内側に、同一個体の上部破片を外側に配して構築されている。焼土は掘方上の貼床上面と、炉体内堆積土の中位面に形成される。炉2・炉3の炉体内では、焼土面中央に長10cm前後の自然礫が置かれていた。柱穴はピット1～30の30基が検出された。ピット4・7・8・19からは柱痕が検出されたが、これらと規則的配列をとる柱穴は検出されず、主柱穴配置に関しては不明である。またピット7では柱アタリも検出されているが、第21号竪穴住居跡ピット5同様、堆積土中の柱痕土層と整合していない。

〔堆積土〕北半部で黒褐色土と黄褐色土が堆積した後、南半部が暗褐色土によって埋もれており、人為による堆積過程と考えられる。暗褐色土と地山混土の層界では土器の廃棄も認められる。

〔出土遺物〕炉内及び住居堆積土から円筒下層d2～円筒上層a2式に相当する土器(1～11)、ピット7の確認面から半円状扁平打製石器(18)、床面から台石(19・20)、貼床内から石鏟(13)、堆積土及び確認面からは石鏟(12・14)・石核(15)・磨製石斧(16・17)が出土した。

〔時期〕炉体土器と堆積土出土遺物及び他の遺構との重複関係から、縄文時代前期末から中期前葉の円筒下層d2～上層a2式期と考えられる。

第41号竪穴住居跡 (図136～139、写真59～61・174・175)

〔位置・確認〕南側調査区、VIP-216グリッドに位置する。V層で、暗褐色土の広がりを確認した。

〔重複〕第144号土坑と重複し、本遺構が新しい。

〔構造〕平面形は楕円形を呈する。確認時における長軸は793cm、短軸は657cm、床面の長軸は737cm、短軸は650cmで、深さは49.5cm、床面積の最大値は40.96㎡である。主軸方位はN-120°-Eである。貼床は施されていない。床面は概ね平坦に仕上げられているが、一部に建替前の床面と考えられる一

段高くなった箇所が確認される。壁はゆるく外傾して立ち上がる。炉は床面中央付近に6基確認されており、全て土器埋設炉である(炉1～6)。炉6は、土器内に土器片が敷かれている。炉5は周囲に明瞭な焼土や火床面が確認されていないことから、埋設土器の可能性はある。西壁付近に壁溝が3条確認されていること、床面にもピットが多数確認されていること等から、複数回の建替が行われた可能性があるが、新旧関係を把握することが困難だったため、各段階における柱穴配置や規模の変遷等の詳細は不明である。

〔堆積土〕暗褐色土や褐色土を主体とし、中礫軽石やロームブロック等が混じる。人為堆積と考えられる。炉内堆積土については、図137の土層注記を参照されたい。

〔出土遺物〕炉体土器は全て円筒下層d式である(1～6)。また、堆積土からは円筒下層d式～円筒上層a式土器が出土した(7～9)。石器は、石鏃3点、石匙、スクレイパー類3点、R・F3点、U・F、磨製石斧2点、敲石2点、凹石、半円状扁平打製石器5点が出土した(10～19)。

〔時期〕炉体土器から縄文時代前期末(円筒下層d式期)と考えられる。

第42号竪穴住居跡(図140、写真62・175)

〔位置・確認〕南側調査区、VIQ-211グリッドに位置しており、V層で暗褐色土の広がりとして確認した。

〔構造〕土器埋設炉と地床炉を検出したことから、周辺のピットを含め竪穴住居跡とした。北側は試掘トレンチにより削平されている。掘り込みは僅かで床面は平坦であった。

〔堆積土〕暗褐色土と黒褐色土を主体とする。

〔出土遺物〕炉1は円筒下層d1式の土器を炉体とする(1)。石器はスクレイパー類と台石が出土した(2・3)。

〔時期〕炉体土器から、縄文時代前期末と考えられる。

第43号竪穴住居跡(図141、写真62・63・175)

〔位置・確認〕南側調査区、VIR-209グリッドに位置しており、IV層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第206・101・188・110号土坑と第11号竪穴住居跡と重複する。本竪穴住居は第206・101号土坑より新しく、第188号土坑・第11号竪穴住居跡より古い。第110号土坑については、上部が本竪穴住居の一部であった可能性があり、新旧関係は不明とする。

〔構造〕壁はA土層と東側の一部で確認した。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。深さは66cmである。埋設土器1基とピットを検出した。

〔堆積土〕暗褐色土を主体に、ローム土が混入する。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕埋設土器1は胴部が正立の状態で埋設される(1)。2はその内部から、破片の状態で出土した。1・2は円筒下層d2～上層a1式と考えられる土器である。石器は石鏃と凹石が出土した。

〔時期〕埋設土器から、縄文時代前期末から中期初頭と考えられる。

第44号竪穴住居跡（図142～144、写真63～65・176）

〔位置・確認〕南側調査区、VIT-207グリッドに位置しており、V層で確認した。

〔重複〕第141・74号土坑と重複する。本竪穴住居は第141号土坑より古いが、第74号土坑との新旧関係は不明である。

〔構造〕炉と貼床を検出したことから、周辺の埋設土器とピットを含め竪穴住居跡とした。炉3基と埋設土器2基を検出した。炉は全て土器埋設炉である。炉1から2基の土器埋設炉を検出したが、火床面のつながりが推定されたことから1基の炉とした。炉1の南側から炉2・3、南東側から埋設土器1・2を検出した。

〔出土遺物〕炉1は円筒下層d2～上層a1式と考えられる土器を炉体とする。北東側は底部が埋設されており、内部から口縁部の破片が出土したが、同一個体か判断し難い（1）。南西側は胴部が埋設されており、部分的に二重になっている。内部から同一個体の胴部や底部の破片が出土した（2）。炉2は円筒下層d2式の土器を炉体としており、胴部が埋設される（3）。炉3は円筒下層d2～上層a1式と考えられる土器を炉体とする（4）。埋設土器1は円筒下層d2～上層a1式と考えられる土器が埋設され、胴部が正立の状態であった（5）。埋設土器2は円筒下層d～上層a式と考えられる土器が埋設される。上部は欠損し正立の状態であった（6・7）。

〔時期〕炉体土器や埋設土器から、縄文時代前期末以降と考えられる。

第45号竪穴住居跡（図114・116、写真44～47・176）

〔位置・確認〕南側調査区、VIL-214に位置する。第28・29号竪穴住居跡精査中に暗褐色土の広がりを確認した。

〔重複〕第28・29号竪穴住居跡および第9号焼土遺構と重複し、本遺構が古い。また、第182・217号土坑との新旧は不明である。

〔構造〕平面形・規模は不明である。残存部分の床面は平坦に仕上げられており、壁は、床面から外傾して立ち上がる。炉は、地床炉が1基（炉4）確認されている。柱穴配置についても不明だが、ピット10～12が本遺構に付属すると考えられる。

〔堆積土〕暗褐色土を主体とし、ローム粒やロームブロックを含む。人為堆積と考えられる。なお、ピット等の堆積土に関しては、図114の土層注記を参照されたい。

〔出土遺物〕床面から円筒下層d式土器の破片が出土している（16・17）ほか、堆積土中から円筒下層d～上層a式土器が出土している。

〔時期〕床面出土遺物より、縄文時代前期末と考えられる。

第46号竪穴住居跡（図131～133、写真57・58）

〔位置・確認〕南側調査区、VIN-216・217グリッドに位置しており、東側は漸移層のIV層で暗褐色土の広がりとして、西側はV層上面で硬化を伴う貼床範囲として確認した。

〔重複〕第23・40号竪穴住居跡と重複する。本住居跡は第40号竪穴住居跡より新しいが、第23号竪穴住居跡との新旧関係は不明である。

〔構造〕北側の一部を除く全ての壁・床が検出されなかったため、平面形状は不明である。残存する

床面はやや起伏があり、上に暗褐色土の貼床がなされる。土層断面の観察から、壁はほぼ垂直に立ち上がっていたと推測される。検出面の残存長軸は364cm、短軸は37cm、床面の残存長軸347cm、短軸は31cmで、土層観察用ベルトで計測できた深さは24cmである。

〔堆積土〕上位は黄褐色、下位は黒褐色土を主体とする。堆積状況から上位は人為と考えられる。

〔出土遺物〕1層から少量の土器片が出土した。

〔時期〕他遺構との重複関係から、縄文時代前期末から中期初頭と考えられる。

第47号竪穴住居跡（図145、写真65）

〔位置・確認〕南側調査区、VIT-210グリッドに位置しており、V層で黒褐色土の広がりとして確認した。

〔重複〕第219号土坑と重複しており、本竪穴住居が新しい。

〔構造〕土坑の可能性も考えられるが、ピットを検出したことから、竪穴住居跡とした。北側が調査区外に及び、全容は不明である。平面形状は隅丸長方形と推定される。床面は平坦で、壁は外傾して立ち上がる。主軸方位は、N-21.5°-Eと推定される。検出面の長軸は88cm残存している。床面の長軸は80cm残存しており、短軸は180cm残存している。深さは62cmであった。西壁際でピットを検出した。

〔堆積土〕黒褐色土やにぶい黄褐色土を主体に、下位にローム土が混入する。堆積状況から、上位は自然堆積と考えられる。下位については、人為堆積の可能性が考えられる。

〔出土遺物〕円筒下層d～上層a式の破片が出土した。

〔時期〕重複関係から、縄文時代中期初頭以降と考えられる。

第48号竪穴住居跡（図146・147、写真66・176）

〔位置・確認〕南側調査区、VIP・Q-220グリッドに位置しており、第39号竪穴住居跡の床面上で、貼床とは異なるV層の再堆積範囲として確認した。

〔重複〕第39号竪穴住居跡及びピット73と重複しており、本竪穴住居跡が古い。

〔構造〕北側の壁を失っているが、残存する壁と柱穴配置から主軸方位N-33°-Eの楕円形の平面形状であったと推定される。床面はローム土のV層中に平坦に形成され、全体に暗褐色と黄褐色土の貼床がなされる。壁は、下位が床面から垂直に、上位が外傾して立ち上がる。検出面での長軸残存長は381cm、短軸353cm、床面の長軸残存長371cm、短軸274cm、深さは71cmである。残存する床面積は5.240㎡である。炉は、貼床中央部で竪穴炉1基を検出した。開口部51×44cm、深さ6cmの竪穴の南西側底面・壁面に焼土が形成される。柱穴は壁溝上で壁柱穴15基、床面上でピット1、貼床下でピット6・7の2基、貼床との関係が不明な北東側でピット2・3・5の3基を検出したが、主柱穴配置については不明である。貼床下からは住居内埋設土器も1基検出されている。開口部25×22cm、深さ23cmの掘方に、深鉢下半部が倒立・斜位で埋設されていた。

〔堆積土〕V層土粒・ブロックが混入する暗褐色土を主体とする。V層土は上位、次いで下位に多く含有するが、総じて人為堆積と考えられる。

〔出土遺物〕埋設・床面・ピット1上面から円筒下層d1式土器（1～3）が、1層からは石棒破片

(4・5) が出土している。

[時期] 床面及びピット5出土土器から、縄文時代前期末葉の円筒下層d1式期と考えられる。

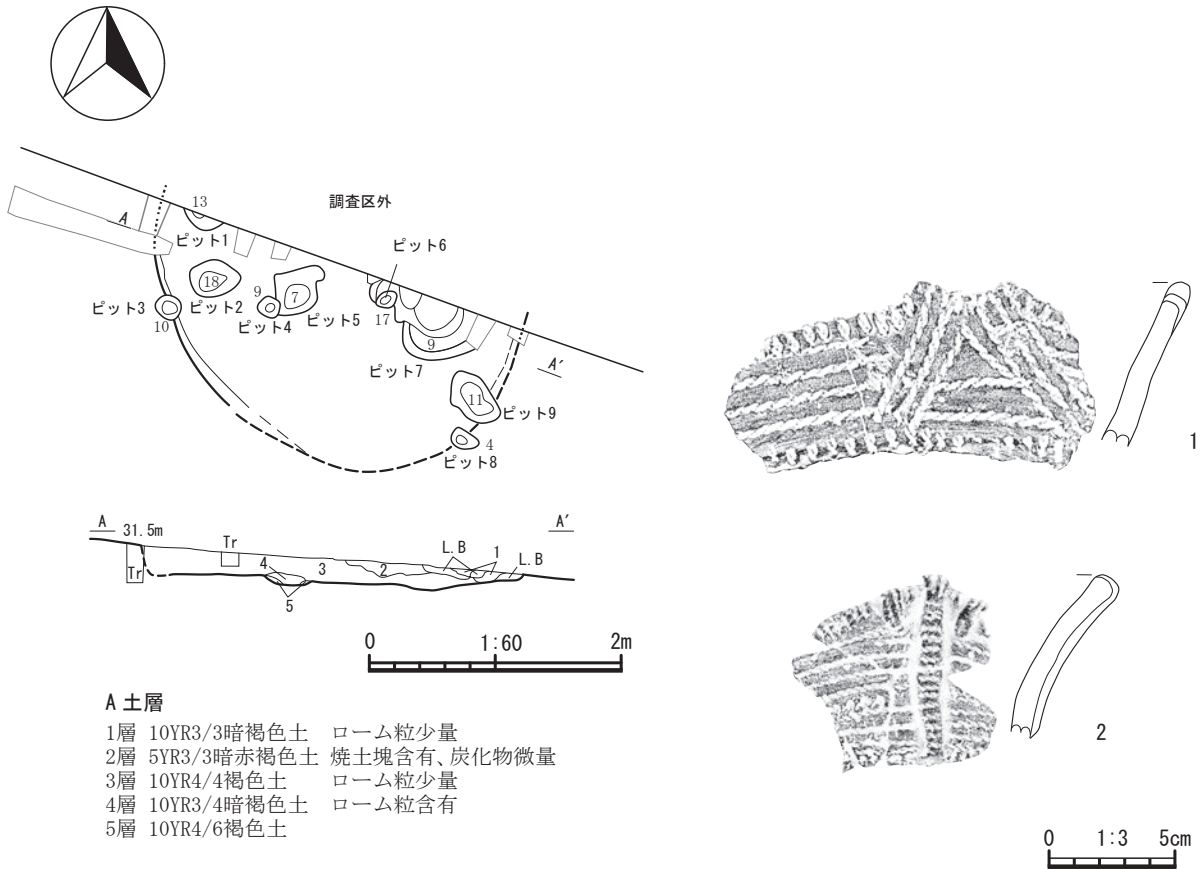
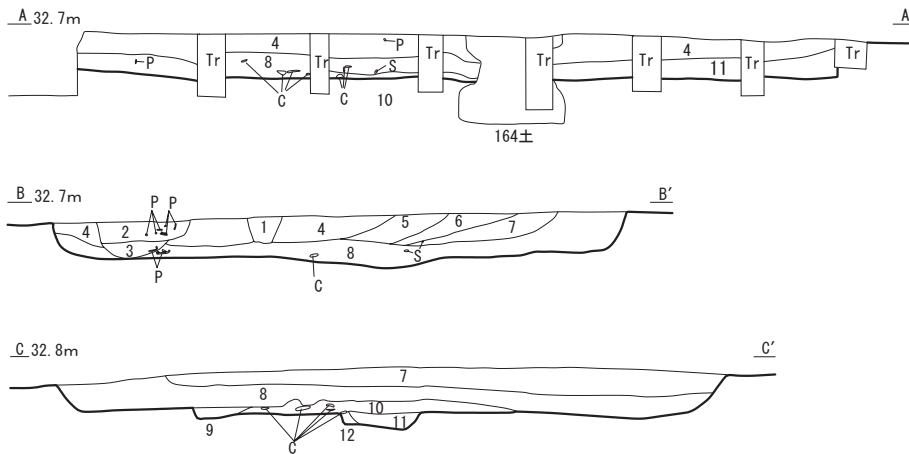
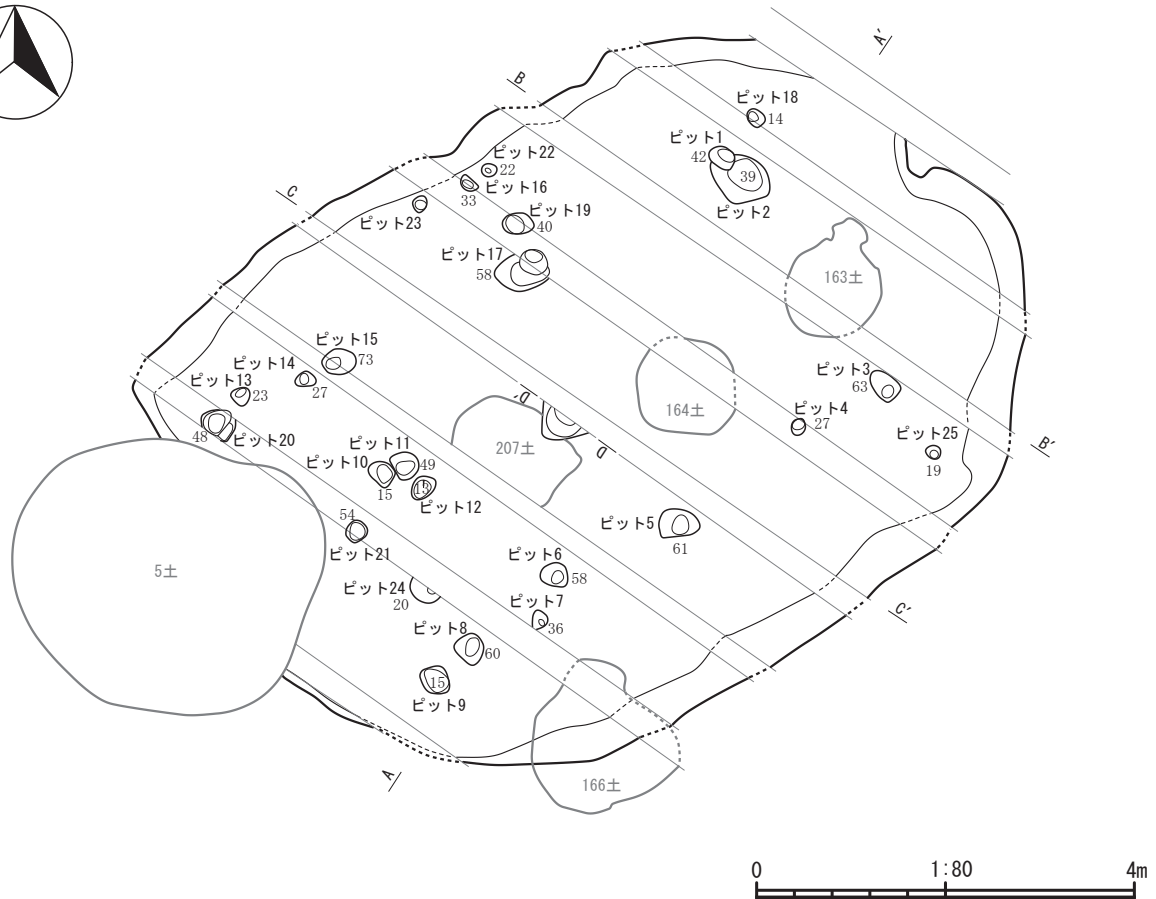


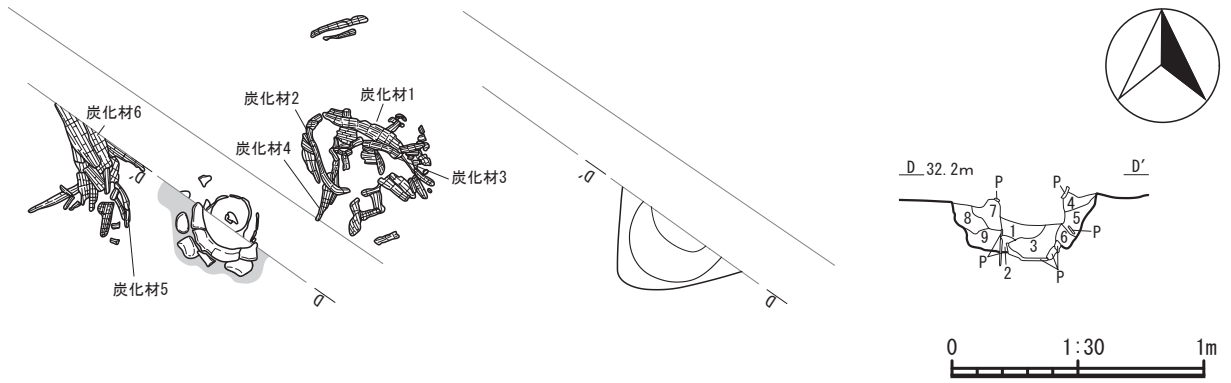
図9 第1号竪穴住居跡



A・B・C土層

1層	10YR2/3黒褐色土	炭化物1~5mm1%、南部軽石1~5mm1%、中掬軽石1mm1%
2層	10YR4/6褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、炭化物1~5mm1%、南部軽石1~5mm1%、中掬軽石1mm1%
3層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/6褐色土5%、炭化物1~10mm1%、南部軽石1~20mm1%、中掬軽石1mm1%
4層	10YR5/4にぶい黄褐色土	10YR5/8黄褐色土5%、炭化物1~10mm1%、南部軽石1~10mm1%
5層	10YR6/8明黄褐色土	10YR6/4にぶい黄橙色土10%、南部軽石1~30mm2%
6層	10YR4/3にぶい黄褐色土	10YR5/4にぶい黄褐色土10%、炭化物1~5mm1%、南部軽石1~5mm1%、中掬軽石1mm1%
7層	10YR4/6褐色土	10YR5/6黄褐色土10%、南部軽石1~5mm1%、中掬軽石1mm1%
8層	10YR4/4褐色土	10YR2/3黒褐色土10%、5YR6/8橙色焼土1%、炭化物1~30mm1%、南部軽石1~50mm1%、中掬軽石1mm1%
9層	10YR4/3にぶい黄褐色土	10YR5/8黄褐色土10%、5YR6/8橙色焼土2%、炭化物1~40mm10%、南部軽石1~10mm1%、中掬軽石1mm1%
10層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/6褐色土5%、5YR6/8橙色焼土5%、炭化物1~50mm20%、南部軽石1~10mm1%、中掬軽石1mm1%
11層	10YR4/4褐色土	10YR5/8黄褐色土30%、炭化物1~10mm1%、南部軽石1~30mm1%、中掬軽石1mm1%
12層	10YR5/8黄褐色土	10YR4/4褐色土40%、炭化物1~20mm2%

図10 第2号竪穴住居跡



炉1 (D土層)

1層	10YR2/2黒褐色土	10YR4/6褐色土10%、炭化物5%
2層	10YR3/2黒褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、炭化物3%
3層	10YR2/3黒褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、焼土3%、炭化物5%
4層	2.5YR5/6赤褐色土	10YR2/2黒褐色土3%、炭化物5%
5層	10YR5/4こぶい黄褐色土	10YR3/2黒褐色土5%、炭化物1%
6層	10YR2/2黒褐色土	10YR5/6黄褐色土1%、炭化物3%
7層	10YR2/3黒褐色土	10YR7/6明黄褐色土5%、焼土1%、炭化物5%
8層	10YR4/6褐色土	10YR3/2黒褐色土10%、焼土1%、炭化物3%
9層	10YR5/6黄褐色土	10YR3/1黒褐色土5%、炭化物5%

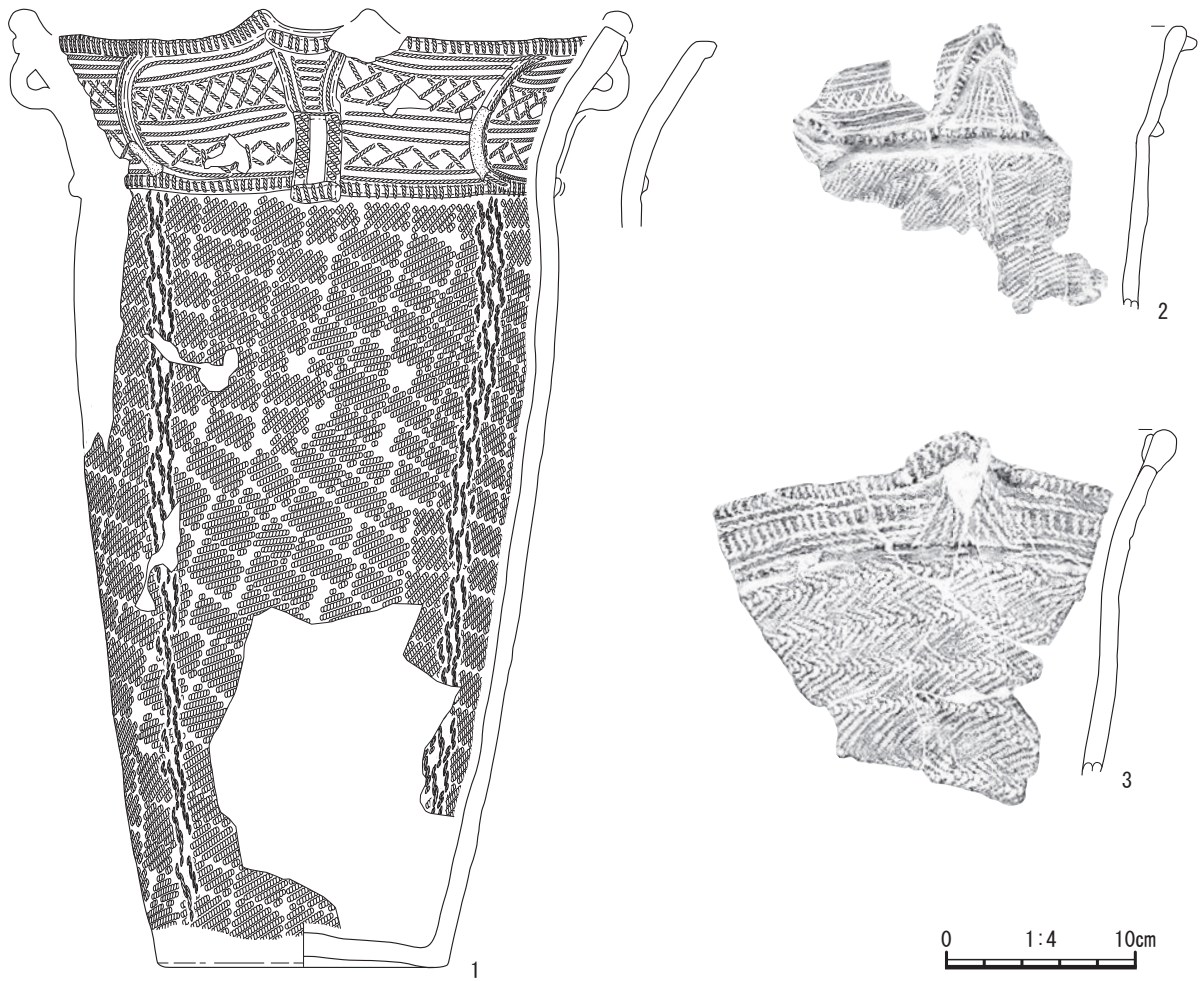


図11 第2号竪穴住居跡

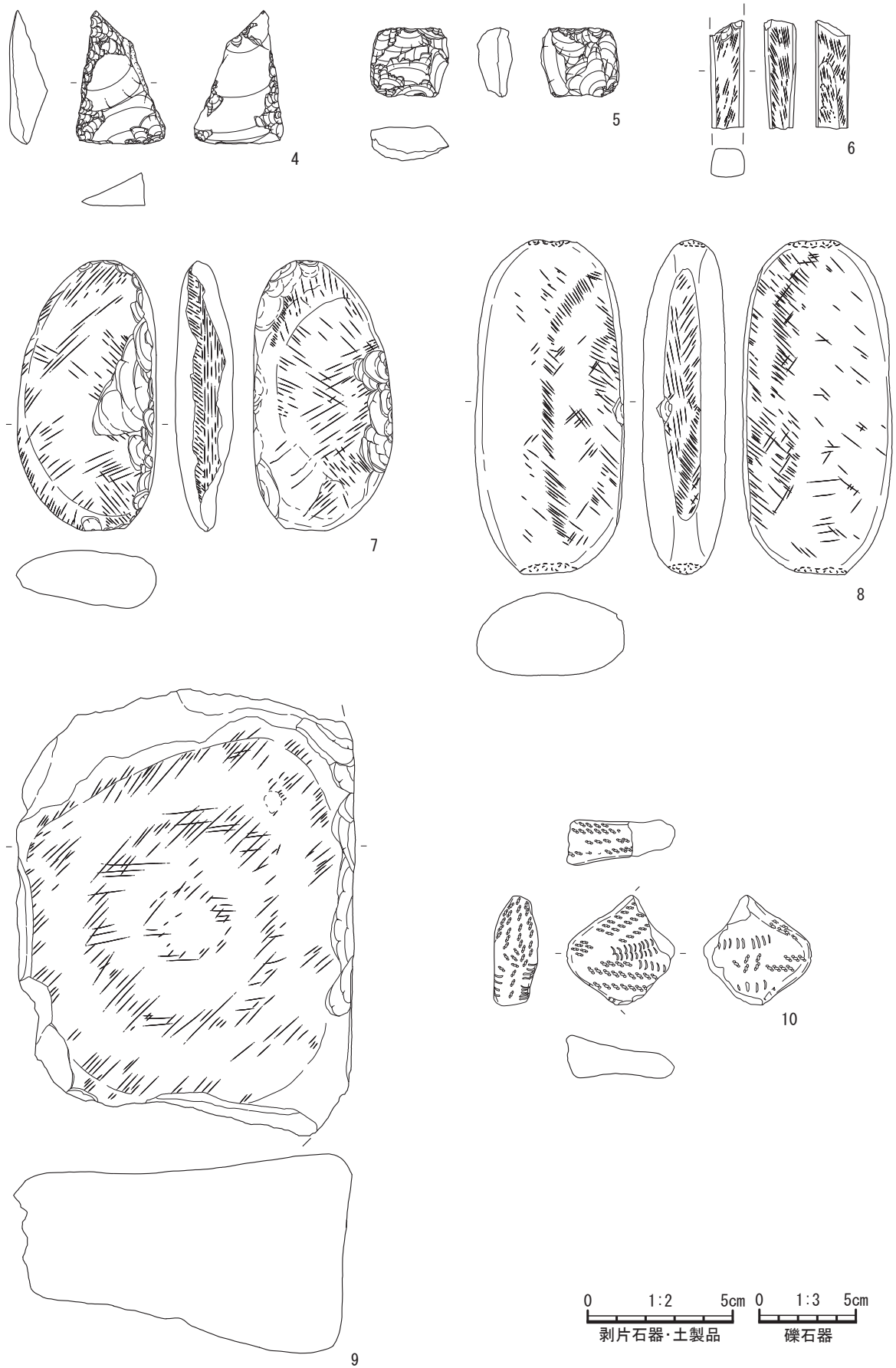


图12 第2号竖穴住居跡出土遺物

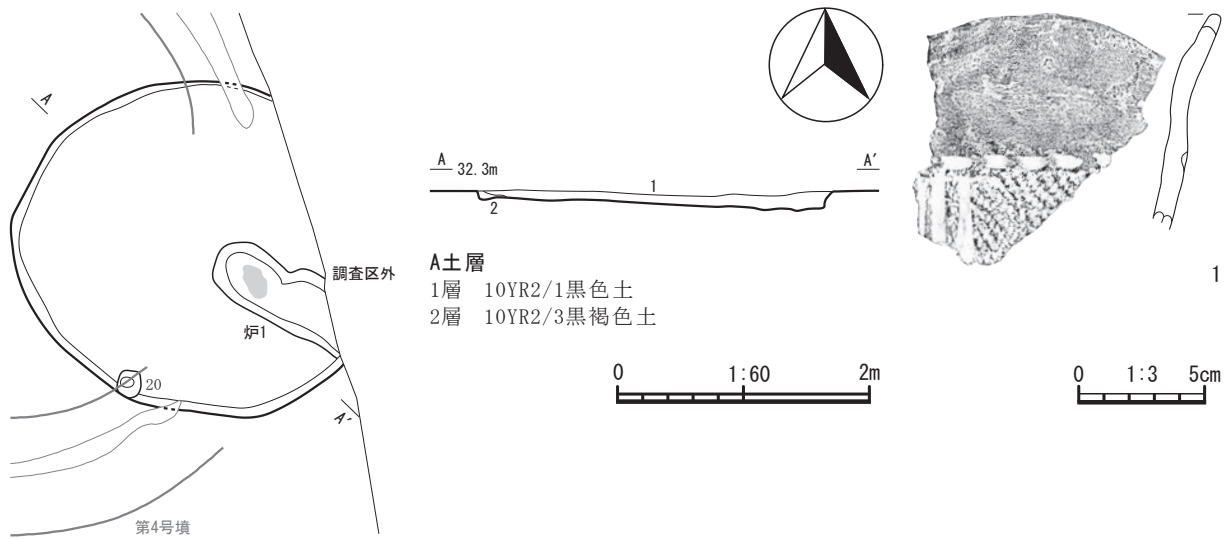


図13 第3号竖穴住居跡

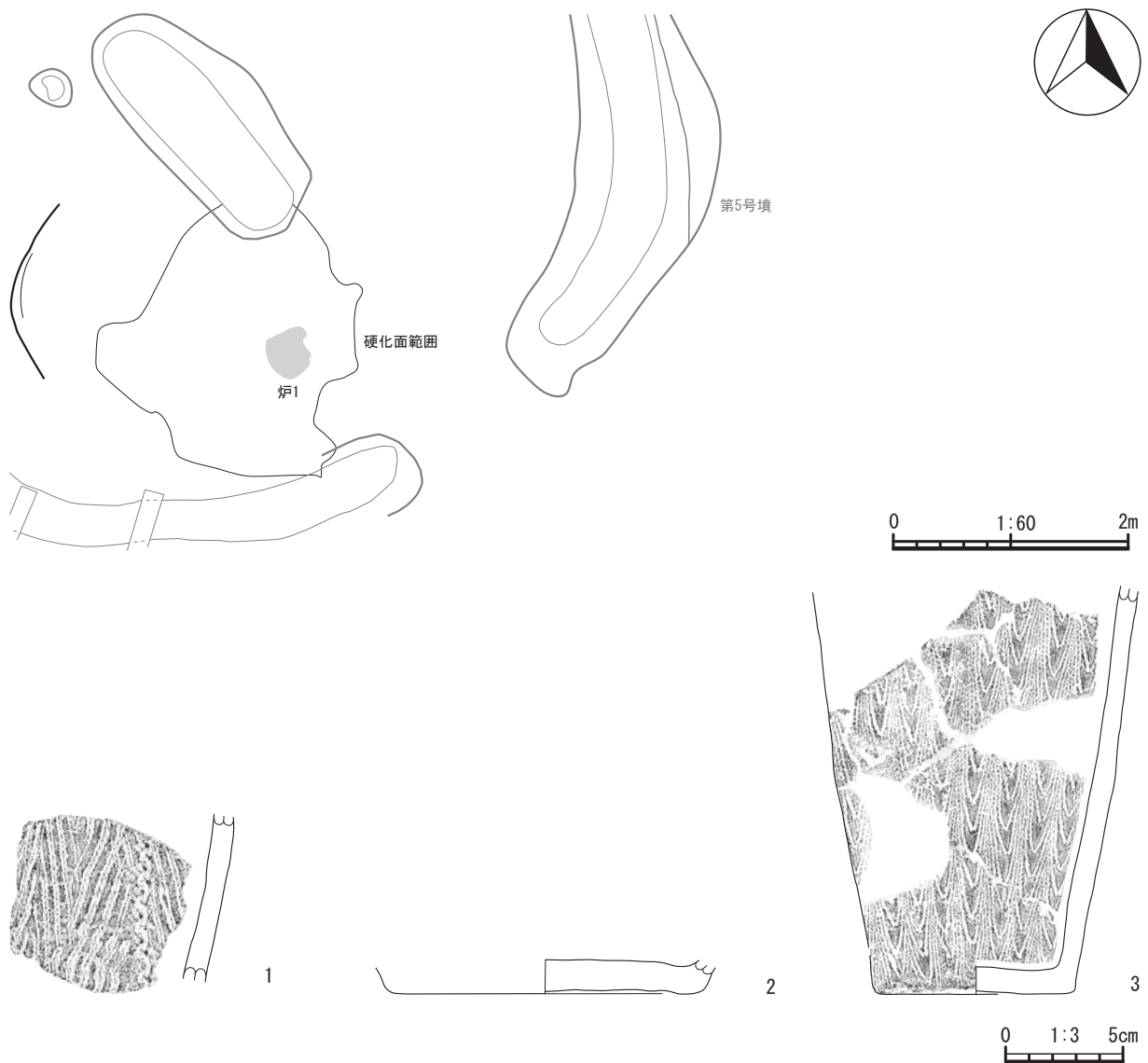


図14 第4号竖穴住居跡

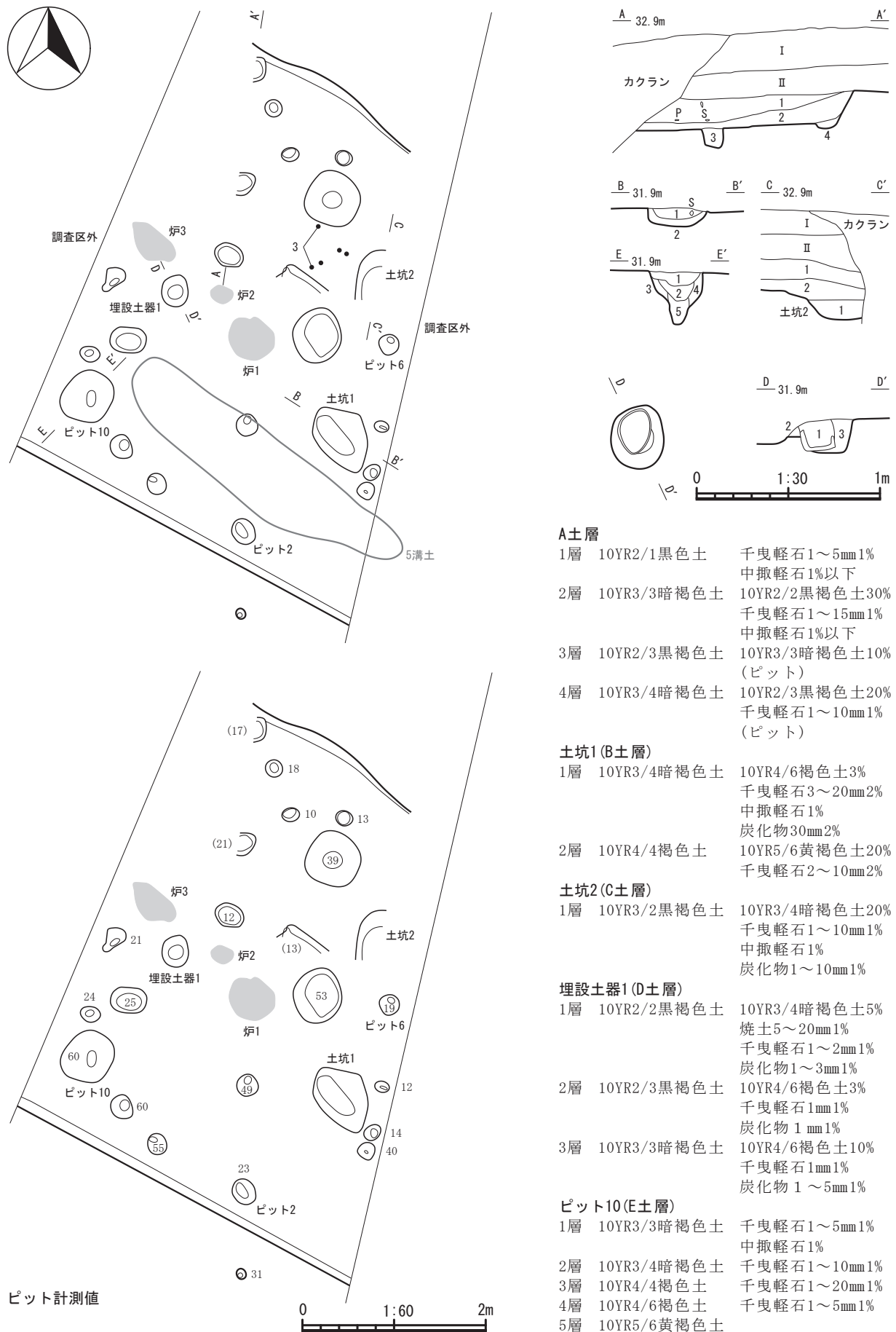


図15 第5号竪穴住居跡

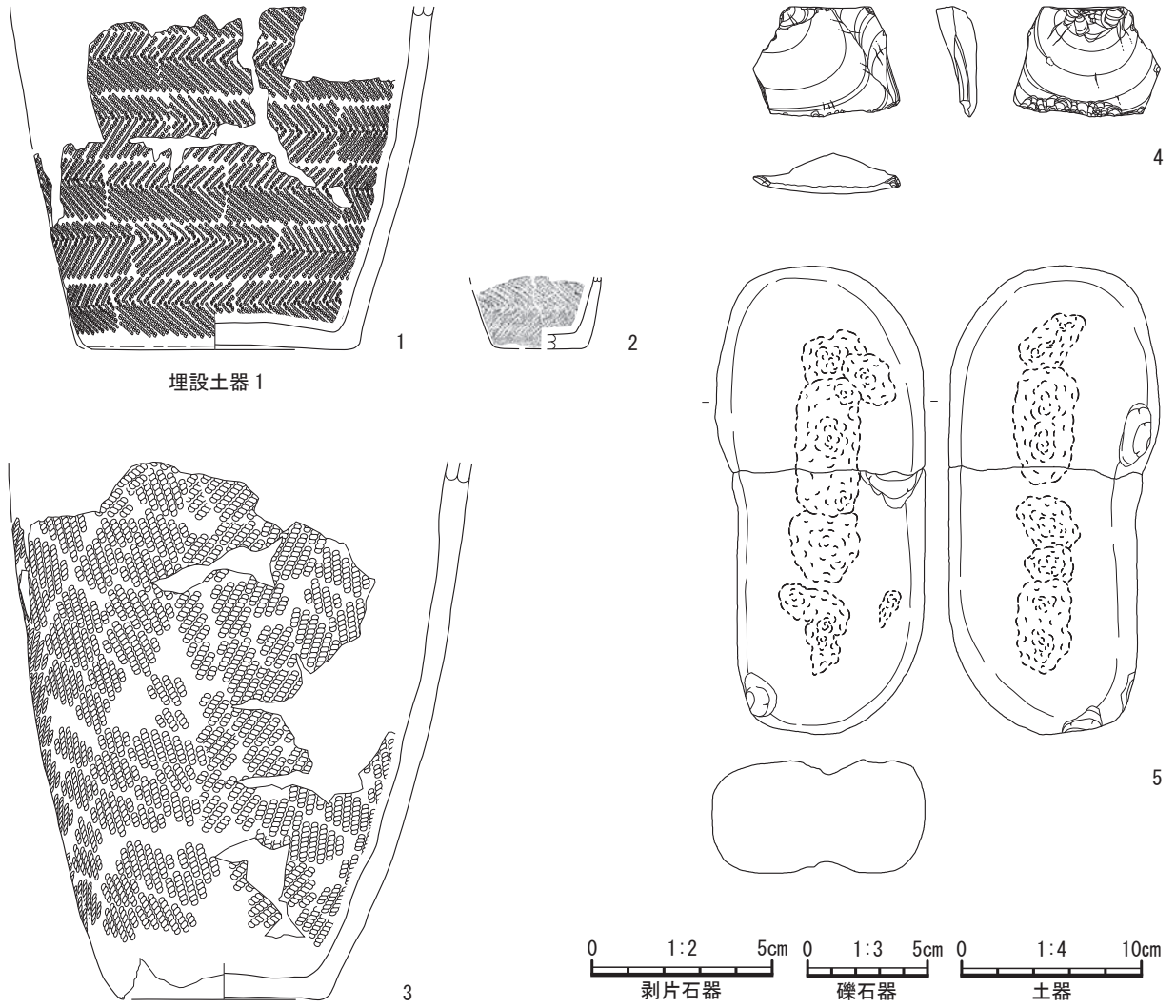
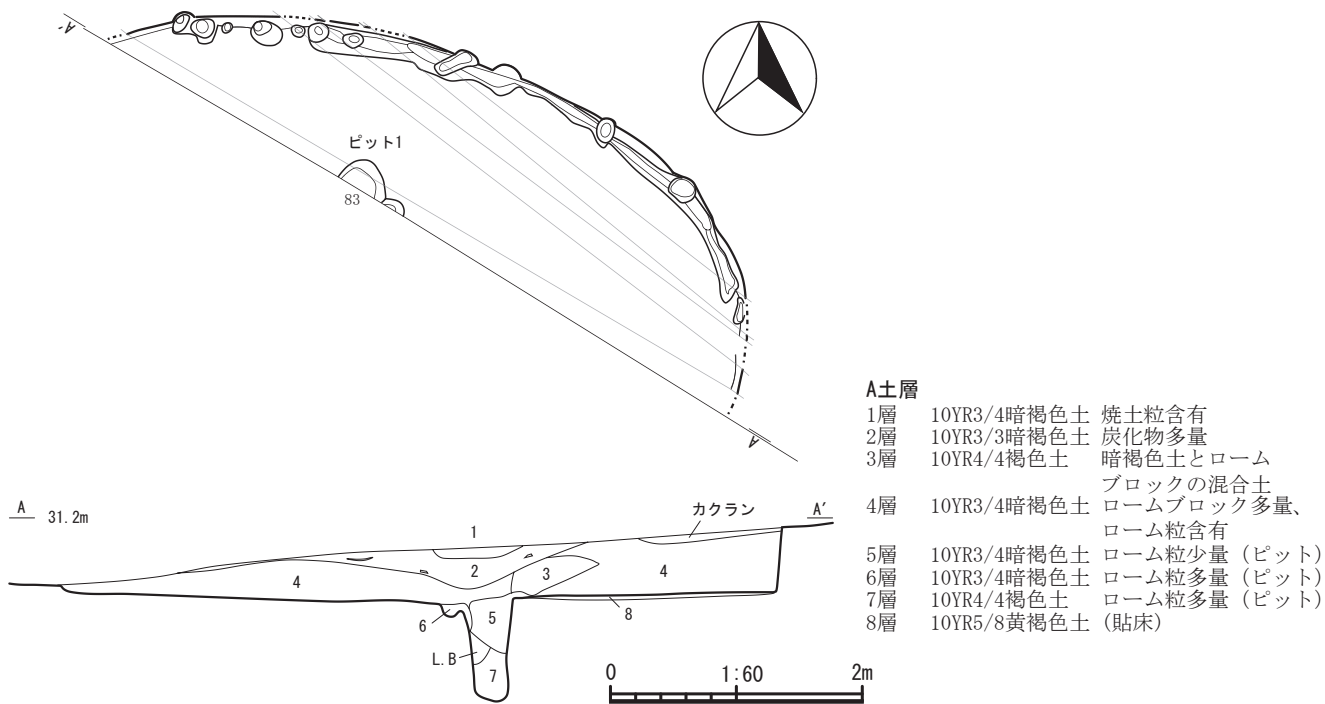


图 16 第 5 号竖穴住居跡出土遺物



A土層

- 1層 10YR3/4暗褐色土 焼土粒含有
- 2層 10YR3/3暗褐色土 炭化物多量
- 3層 10YR4/4褐色土 暗褐色土とローム
ブロックの混合土
- 4層 10YR3/4暗褐色土 ロームブロック多量、
ローム粒含有
- 5層 10YR3/4暗褐色土 ローム粒少量 (ピット)
- 6層 10YR3/4暗褐色土 ローム粒多量 (ピット)
- 7層 10YR4/4褐色土 ローム粒多量 (ピット)
- 8層 10YR5/8黄褐色土 (貼床)

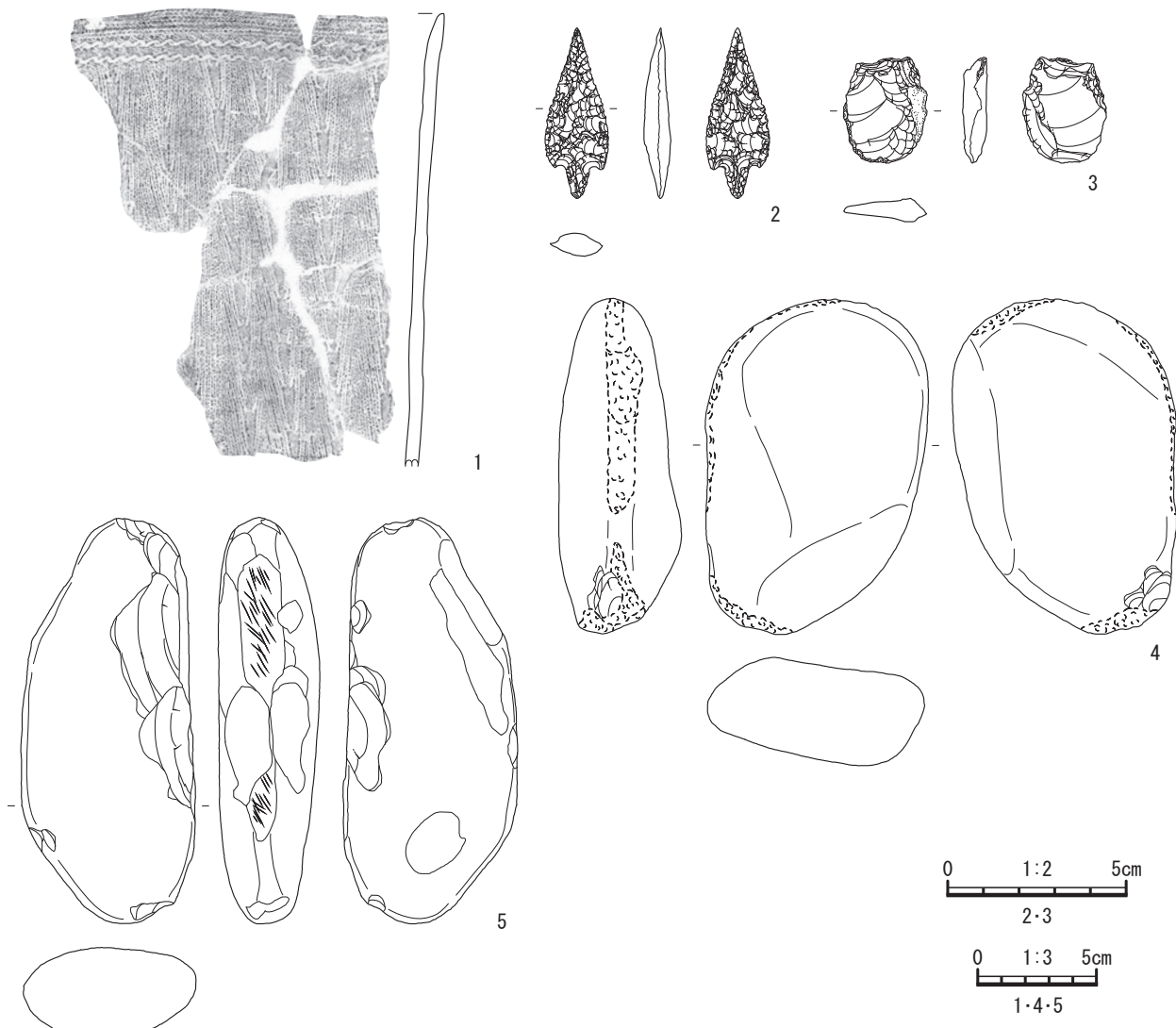


図17 第6号竪穴住居跡

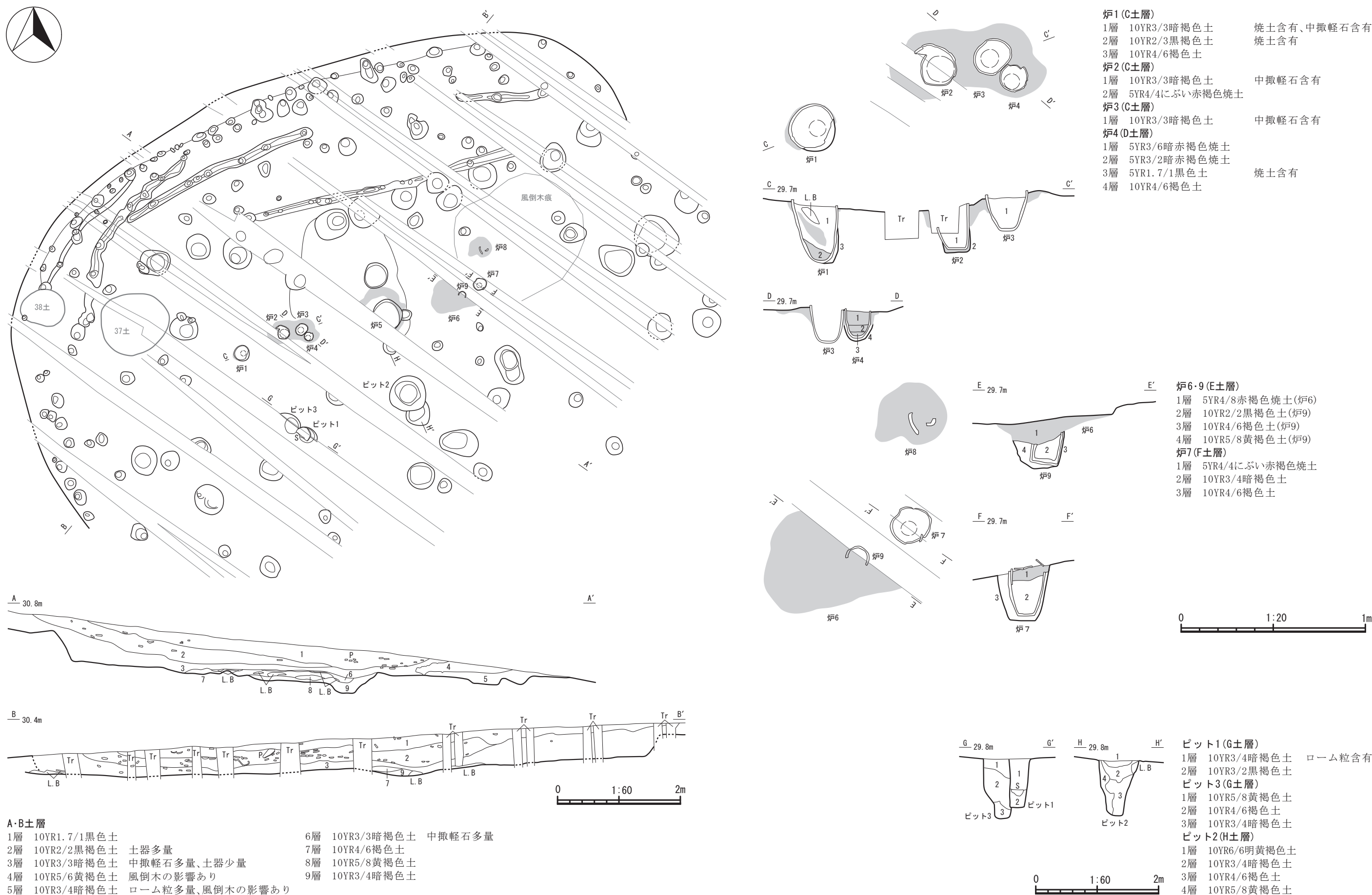
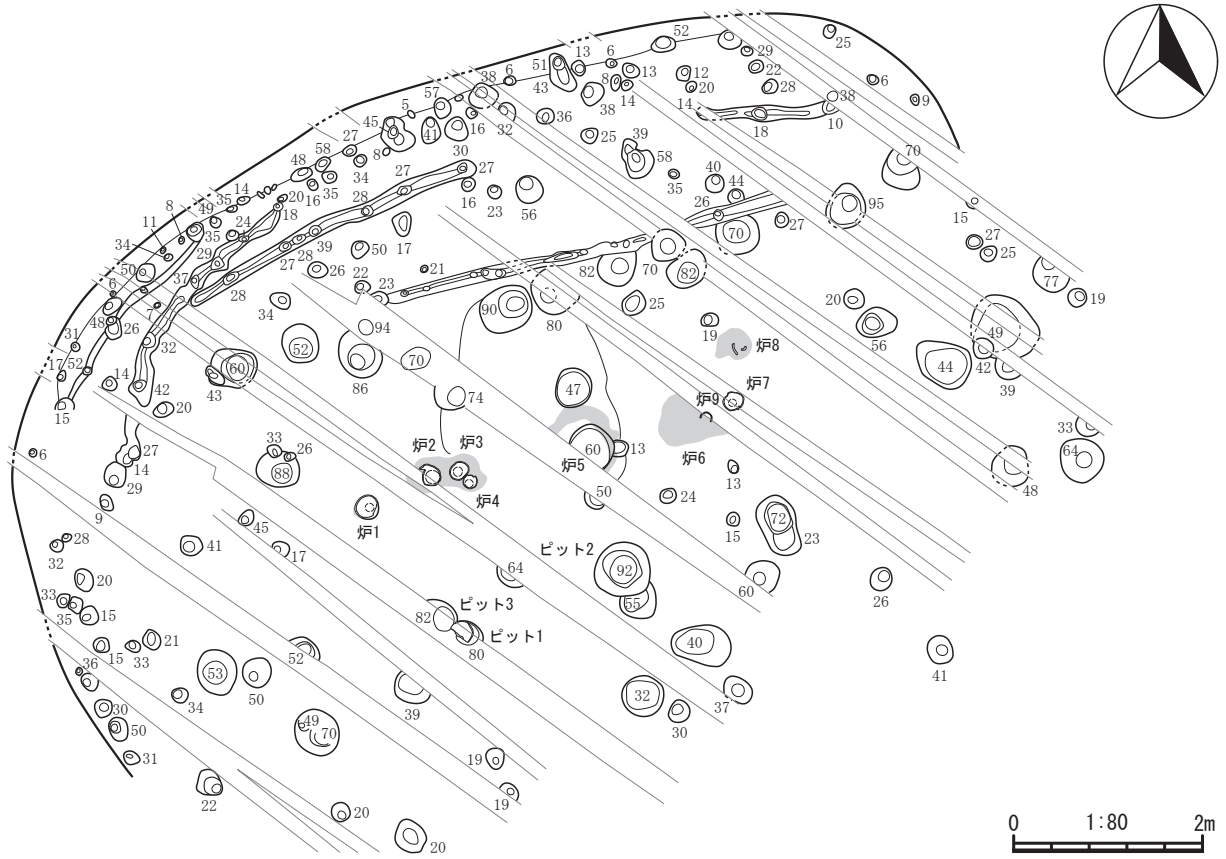


図18 第7号竪穴住居跡



ピット計測値

図19 第7号竪穴住居跡

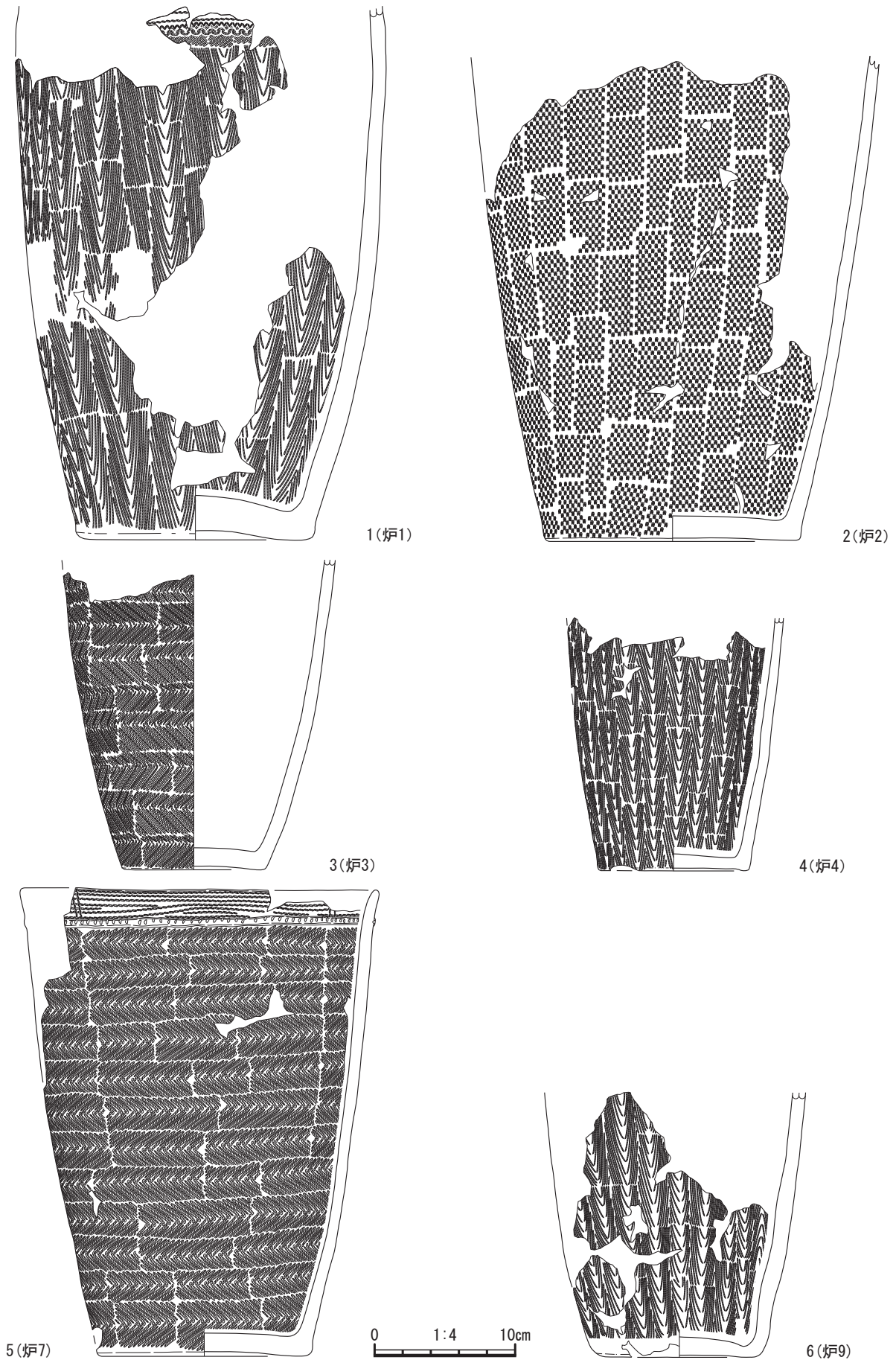


图 20 第 7 号竖穴住居跡出土遺物

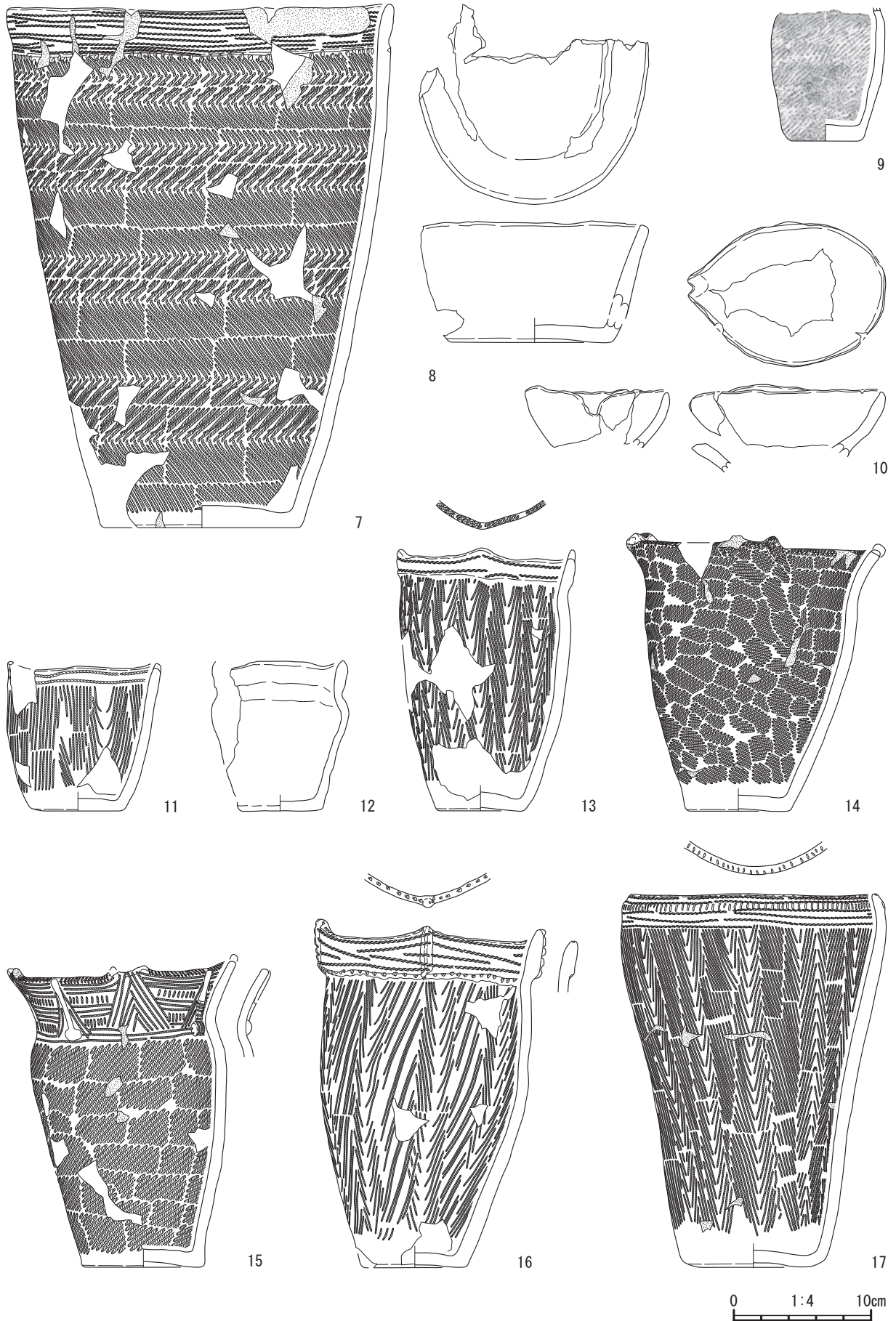


图 21 第 7 号竖穴住居跡出土遺物

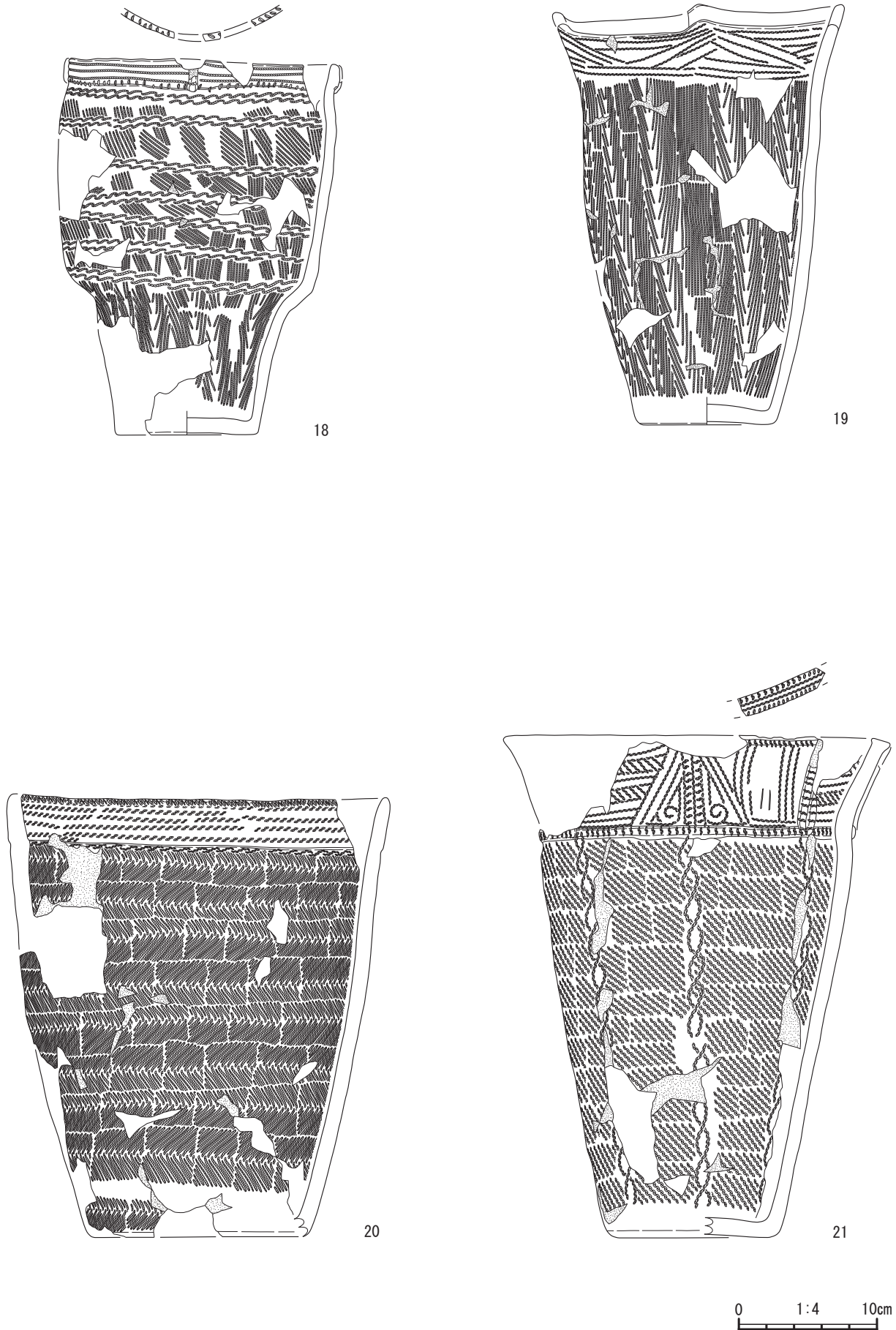


图 22 第 7 号竖穴住居跡出土遺物

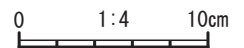
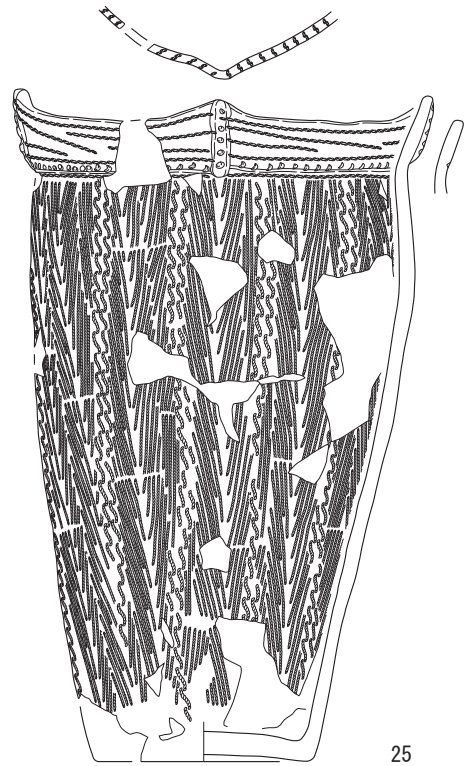
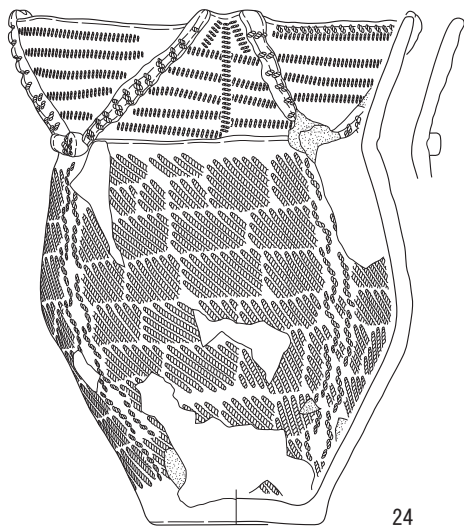
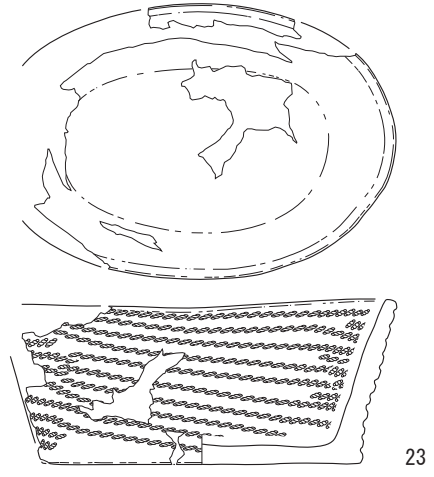
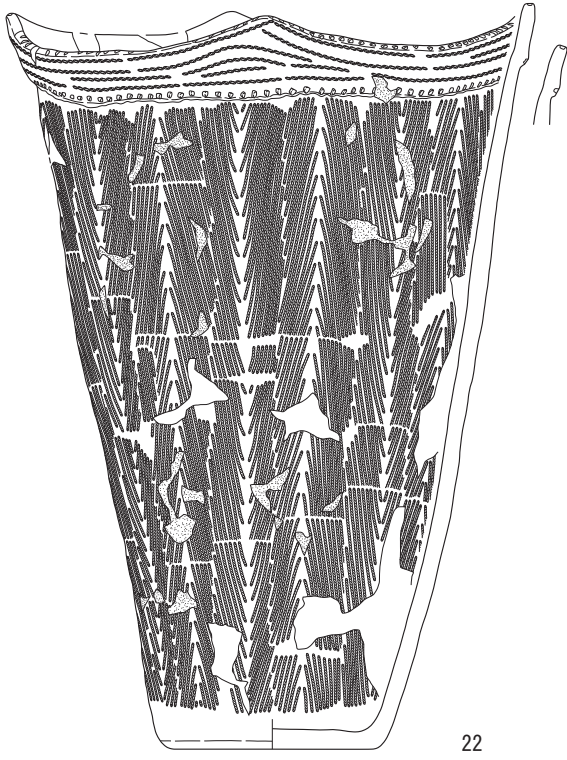
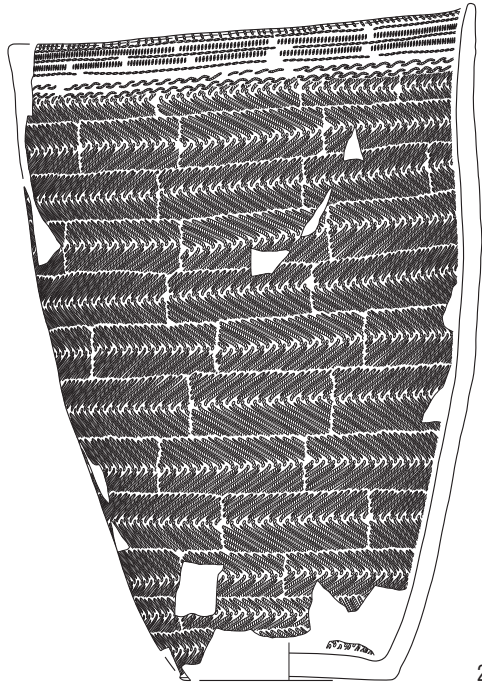
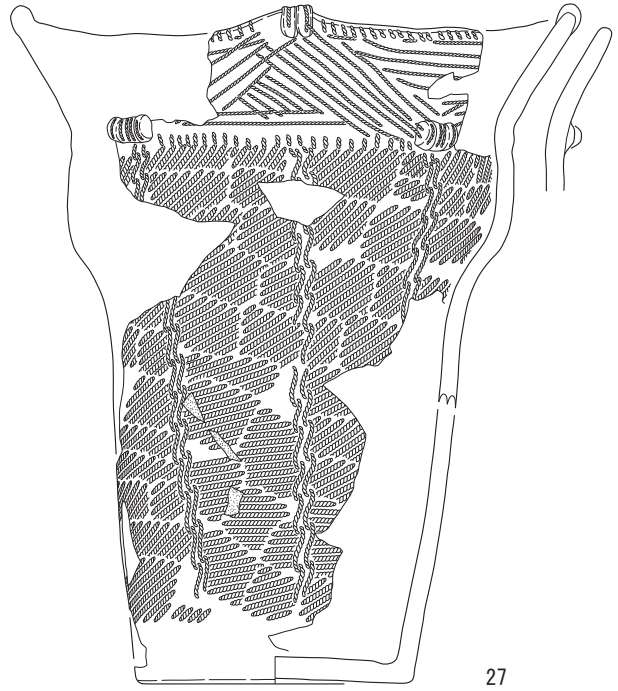


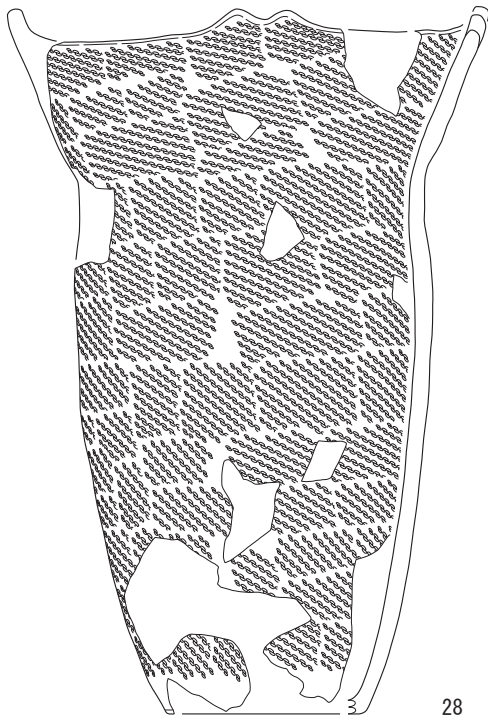
图 23 第7号竖穴住居跡出土遺物



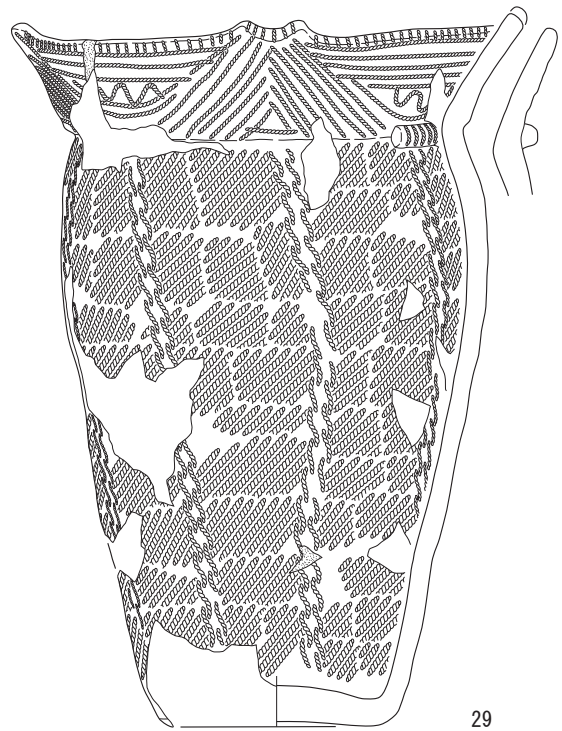
26



27



28



29

0 1:4 10cm

图 24 第 7 号竖穴住居跡出土遺物

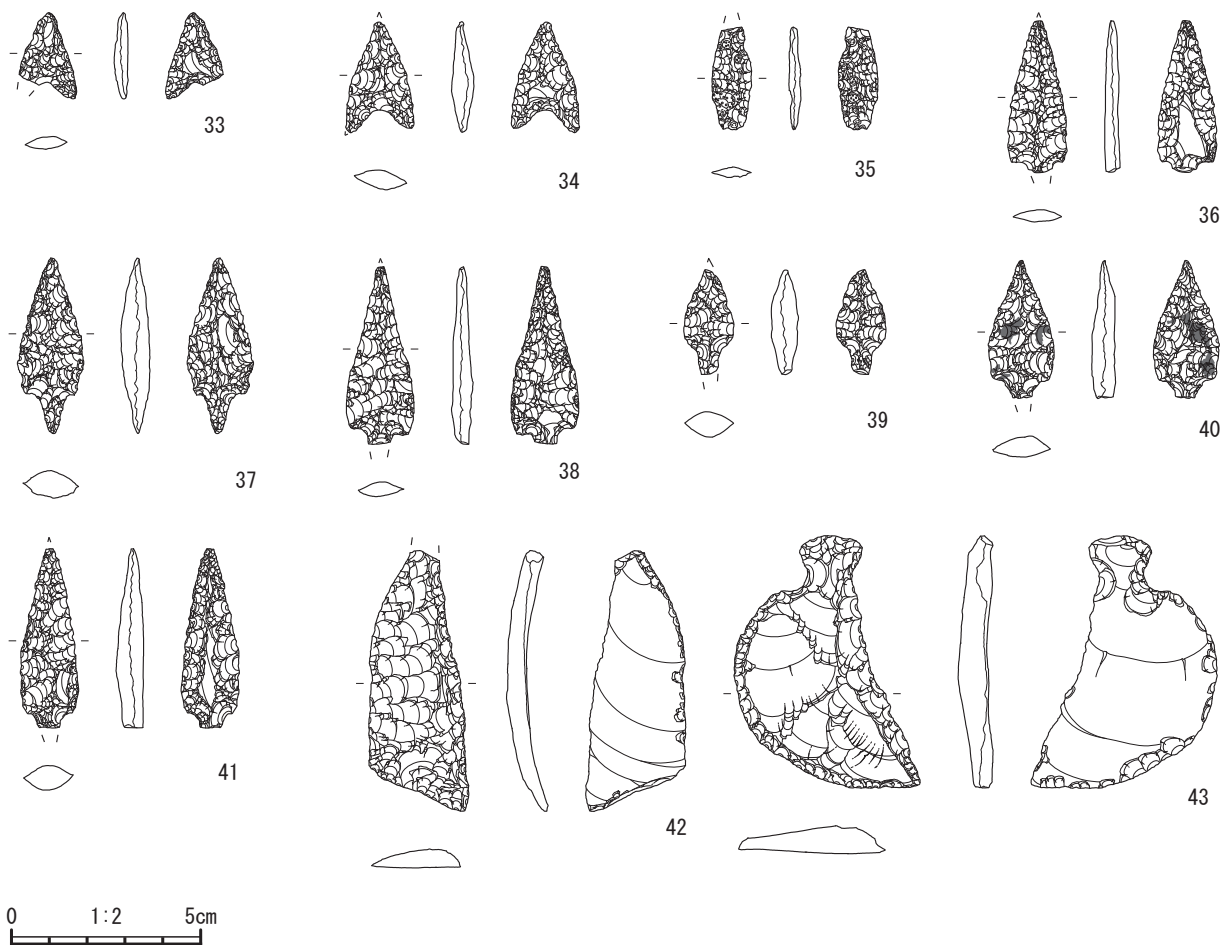
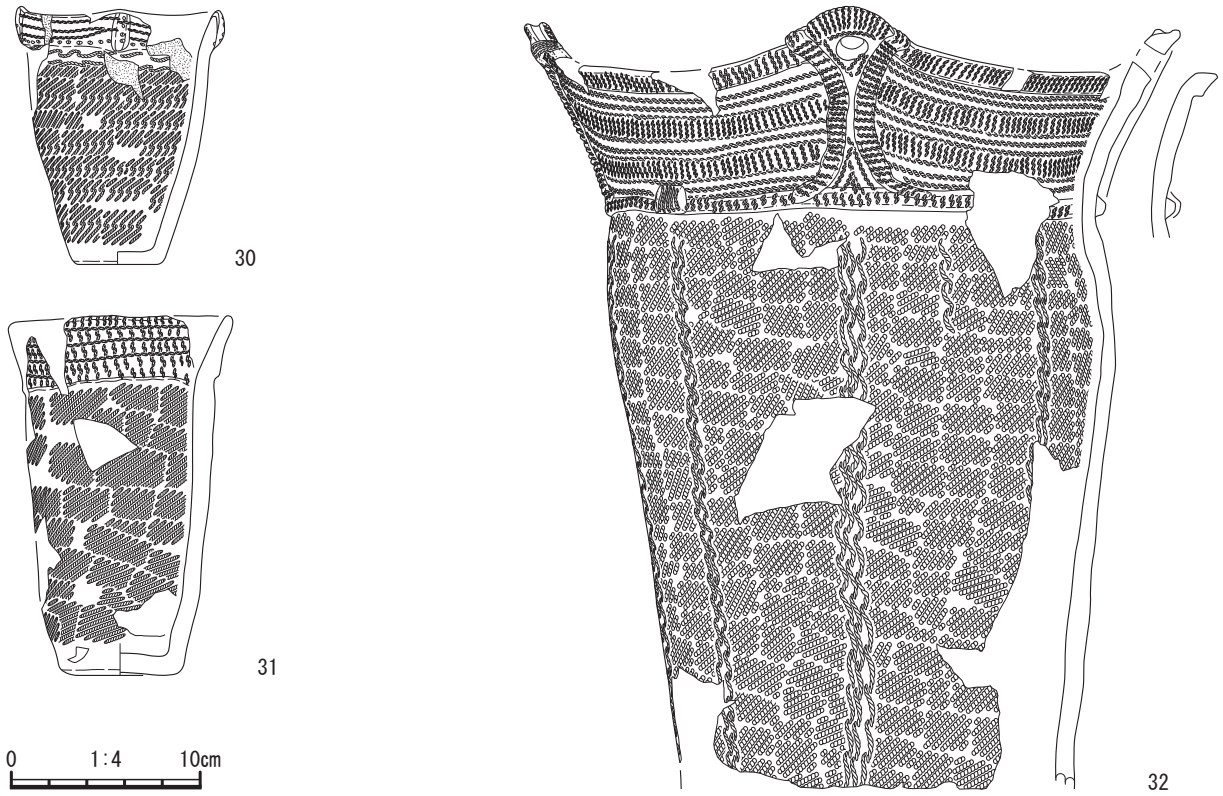


图 25 第7号竖穴住居跡出土遺物



图 26 第 7 号竖穴住居跡出土遺物

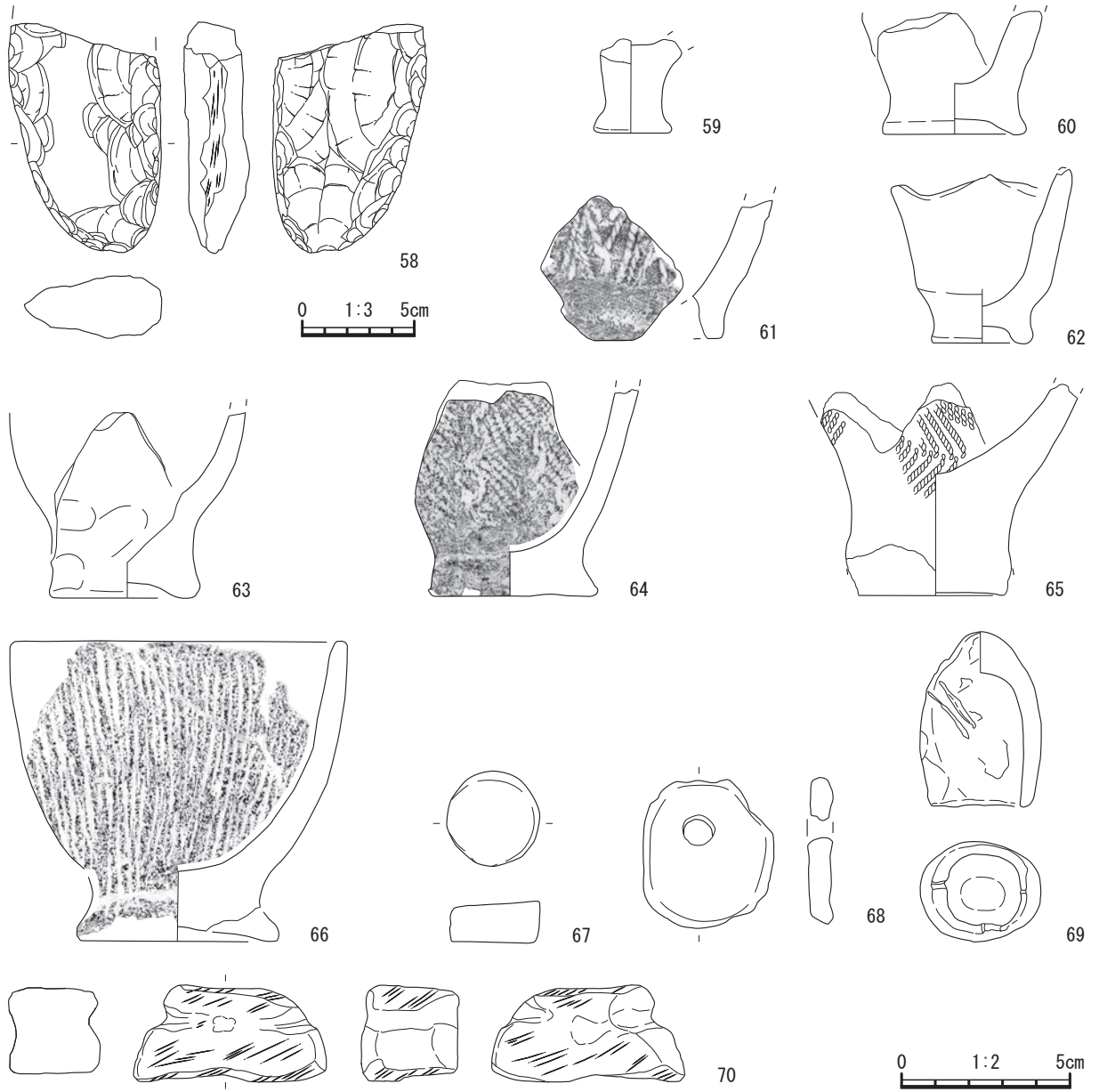


図 27 第 7 号 竖穴住居跡出土遺物

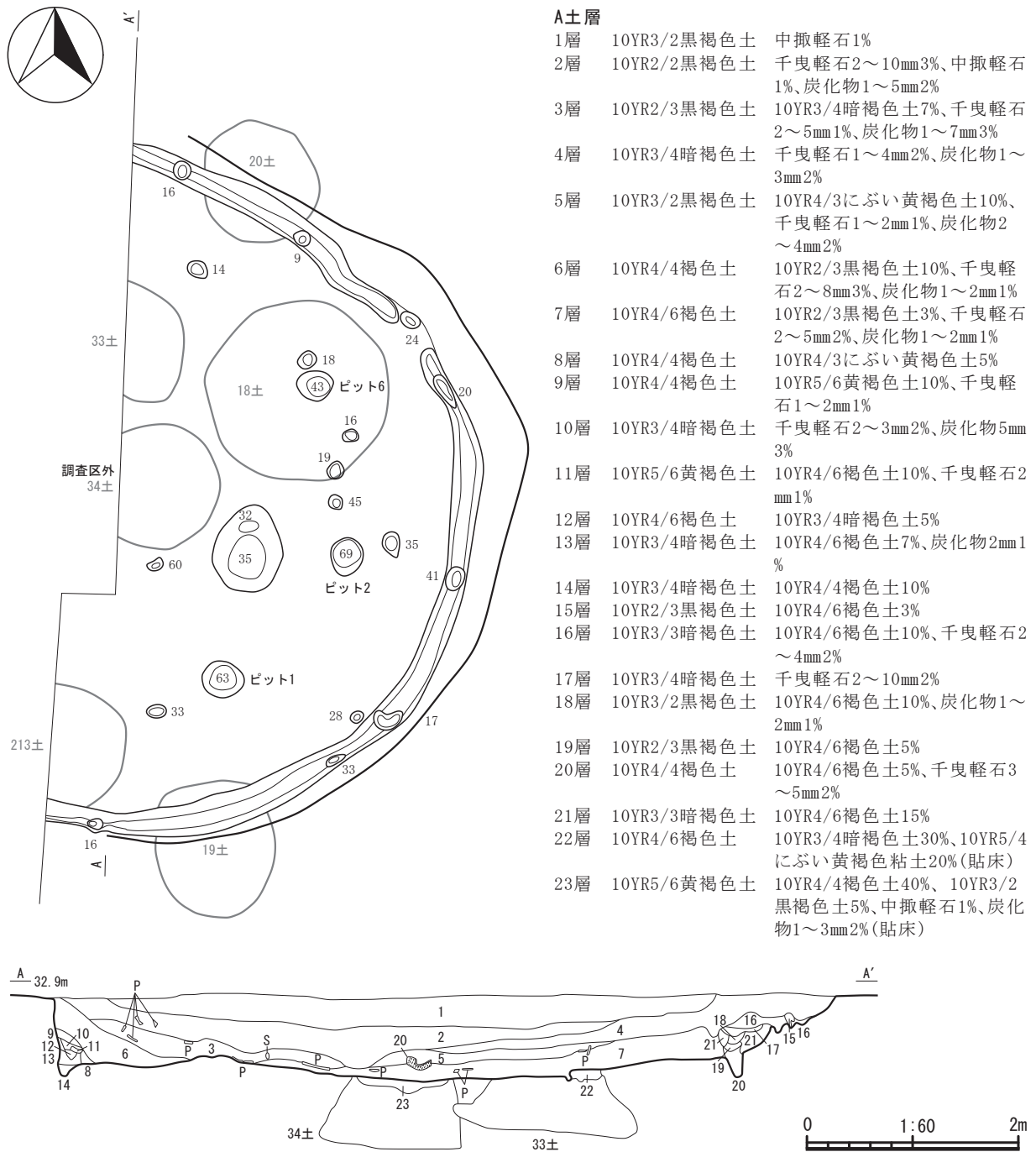
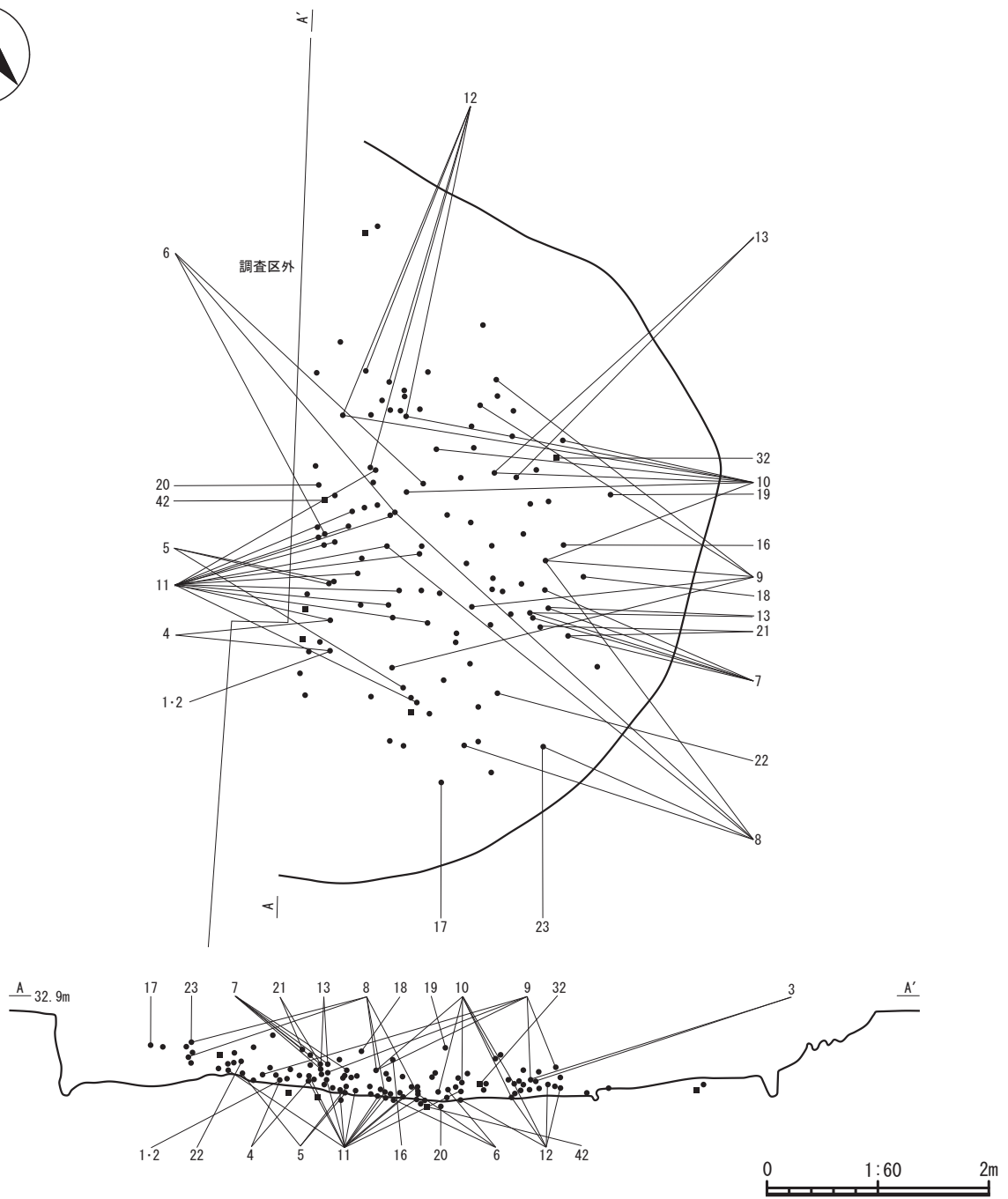


図28 第8号竪穴住居跡



遺物出土状況

図29 第8号竪穴住居跡

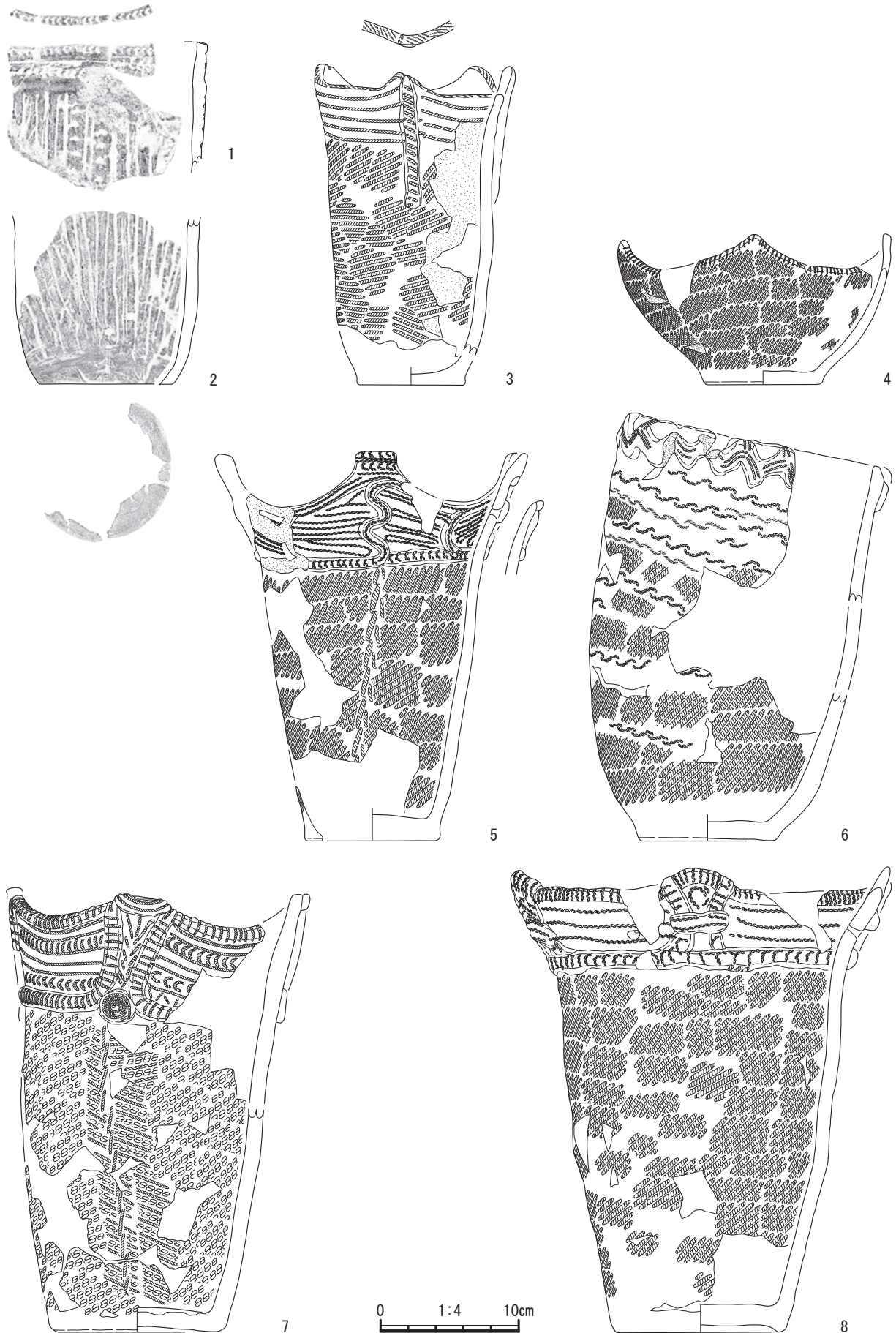


图 30 第 8 号竖穴住居跡出土遺物

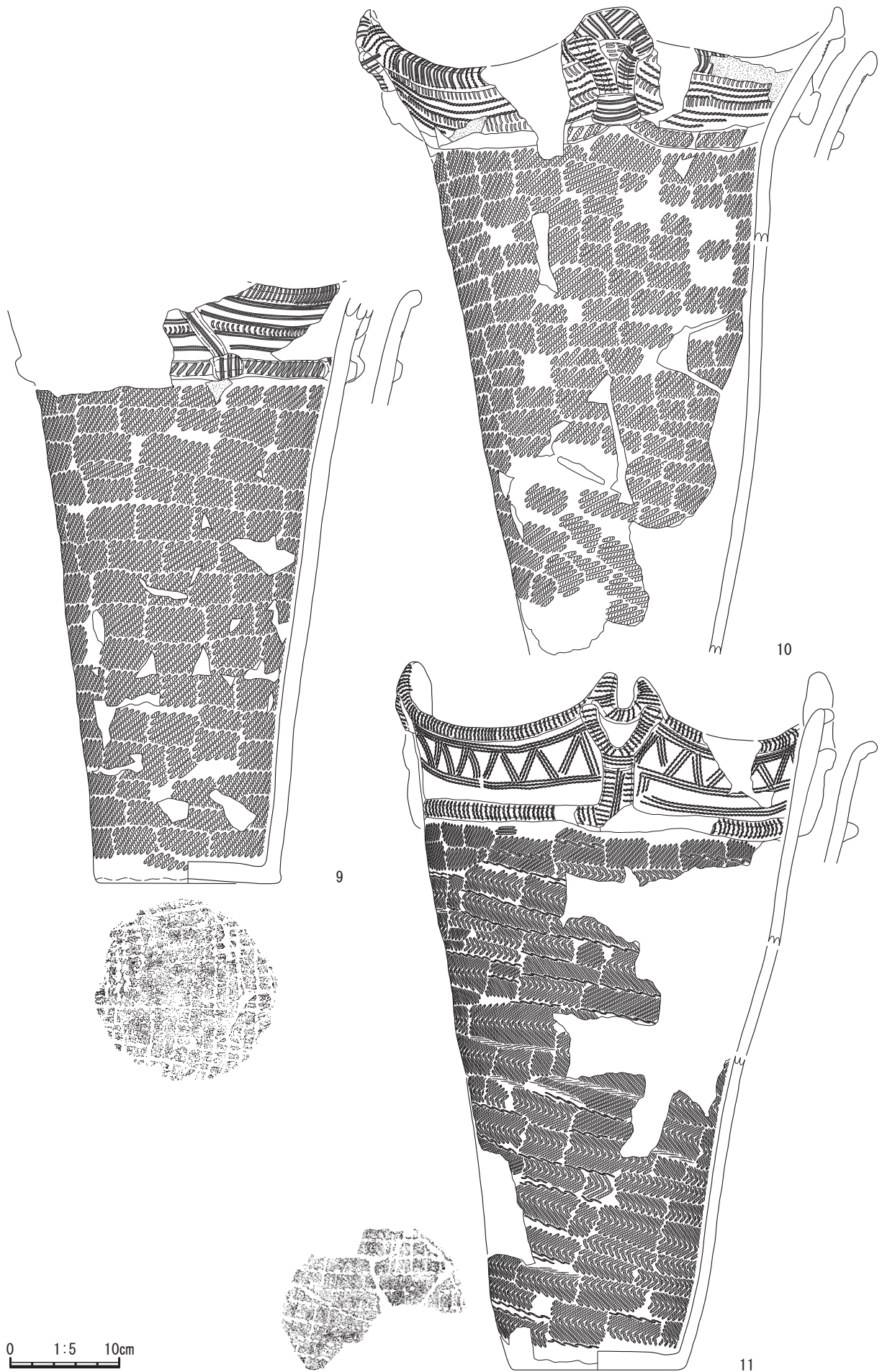


图31 第8号竖穴住居跡出土遺物

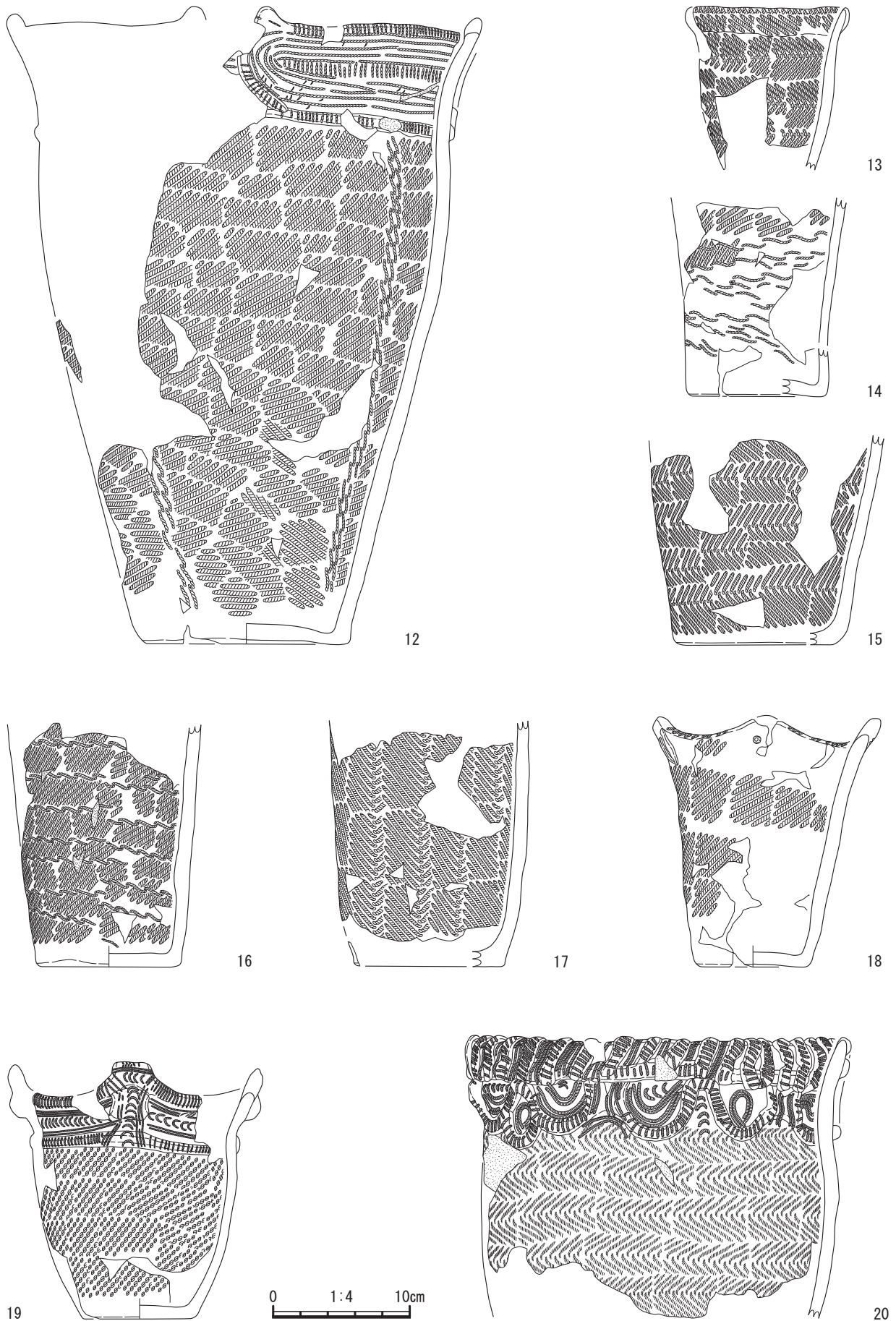


图 32 第 8 号竖穴住居跡出土遺物

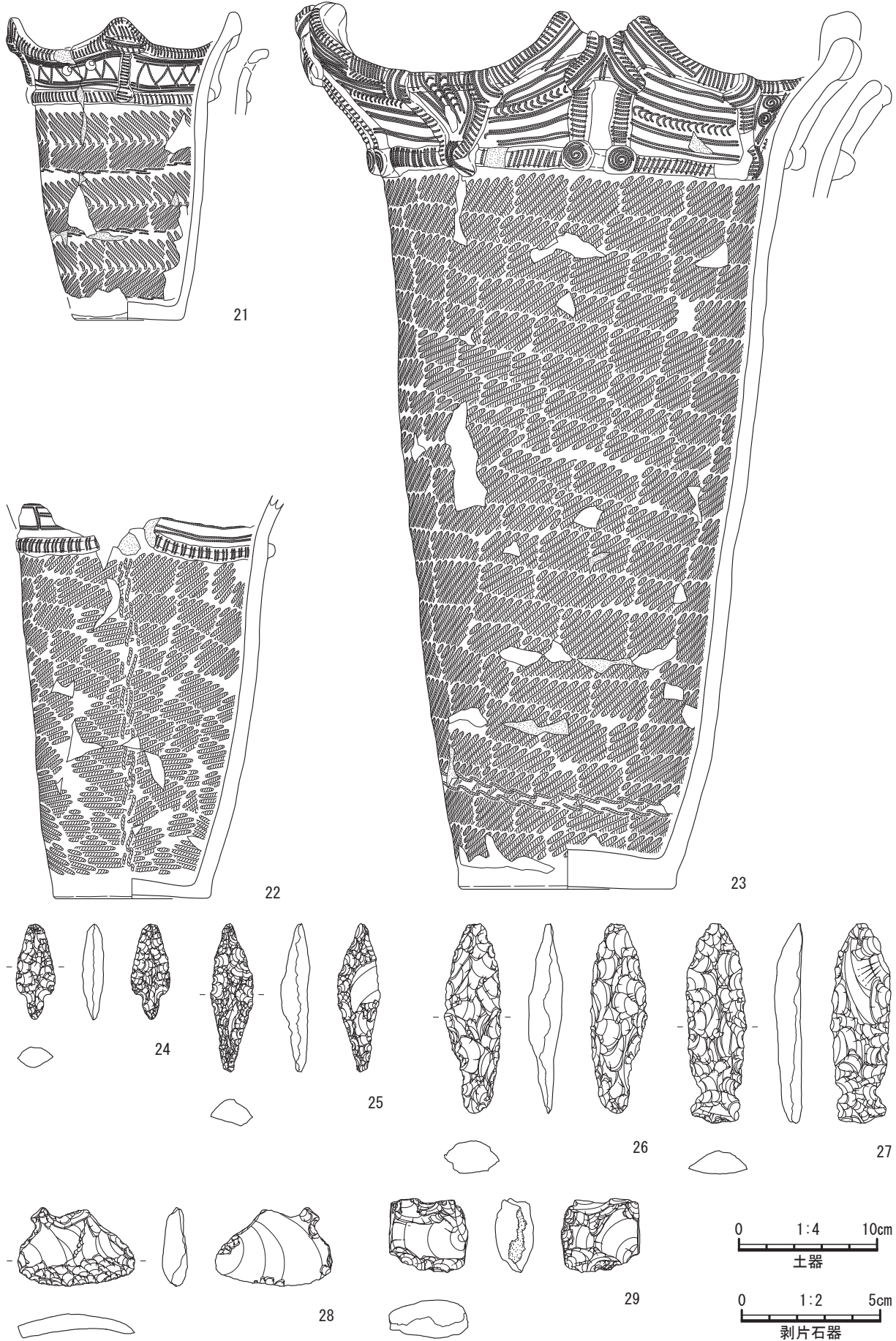


图33 第8号竖穴住居跡出土遺物

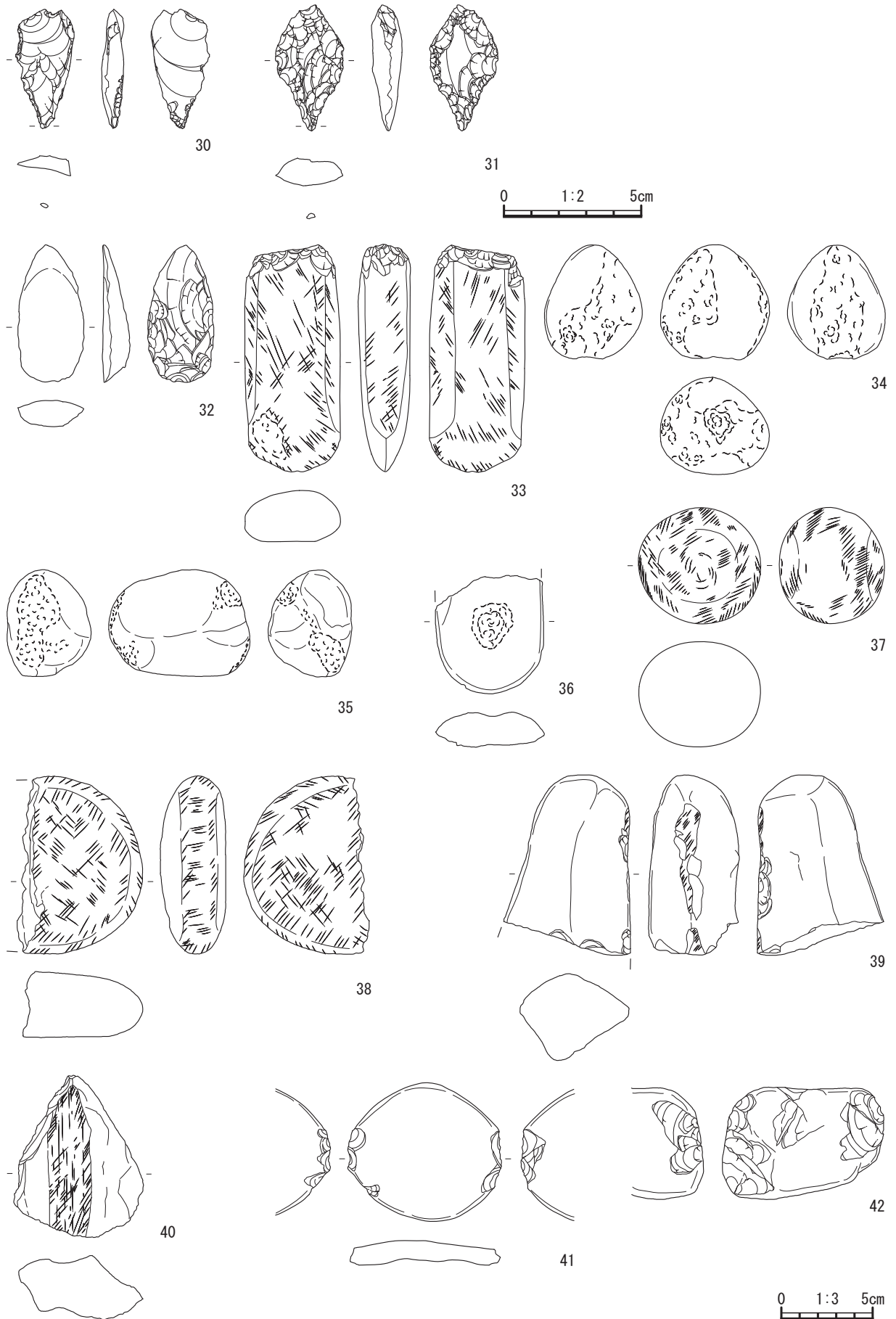
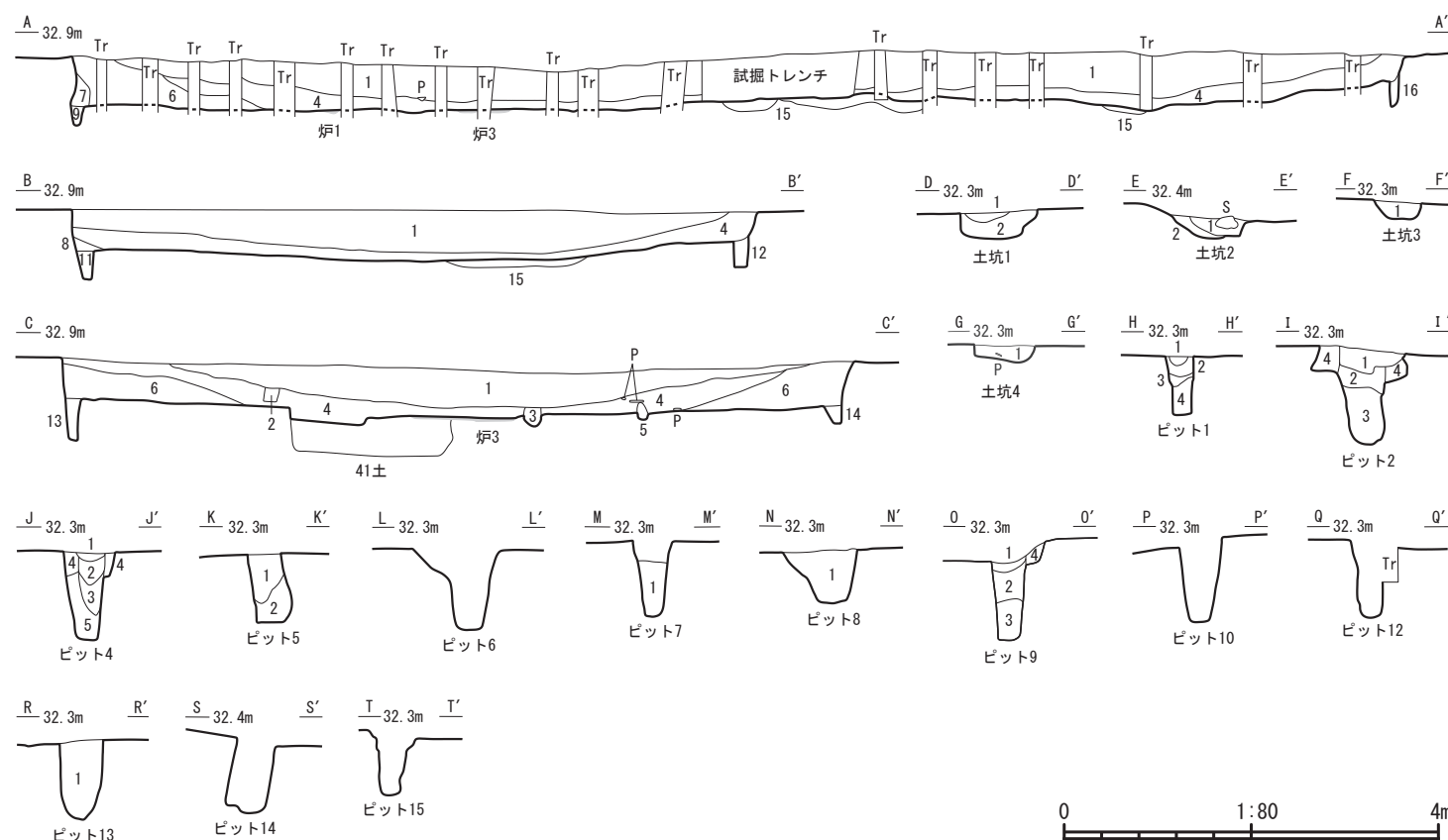
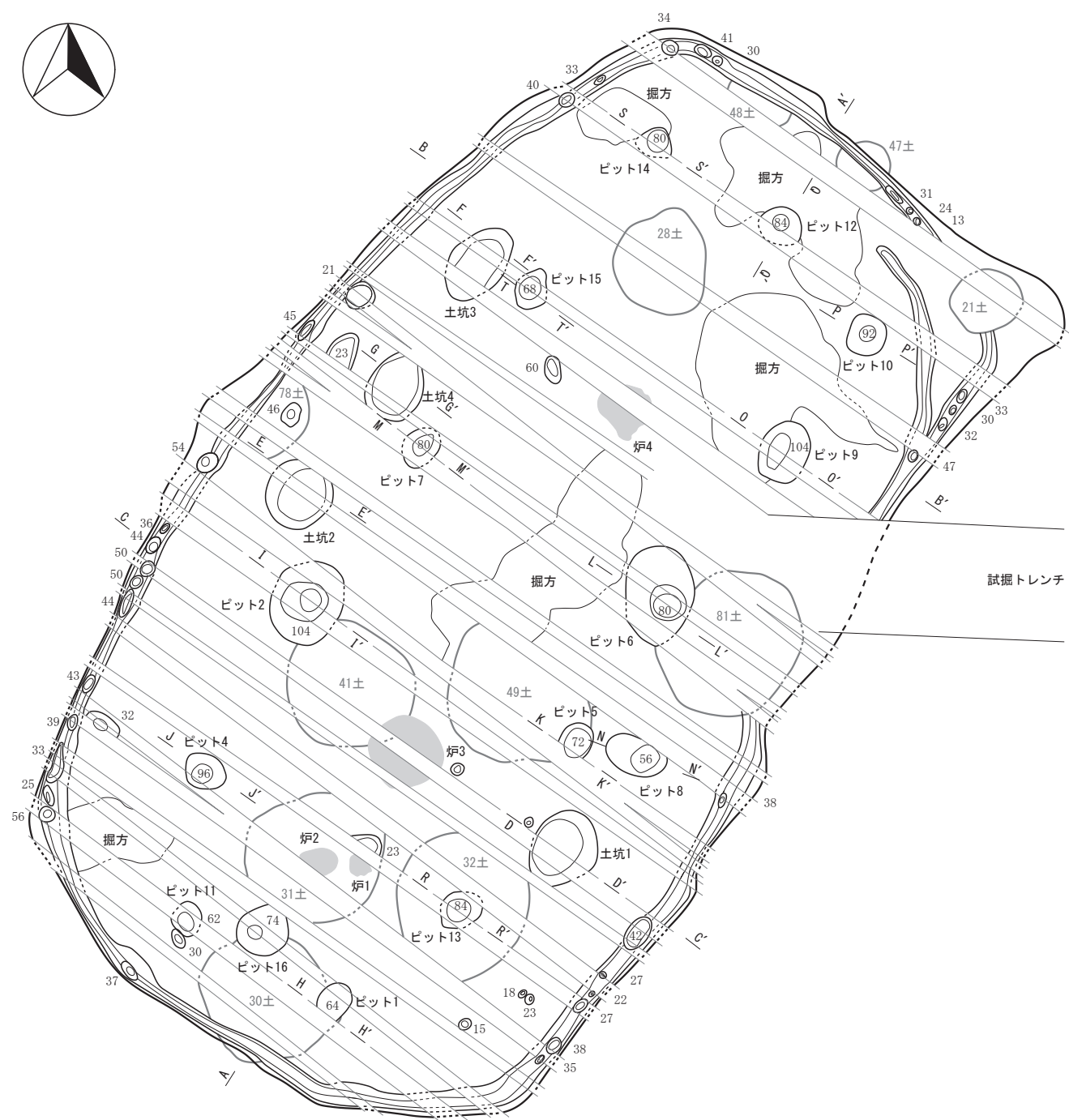


图 34 第 8 号竖穴住居跡出土遺物



A・B・C土層

1層	10YR1.7/1黒色土	10YR3/3暗褐色土30%、千曳軽石1~10mm1%、中撒軽石1%
2層	10YR2/2黒褐色土	千曳軽石1~5mm1%、炭化物1~5mm1%
3層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/4褐色土2%、炭化物1~5mm1%
4層	10YR3/3暗褐色土	10YR3/2黒褐色土10%、千曳軽石1~5mm1%、炭化物3~50mm2%
5層	10YR3/2黒褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、炭化物1~3mm1%
6層	10YR4/4褐色土	千曳軽石1~15mm1%、炭化物1mm1%
7層	10YR3/2黒褐色土	10YR5/6黄褐色土5%、千曳軽石2~10mm3%、炭化物5mm2%
8層	10YR3/4暗褐色土	10YR5/6黄褐色土5%
9層	10YR5/3にぶい黄褐色土	10YR7/4にぶい黄橙色土2% (壁溝)
10層	10YR5/3にぶい黄褐色土	(壁溝)
11層	10YR3/2黒褐色土	10YR6/3にぶい黄橙色土5% (壁溝)
12層	10YR5/4にぶい黄褐色土	(壁溝)
13層	10YR4/6褐色土	(壁溝・ピット)
14層	10YR4/4褐色土	(壁溝)
15層	10YR5/3にぶい黄褐色土	(掘方)

土坑1 (D土層)

1層 10YR5/6黄褐色土 10YR4/4褐色土40%、千曳軽石1~30mm3%、中撒軽石1%、炭化物1~3mm2%
 2層 10YR4/4褐色土 10YR5/6黄褐色土ブロック状10%、千曳軽石1~30mm3%、中撒軽石1%、炭化物1~4mm2%

土坑2 (E土層)

1層 10YR4/3にぶい黄褐色土
 2層 10YR4/6褐色土

土坑3 (F土層)

1層 10YR4/6褐色土 10YR7/8黄橙色土5%、10YR3/3暗褐色土2%

土坑4 (G土層)

1層 10YR4/4褐色土 10YR6/8明黄褐色土5%、炭化物3~5mm2%

ピット1 (H土層)

1層 10YR4/6褐色土 10YR3/4暗褐色土5%、千曳軽石20mm1%
 2層 10YR4/6褐色土 10YR3/4暗褐色土10%、千曳軽石1~5mm1%、中撒軽石1%
 3層 10YR3/4暗褐色土 10YR4/6褐色土30%、中撒軽石1%
 4層 10YR4/6褐色土 10YR3/4暗褐色土10%

ピット2 (I土層)

1層 10YR3/4暗褐色土 千曳軽石1~5mm2%、中撒軽石1%、炭化物2~7mm3%
 2層 10YR4/4褐色土 10YR5/6黄褐色土7%、千曳軽石1~4mm3%、中撒軽石1%、炭化物3mm2%
 3層 10YR3/3暗褐色土 10YR4/4褐色土ブロック状5%、中撒軽石1%、炭化物3~6mm3%
 4層 10YR4/3にぶい黄褐色土 10YR5/6黄褐色土ブロック状7%、千曳軽石2~10mm2%、中撒軽石1%

ピット4 (J土層)

1層 10YR4/4褐色土 10YR5/8黄褐色土7%
 2層 10YR4/3にぶい黄褐色土 千曳軽石2~20mm5%、炭化物3mm2%
 3層 10YR4/6褐色土 10YR5/6黄褐色土5%
 4層 10YR3/4暗褐色土 10YR5/6黄褐色土5%、千曳軽石2~3mm2%
 5層 10YR3/3暗褐色土 10YR5/6黄褐色土7%、千曳軽石1mm1%、炭化物2mm2%

ピット5 (K土層)

1層 10YR3/4暗褐色土 千曳軽石2~20mm5%、中撒軽石1%、炭化物2~5mm2%
 2層 10YR4/6褐色土 千曳軽石1~3mm2%、中撒軽石1%、炭化物2~5mm3%

ピット7 (M土層)

1層 10YR4/6褐色土 千曳軽石1~5mm1%、炭化物1~5mm1%

ピット8 (N土層)

1層 10YR4/6褐色土 10YR3/4暗褐色土5%、千曳軽石1~50mm2%、炭化物1~5mm1%

ピット9 (O土層)

1層 10YR3/4暗褐色土 千曳軽石1~5mm1%
 2層 10YR4/6褐色土 10YR7/6明黄褐色土30%
 3層 10YR3/3暗褐色土 10YR7/6明黄褐色土5%
 4層 10YR5/6黄褐色土 10YR3/3暗褐色土10%

ピット13 (R土層)

1層 10YR4/4褐色土 10YR5/6黄褐色土7%、千曳軽石1~3mm1%、中撒軽石1%、炭化物2~5mm2%

図35 第9号竪穴住居跡

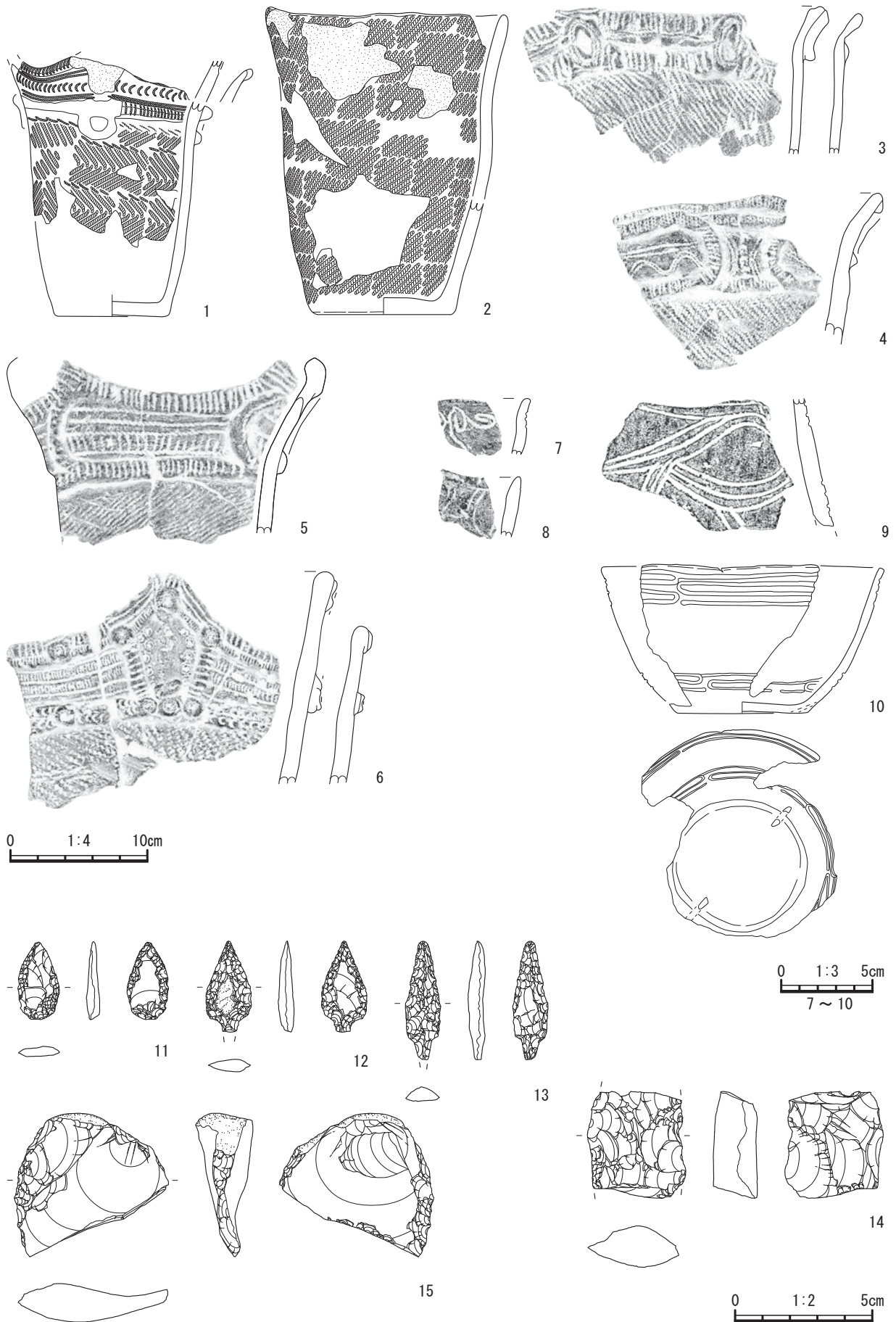


图 36 第 9 号竖穴住居跡出土遺物

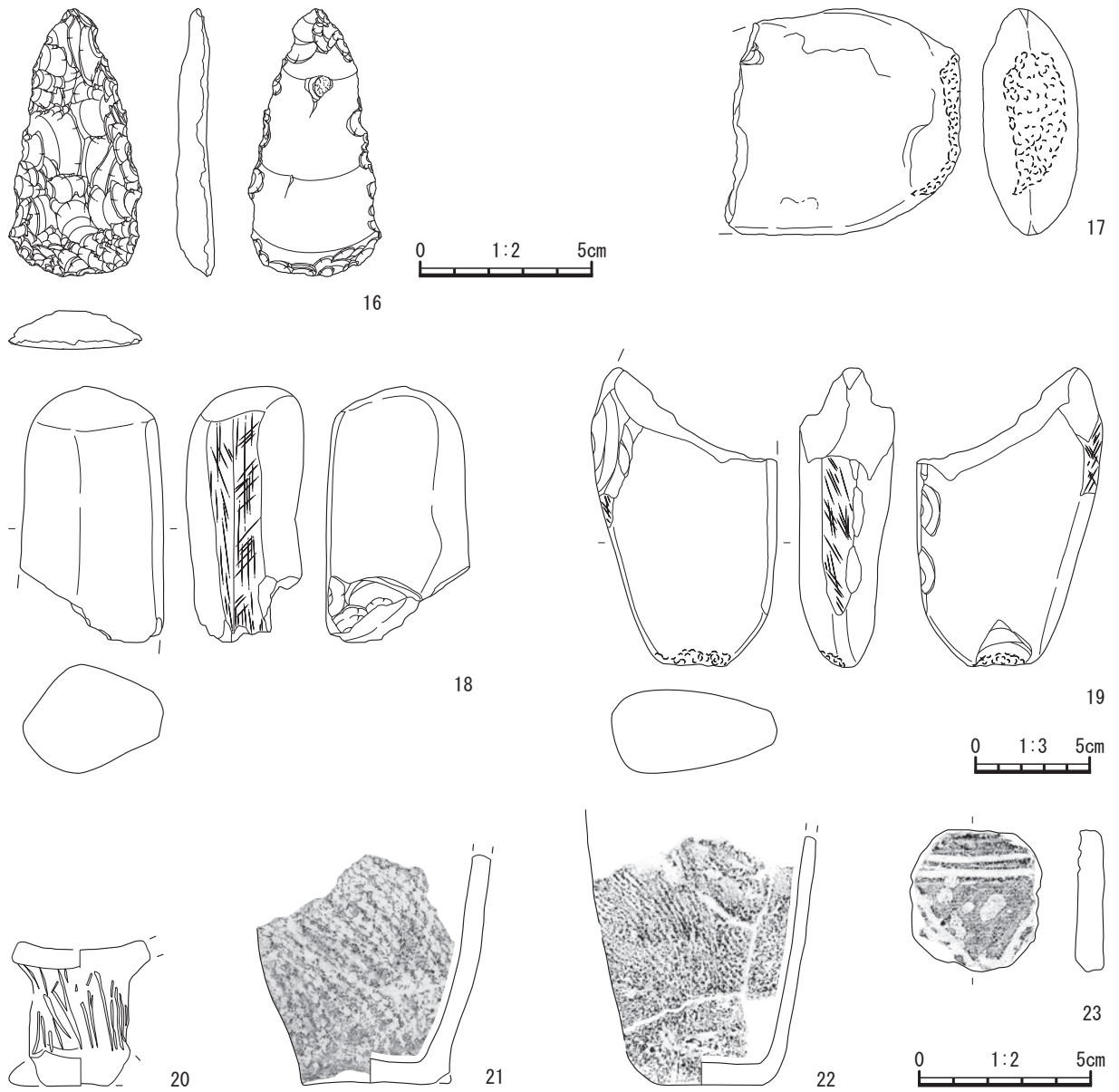
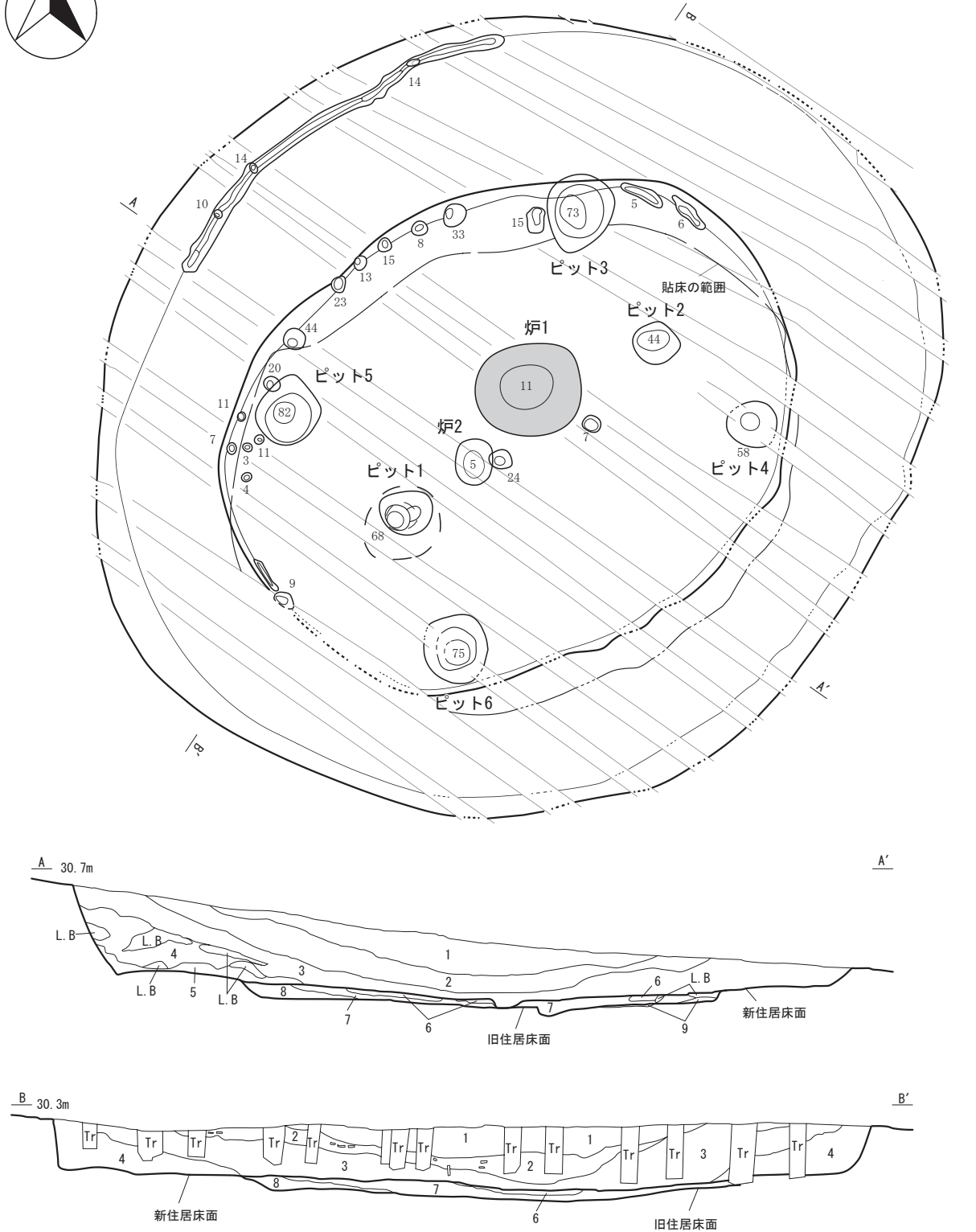
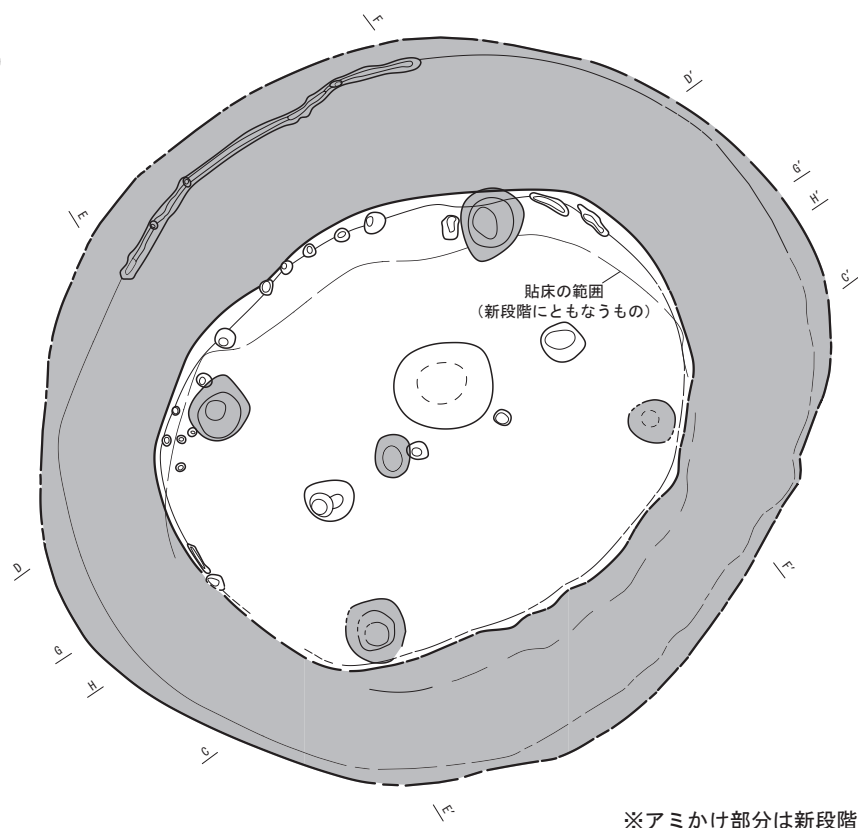


图 37 第 9 号竖穴住居跡出土遺物



- A・B土層**
- 1層 10YR2/2黒褐色土 土器等多量
 - 2層 10YR2/3黒褐色土 土器等多量
 - 3層 10YR3/4暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含有
 - 4層 10YR3/4暗褐色土 ロームブロック少量、ローム粒含有
 - 5層 10YR4/6褐色土 ローム質
 - 6層 10YR3/4暗褐色土 (貼床)
 - 7層 10YR4/4褐色土
 - 8層 10YR2/3黒褐色土 小ロームブロック中量、ローム粒含有
 - 9層 10YR3/3暗褐色土 ローム粒多量

図38 第10号竪穴住居跡



貼床の範囲
(新段階にともなうもの)

※アミかけ部分は新段階にともなうもの

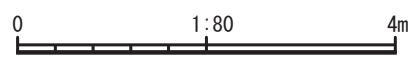
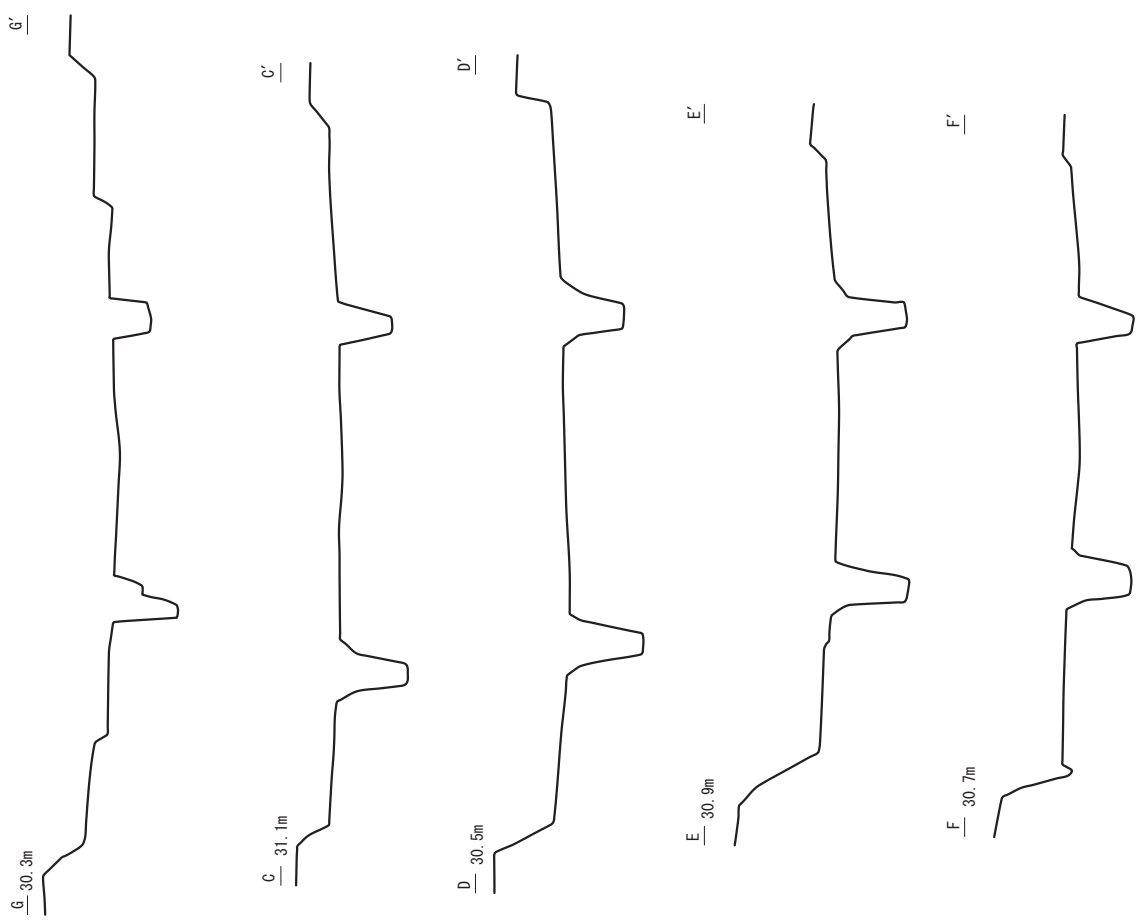


図39 第10号竪穴住居跡

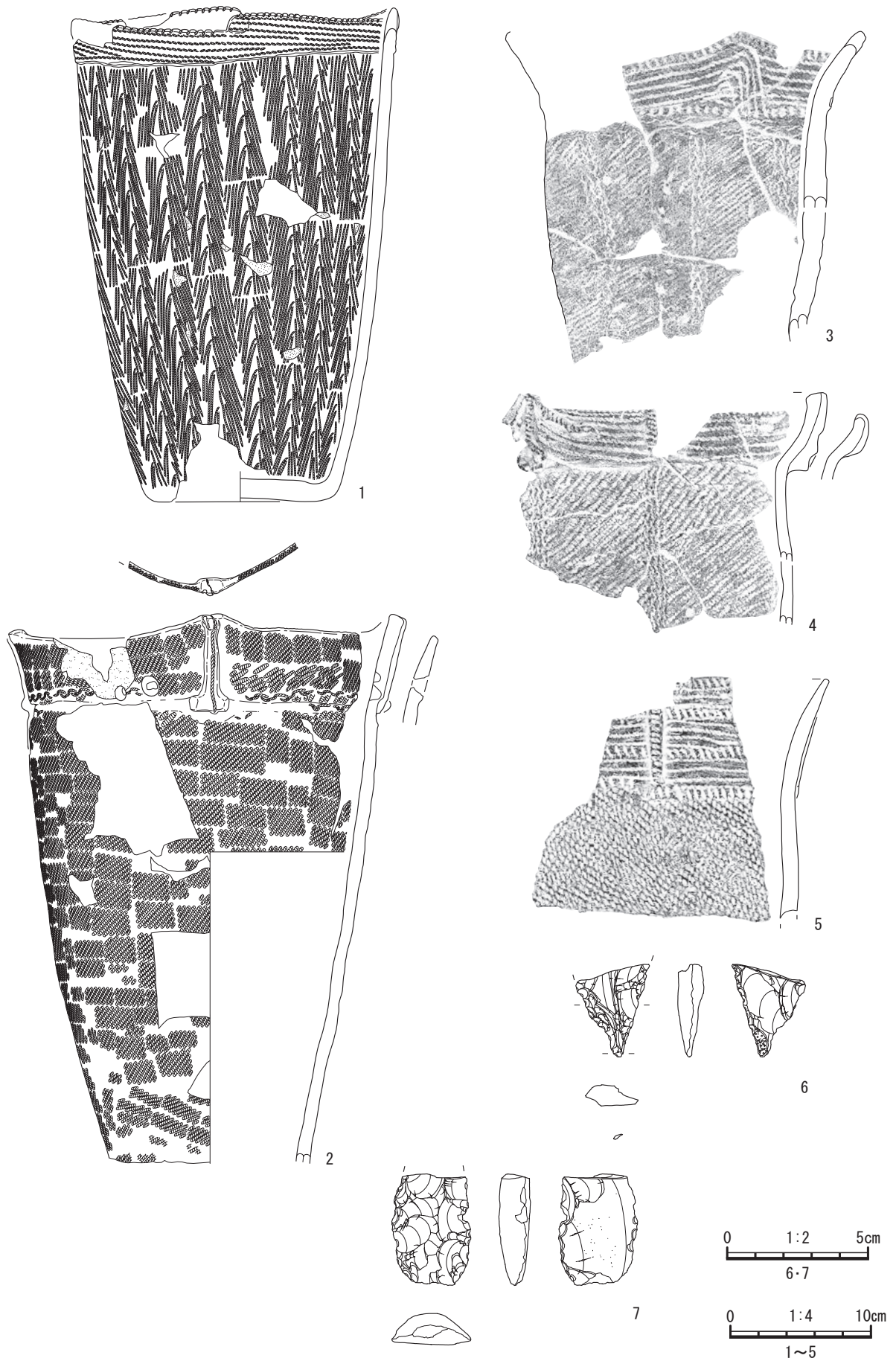


図40 第10号竪穴住居跡出土遺物

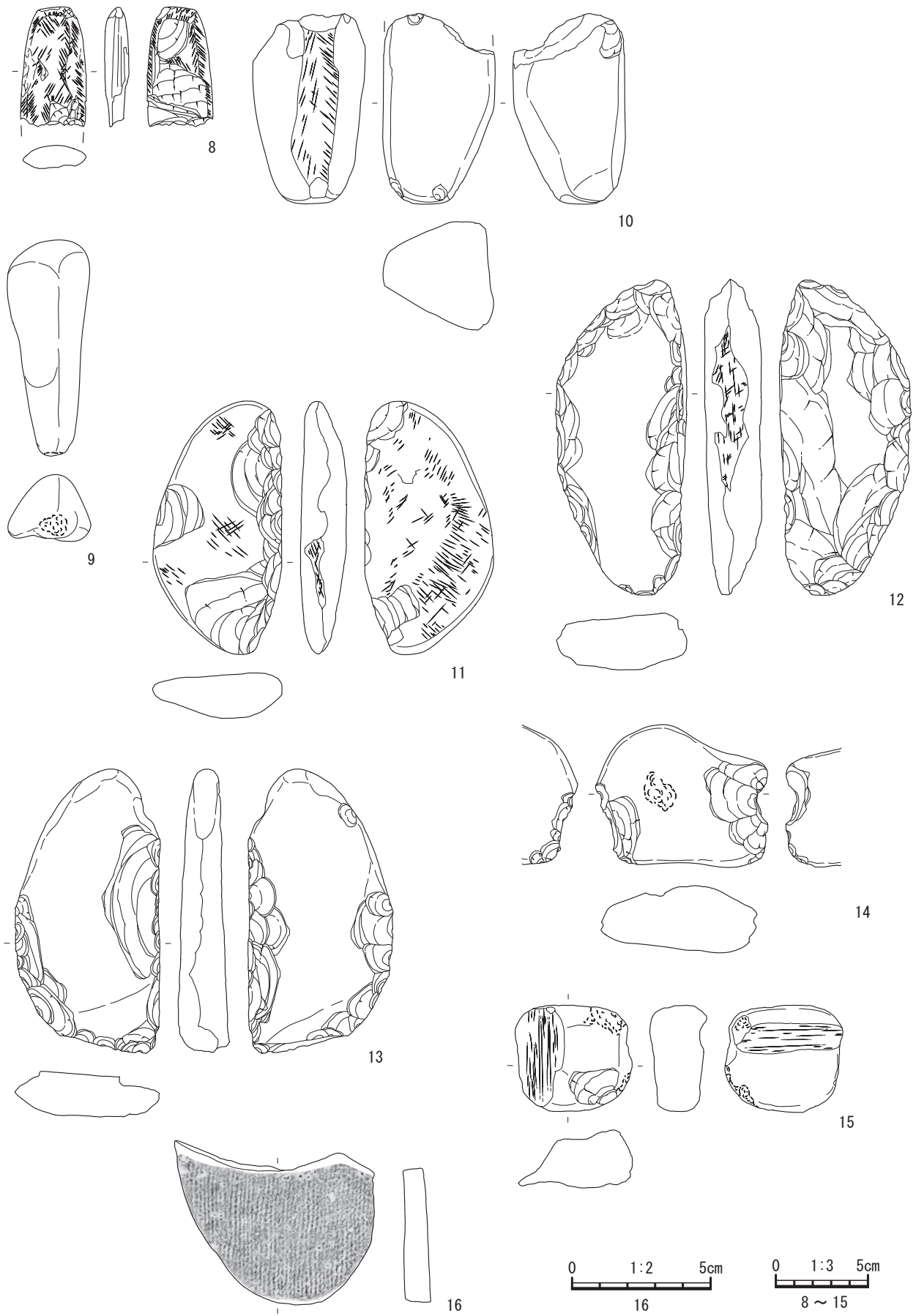
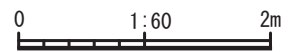
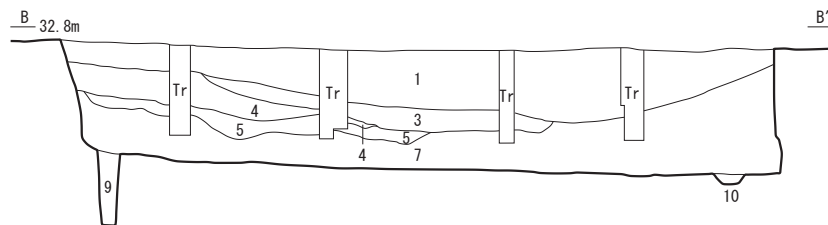
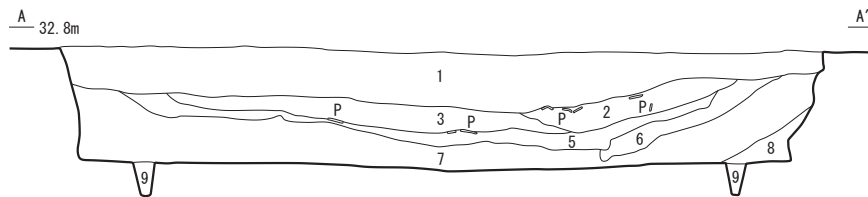
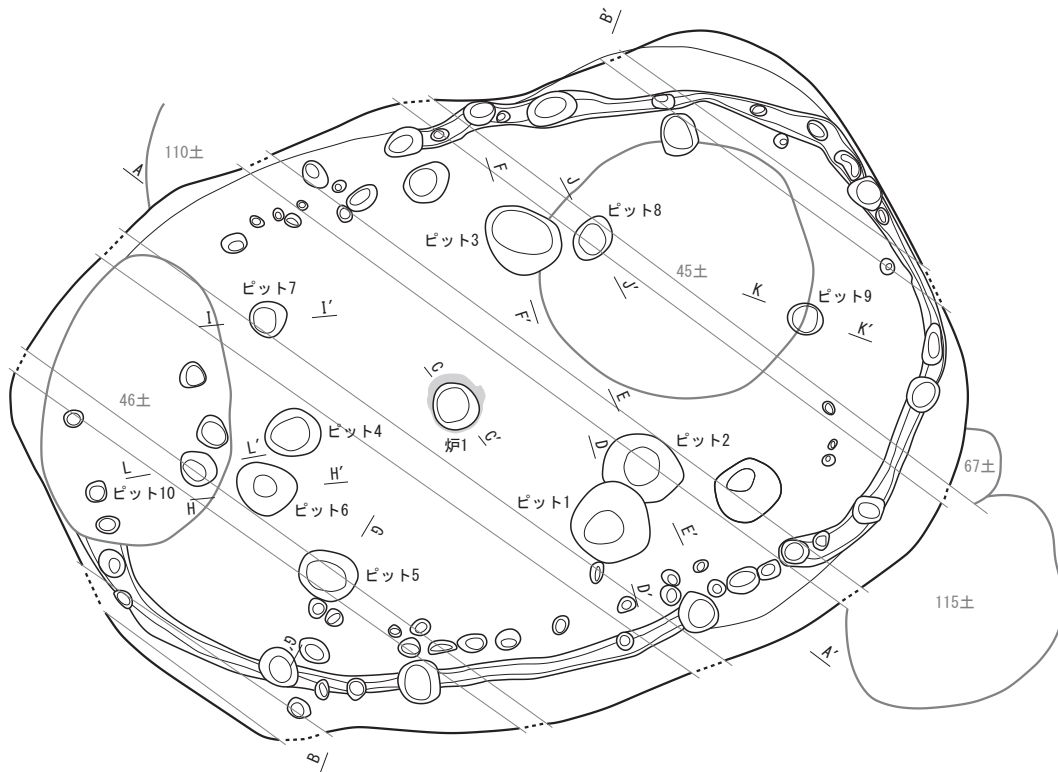


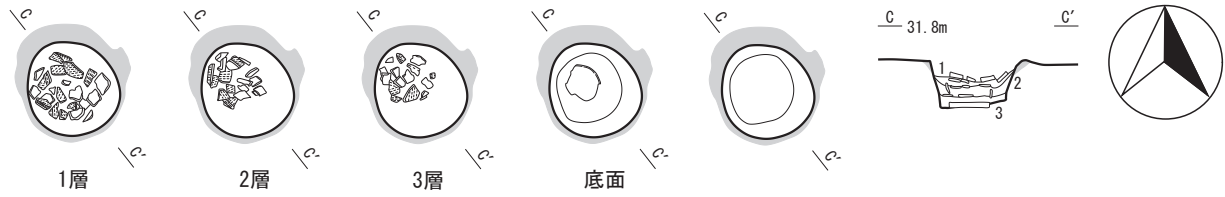
图41 第10号竖穴住居跡出土遺物



A・B土層

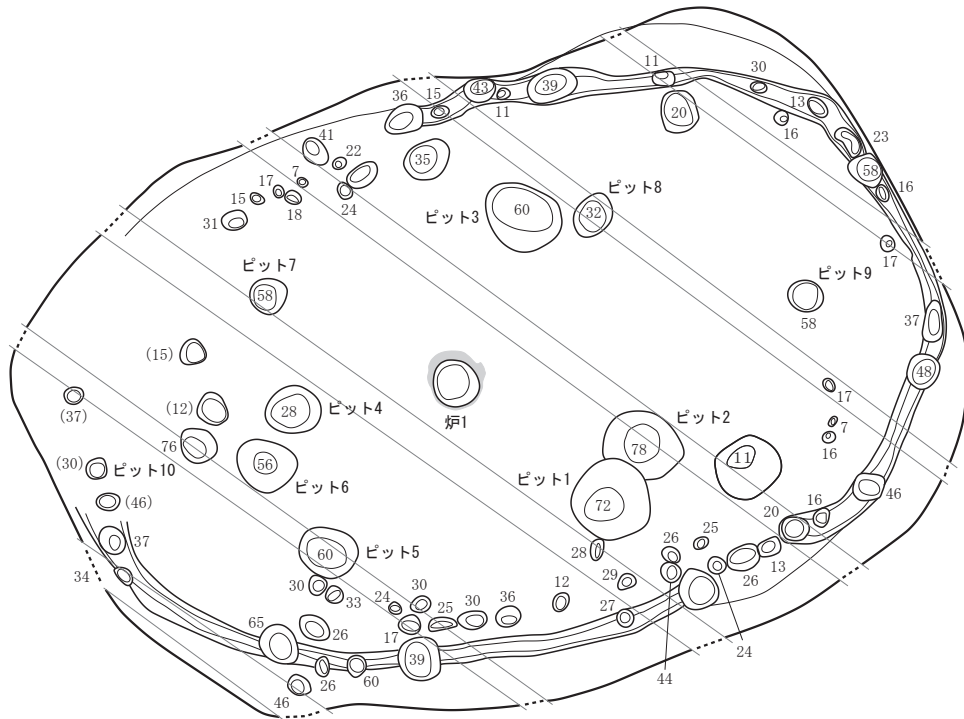
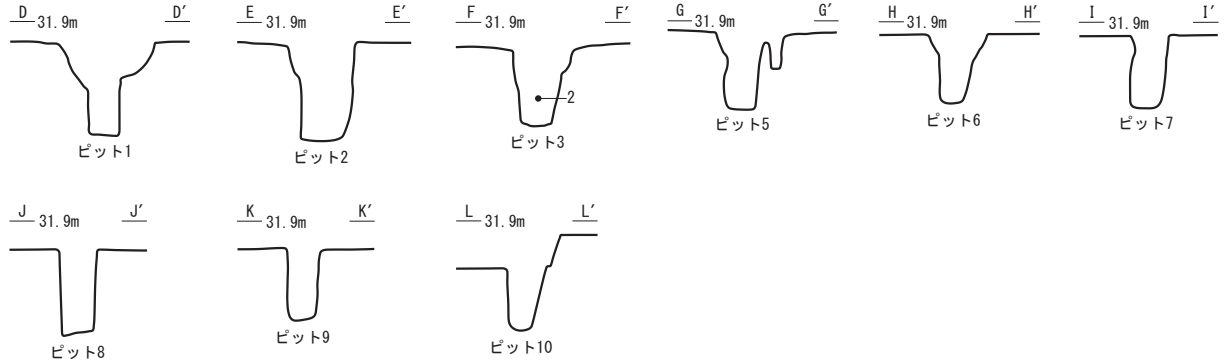
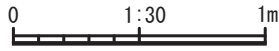
1層	10YR2/1黒色土	10YR3/4暗褐色土20%、千曳軽石5~20mm1%、炭化物5mm1%
2層	10YR2/3黒褐色土	千曳軽石1~5mm1%、炭化物5~30mm1%
3層	10YR7/8黄橙色土	10YR4/4褐色土20%、千曳軽石5~40mm2%
4層	10YR5/6黄褐色土	10YR4/3にぶい黄褐色土10%、5YR6/6橙色土1%、炭化物1~5mm1%
5層	10YR3/2黒褐色土	10YR4/4褐色土5%、10YR8/1灰白色粘土1%、炭化物5~30mm2%
6層	10YR3/4暗褐色土	10YR4/4褐色土5%、千曳軽石1~5mm1%、炭化物5~10mm1%
7層	10YR4/6褐色土	10YR6/8明黄褐色土2%、5YR3/6明赤褐色土ブロック状1%、千曳軽石1~5mm1%、炭化物5mm1%
8層	10YR4/4褐色土	
9層	10YR5/6黄褐色土	千曳軽石1~5mm1%(ピット)
10層	10YR4/6褐色土	(壁溝)

図42 第11号竪穴住居跡



炉1(C土層)

- 1層 2. 5YR4/6赤褐色焼土 5YR3/1黒褐色土5%、炭化物1~3mm1%
- 2層 2. 5YR6/6橙色焼土 7. 5YR6/8橙色土20%
- 3層 2. 5YR7/6橙色焼土 10YR5/6黄褐色土30%、10YR3/4暗褐色土10%



ピット計測値

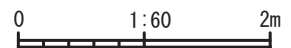
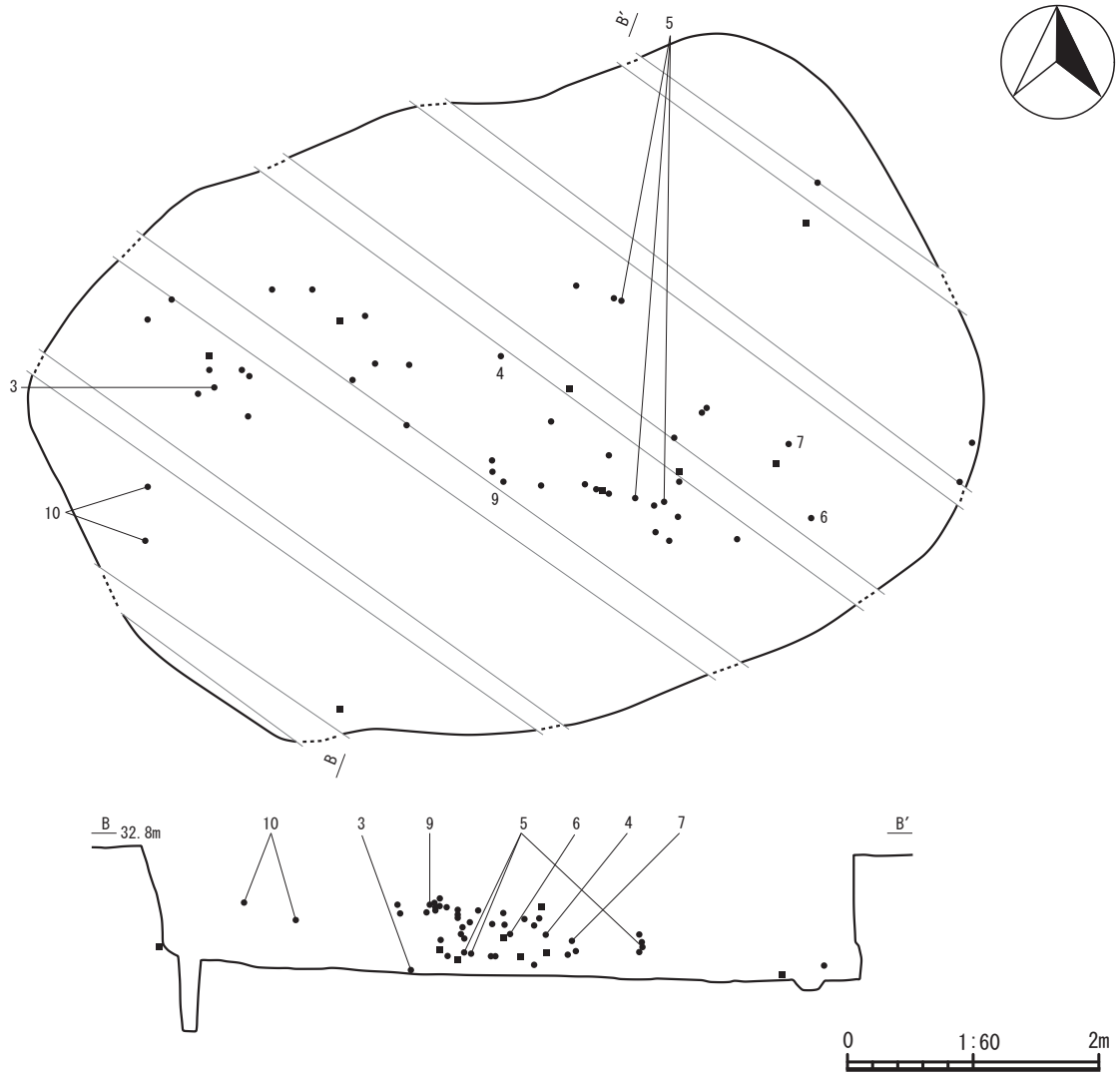


図43 第11号竪穴住居跡



遺物出土状況

図44 第11号竪穴住居跡

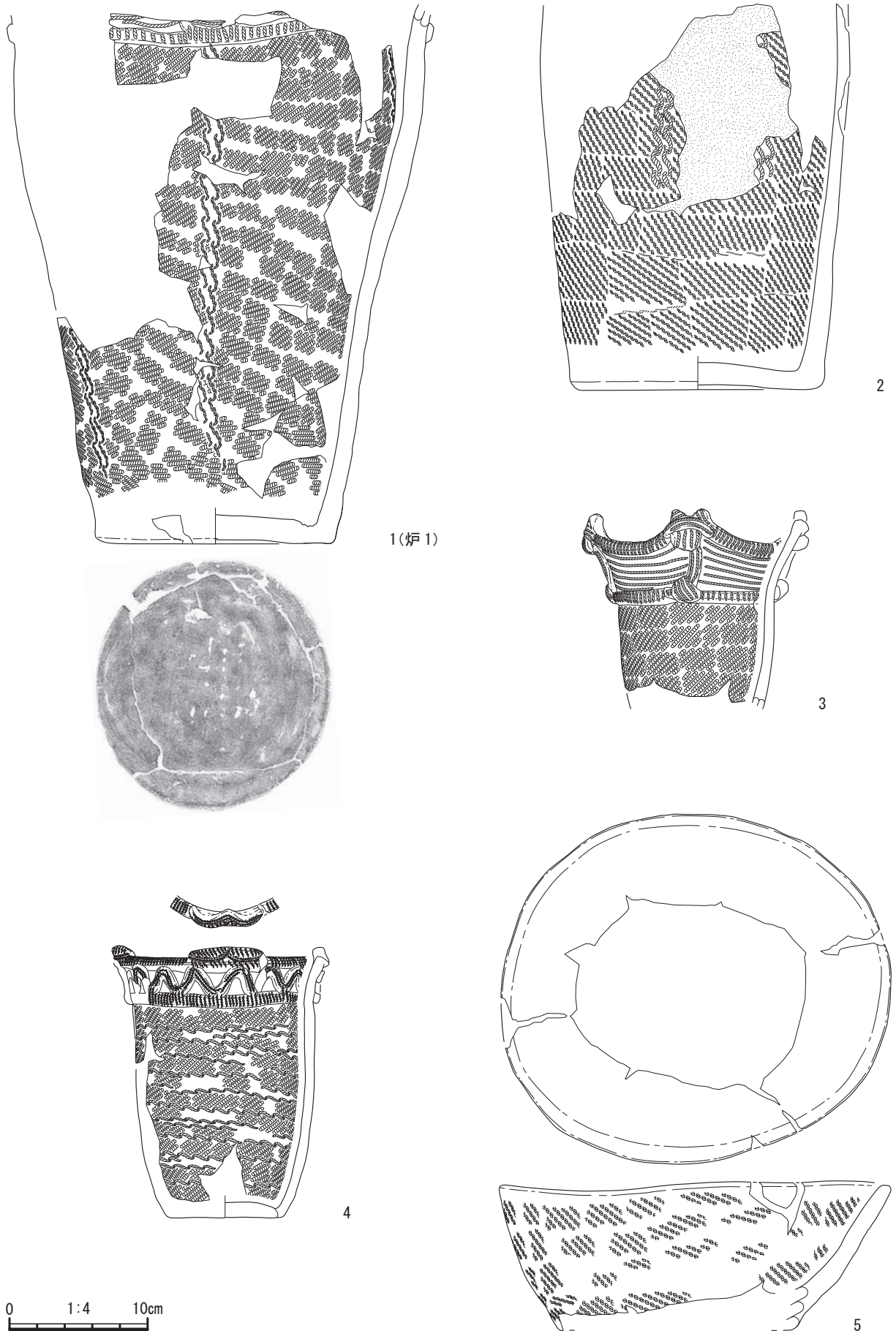


图 45 第 11 号竖穴住居跡出土遺物

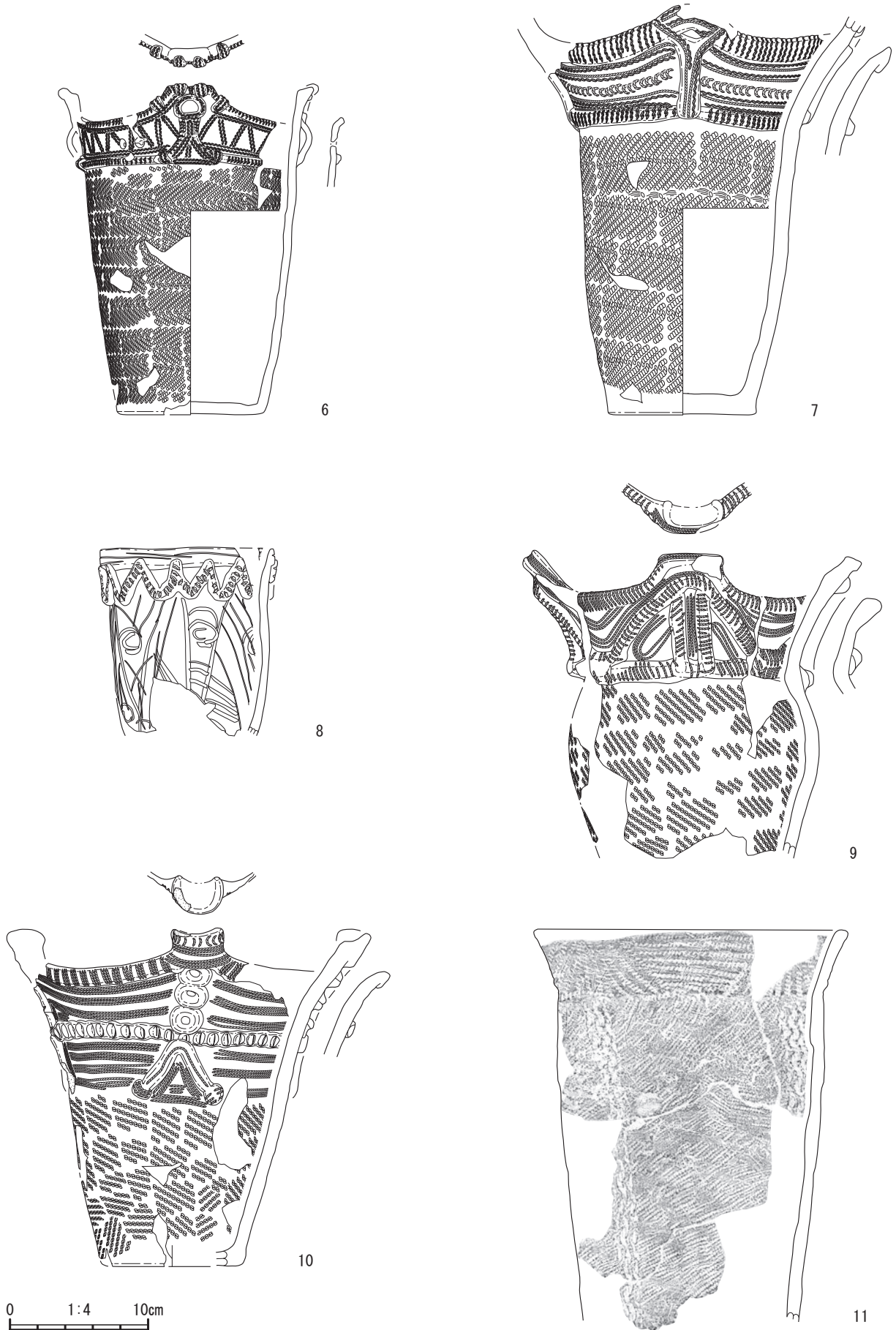


图46 第11号竖穴住居跡出土遺物

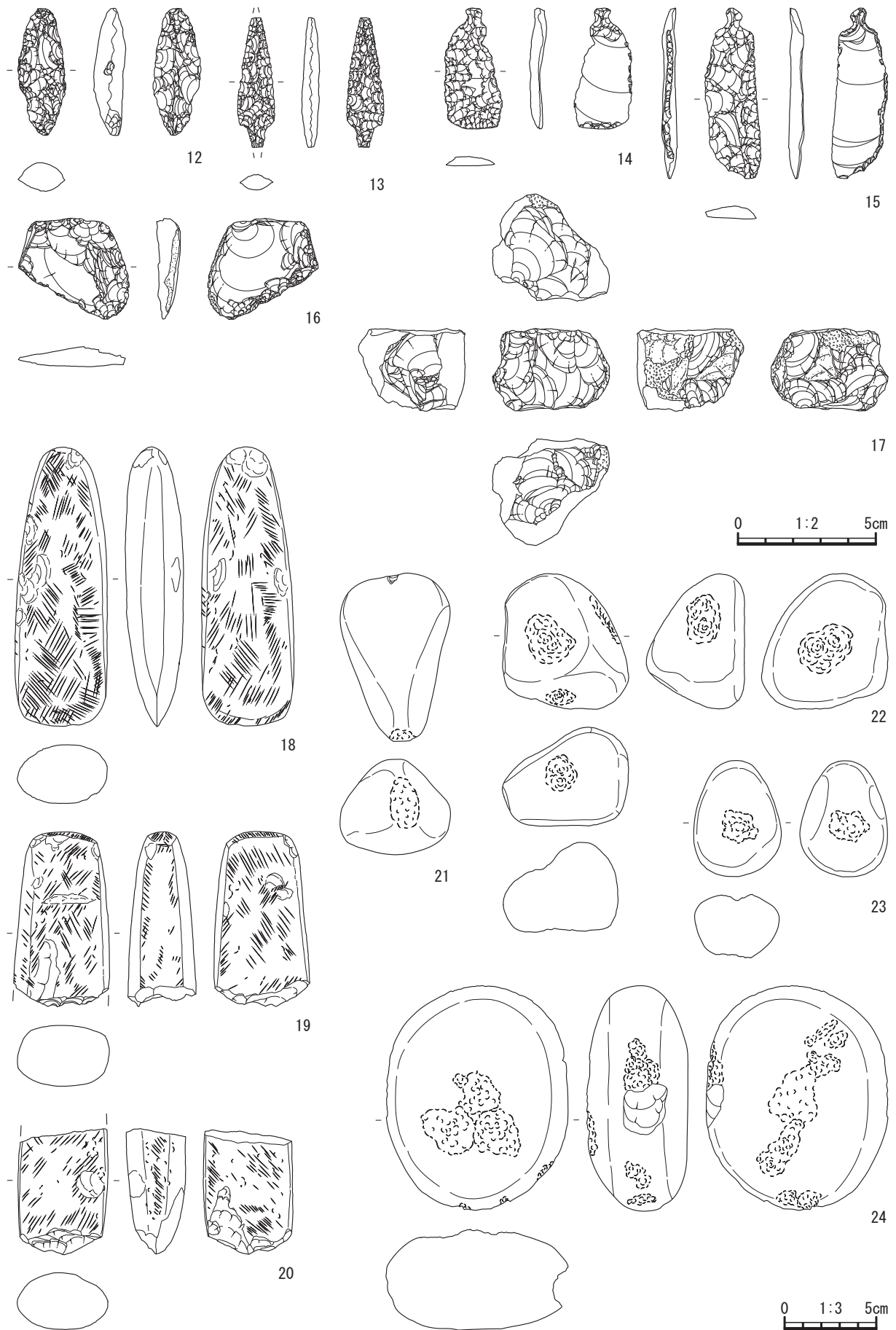


图 47 第 11 号竖穴住居跡出土遺物

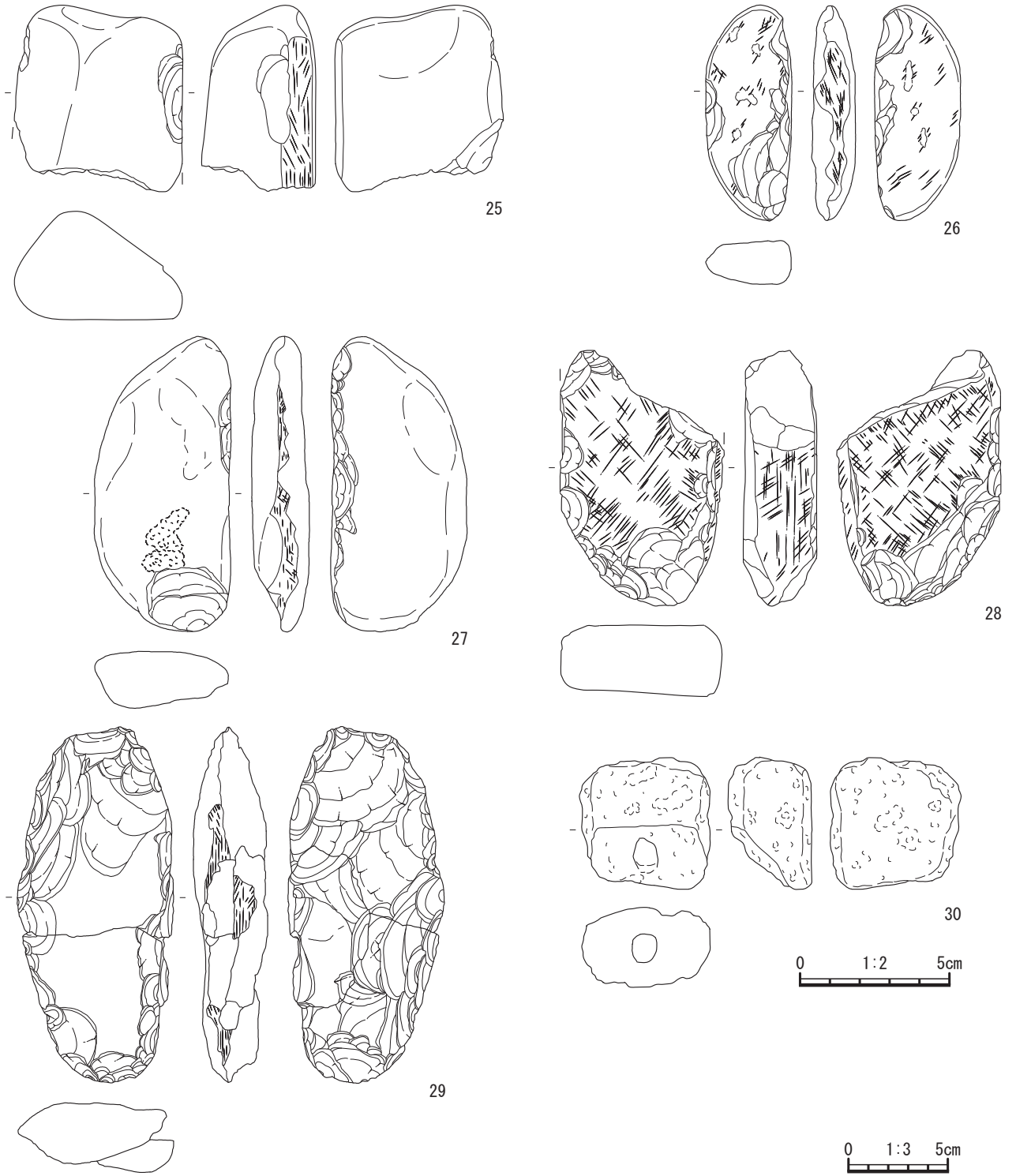


图 48 第 11 号竖穴住居跡出土遺物

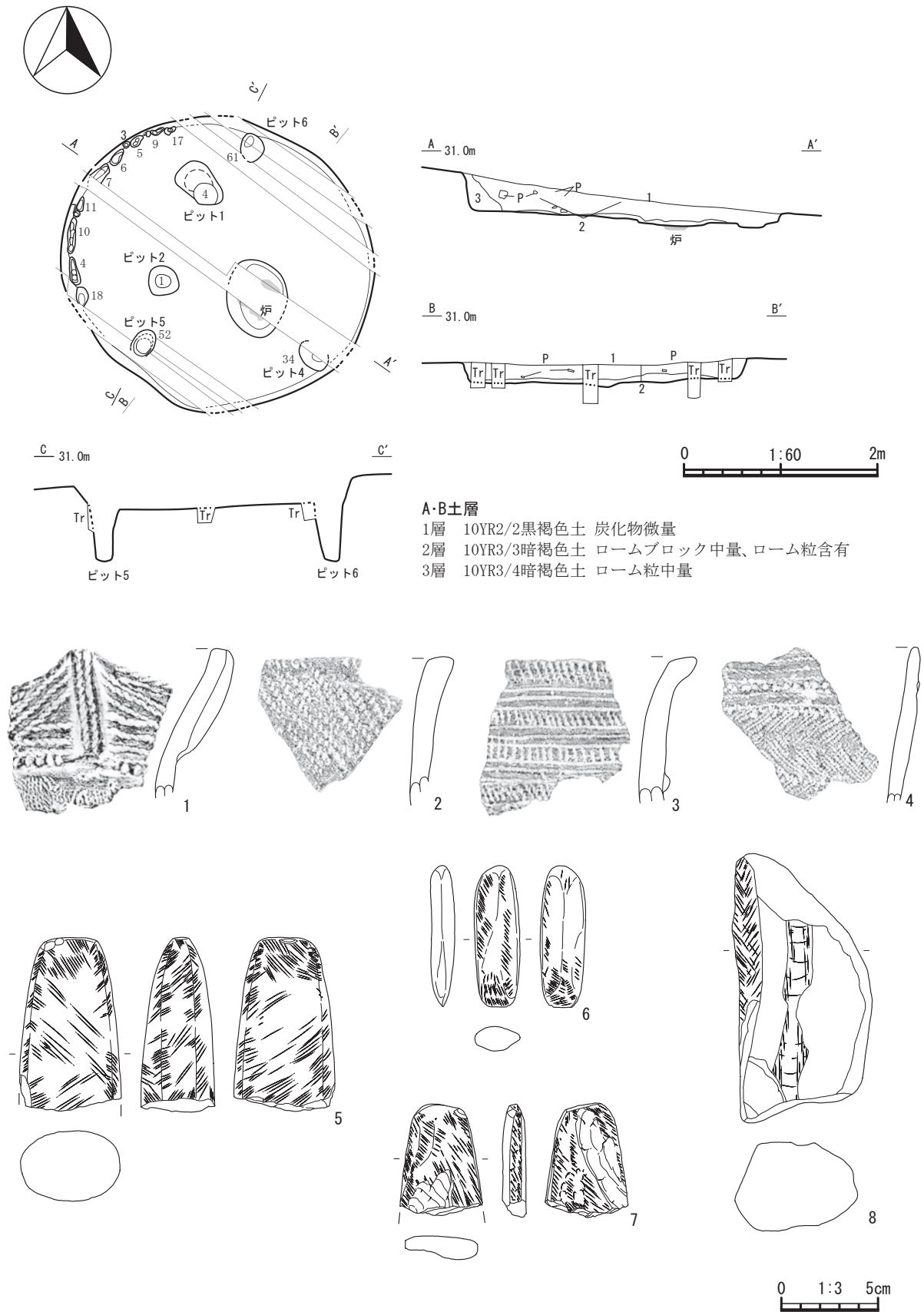


図49 第12号竪穴住居跡

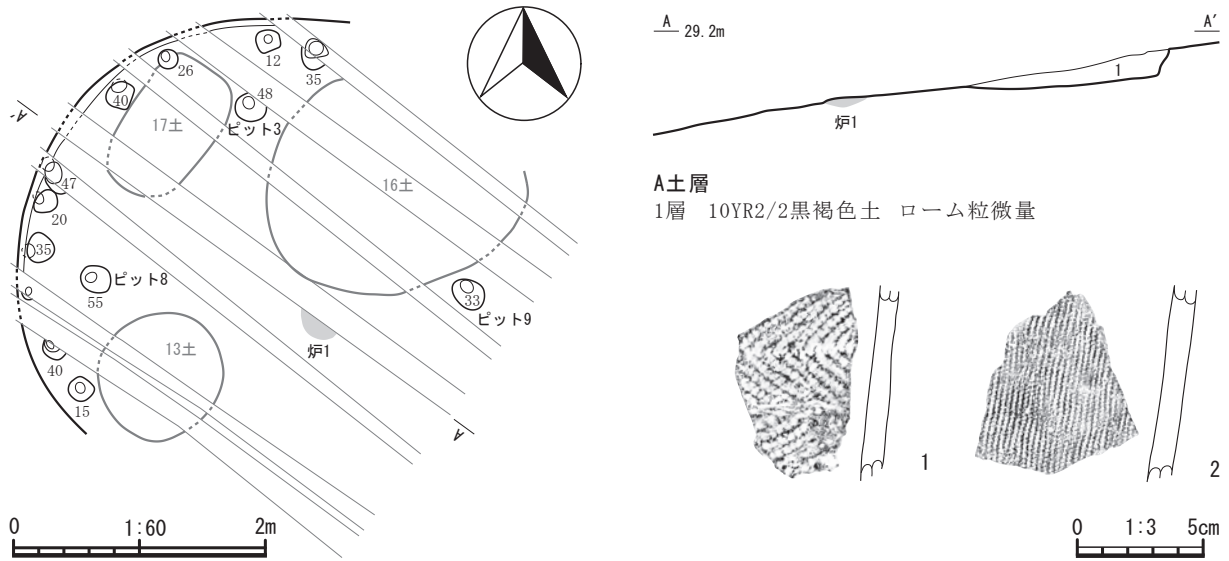


図50 第13号竪穴住居跡

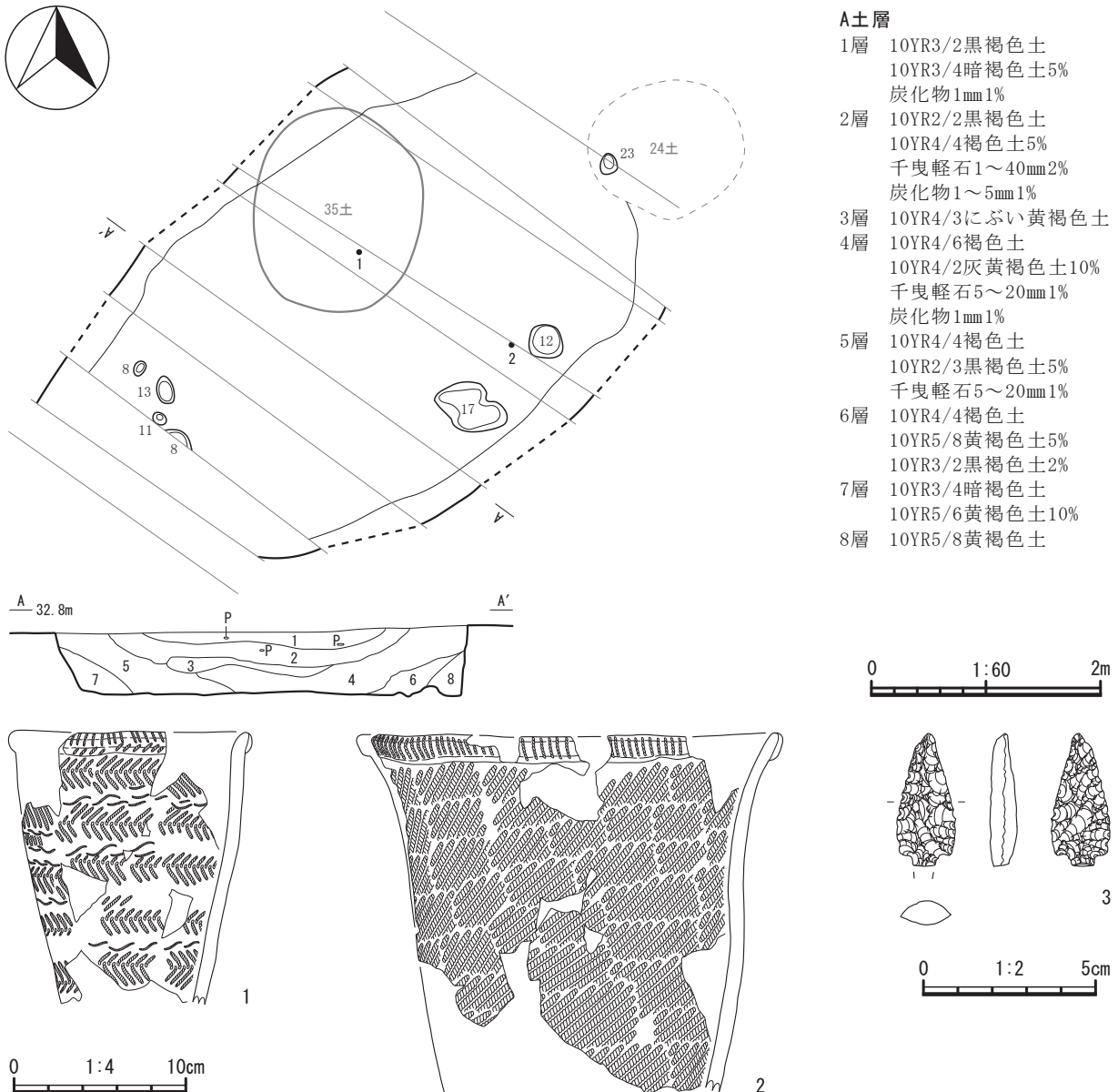
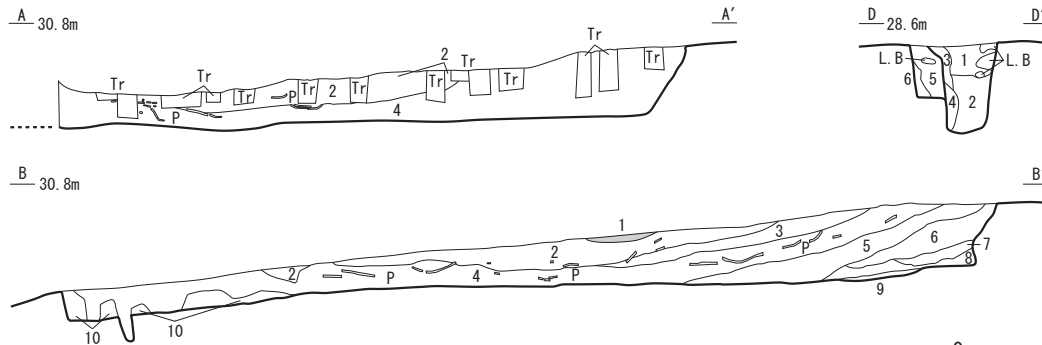
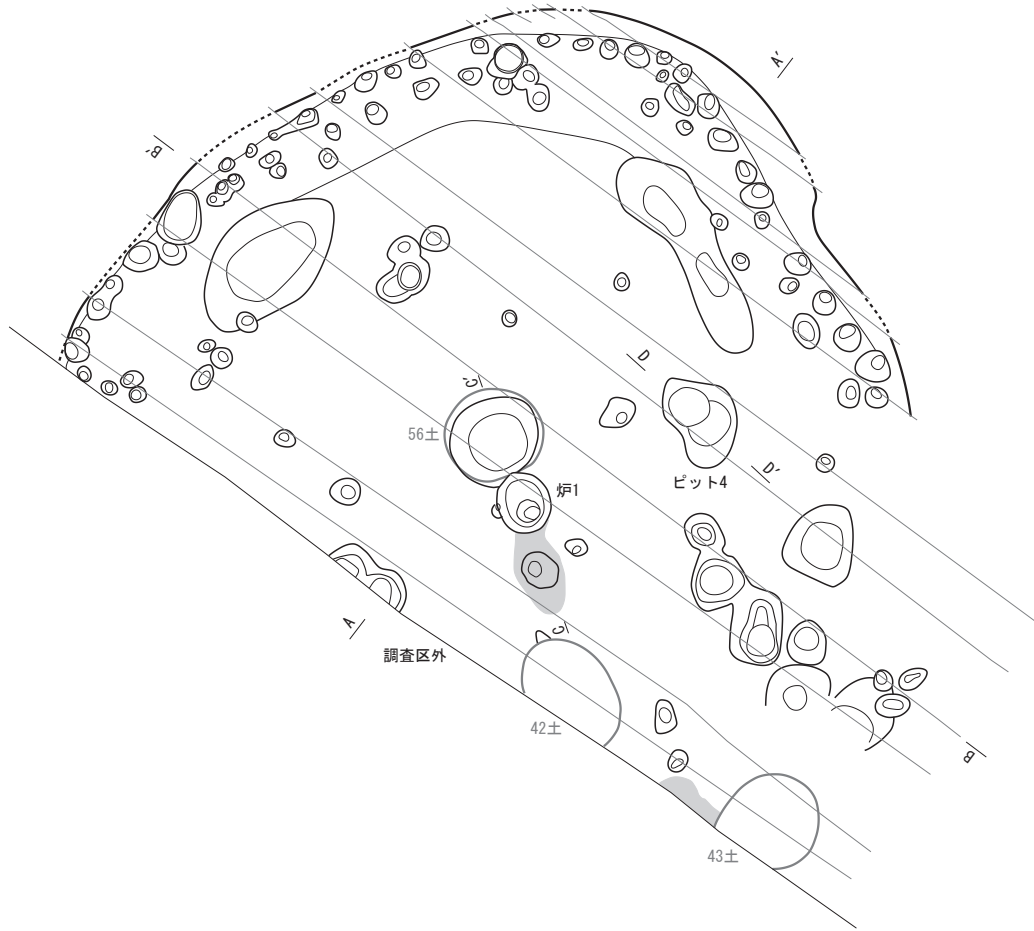


図51 第14号竪穴住居跡



A・B土層

- 1層 5YR3/2暗赤褐色焼土
- 2層 10YR2/1黒色土
- 3層 10YR4/3にぶい黄褐色土
- 4層 10YR3/4暗褐色土 焼土塊含有、土器多量
- 5層 10YR4/4褐色土
- 6層 10YR5/6黄褐色土
- 7層 10YR6/8明黄褐色土
- 8層 10YR4/6褐色土

- 9層 10YR5/4にぶい黄褐色土
- 10層 10YR7/8黄橙色土

ピット4(D土層)

- 1層 10YR3/4暗褐色土 ローム粒多量
- 2層 10YR4/4褐色土
- 3層 10YR5/6黄褐色土
- 4層 10YR4/6褐色土
- 5層 10YR4/6褐色土
- 6層 10YR5/6黄褐色土

図52 第15号竪穴住居跡

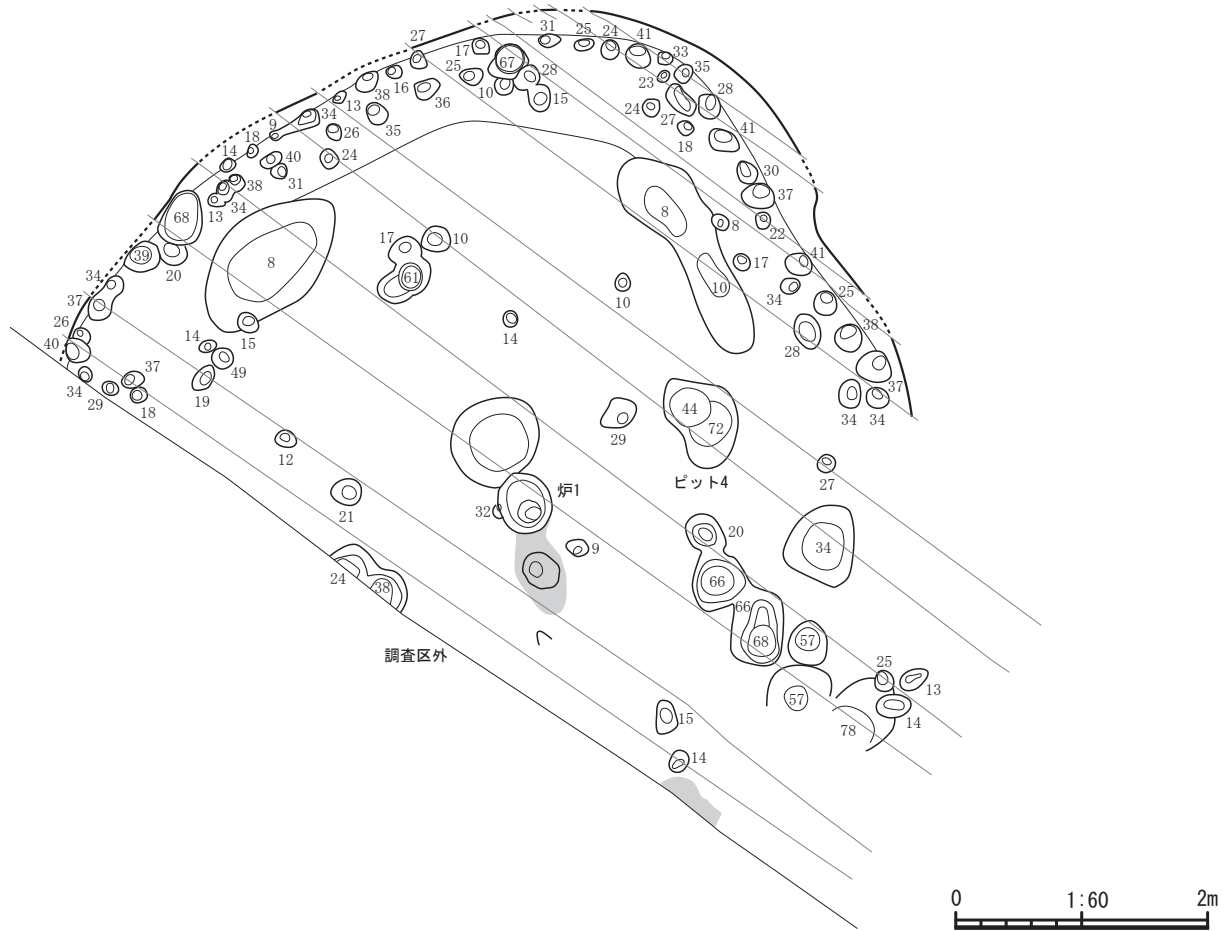
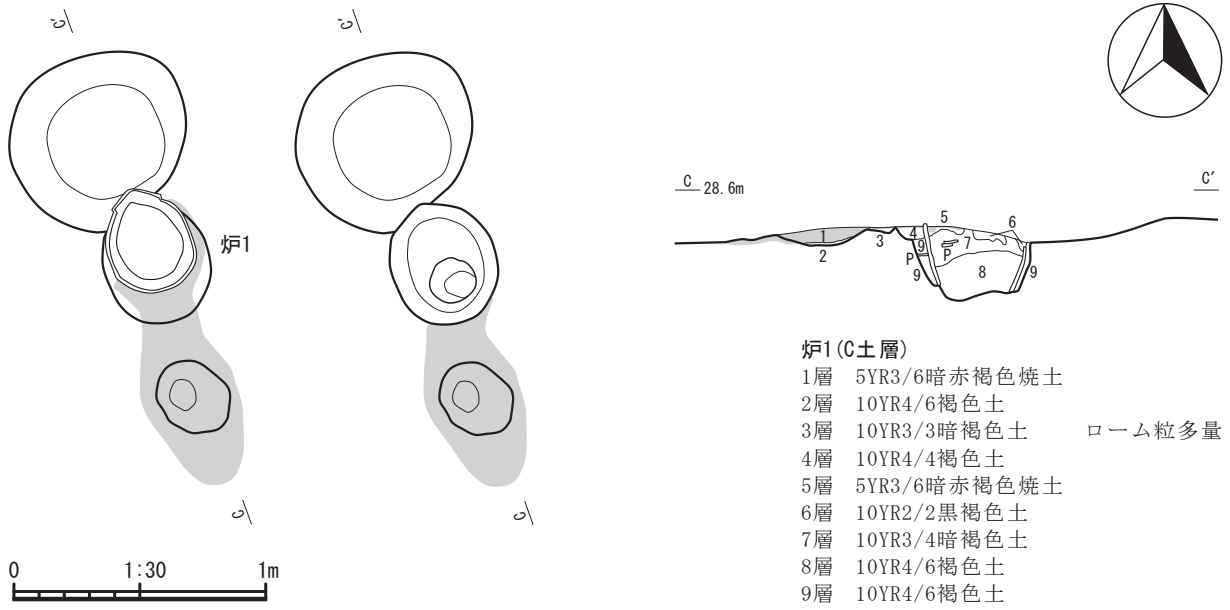


図53 第15号竪穴住居跡

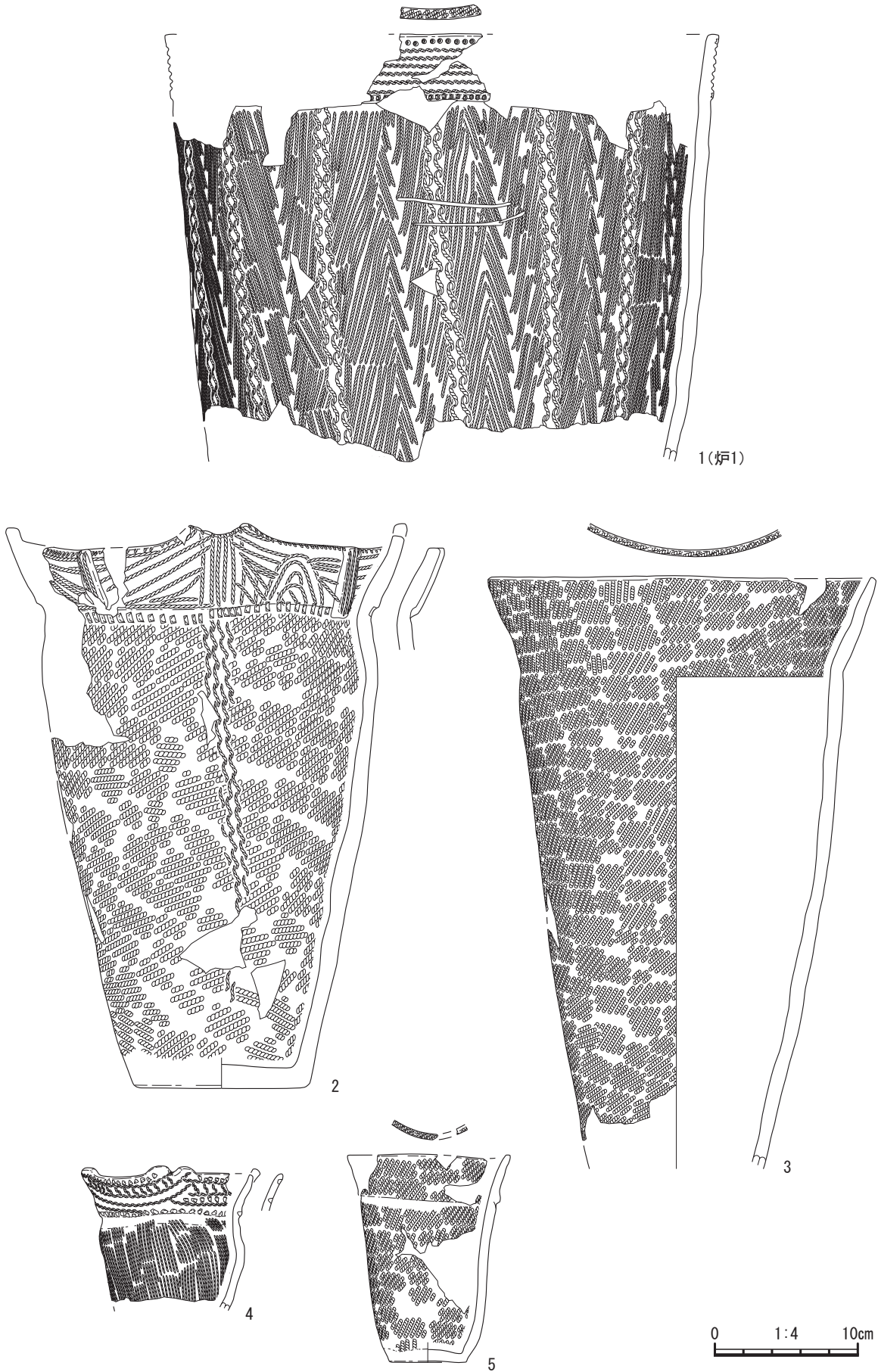


图54 第15号竖穴住居跡出土遺物

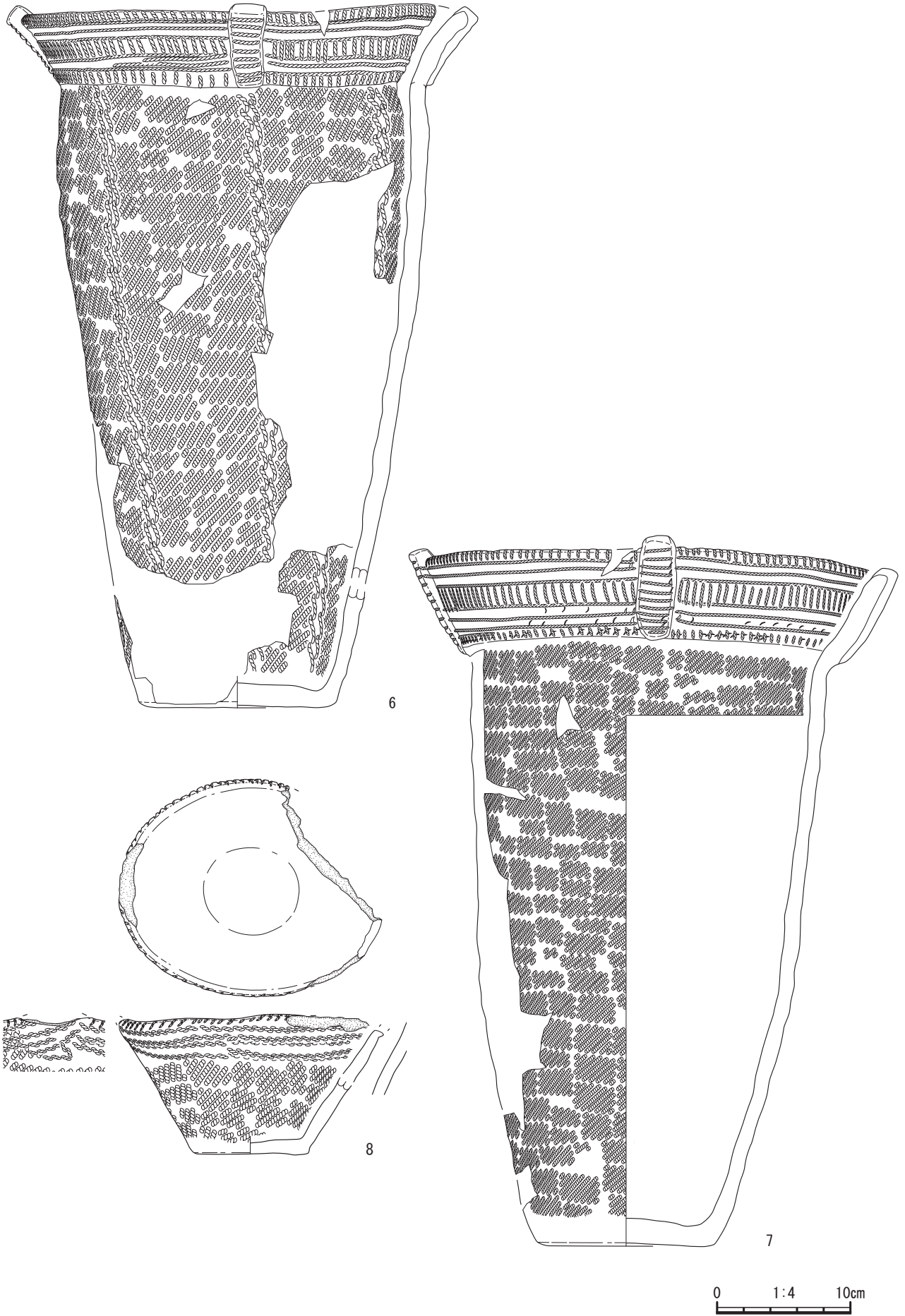


图55 第15号竖穴住居跡出土遺物

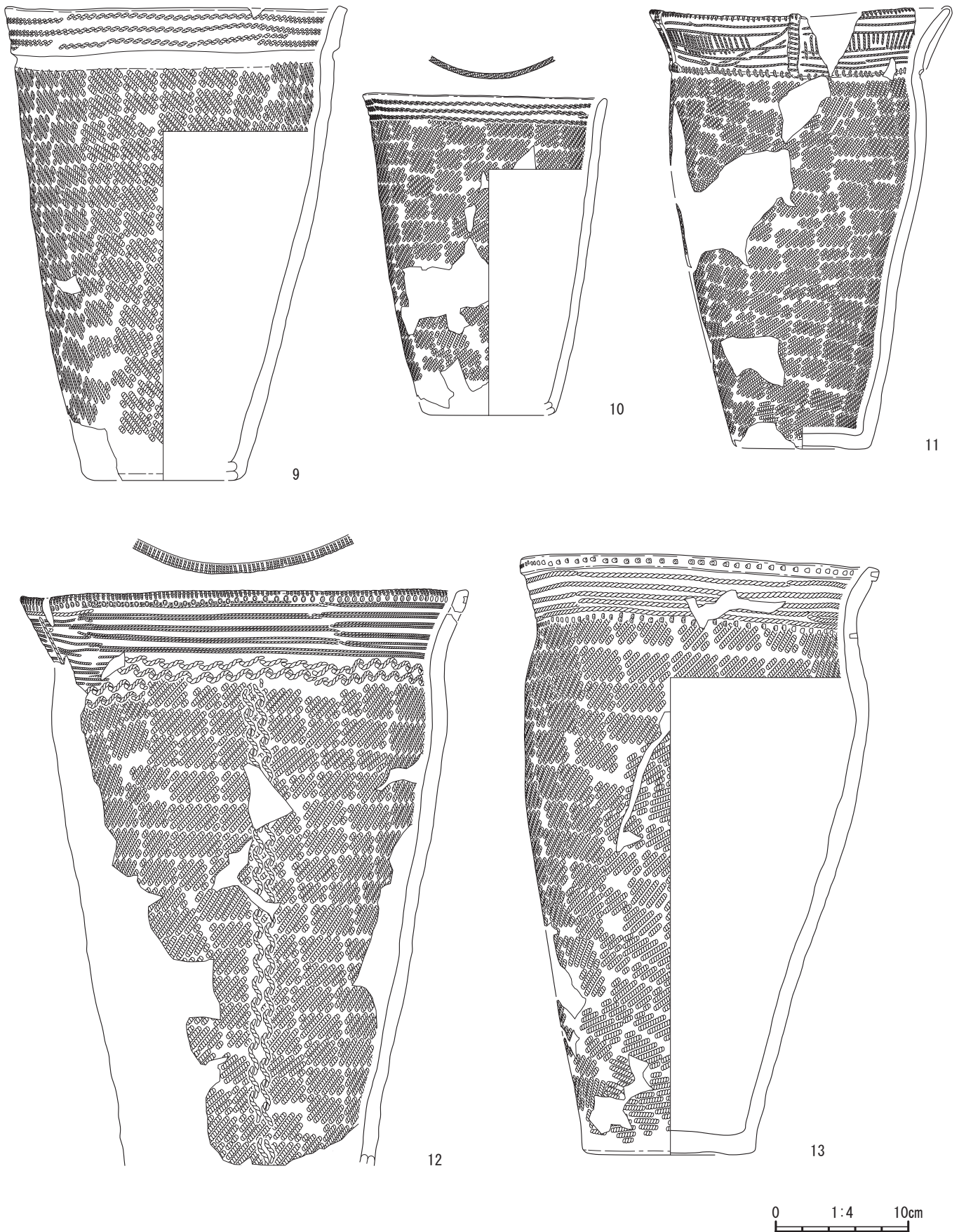
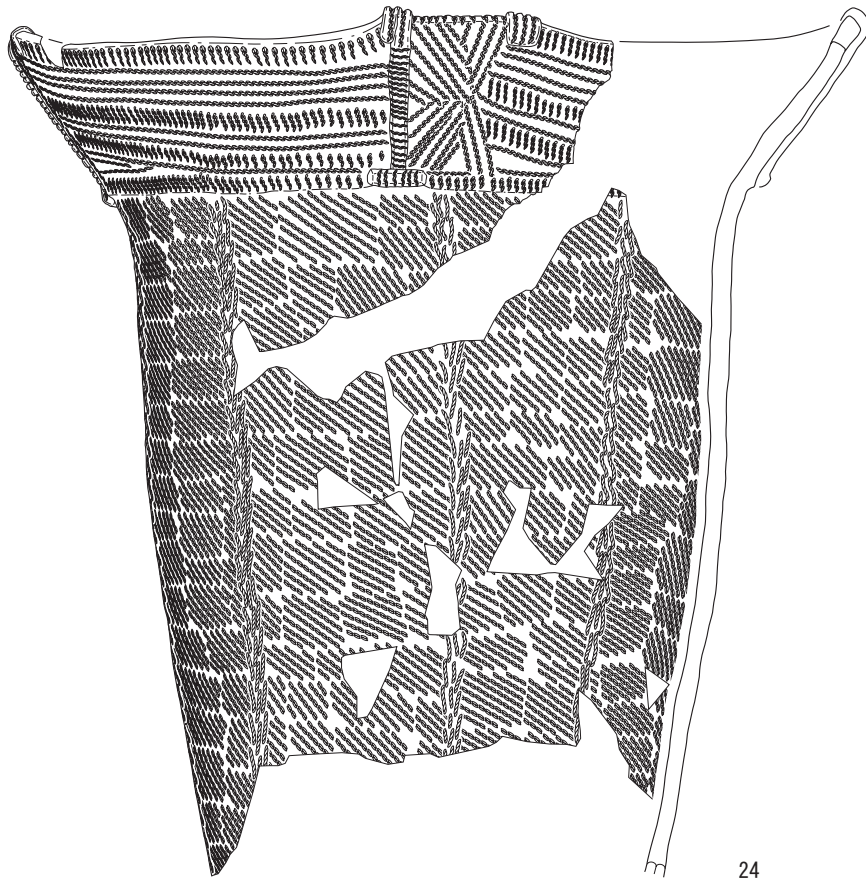
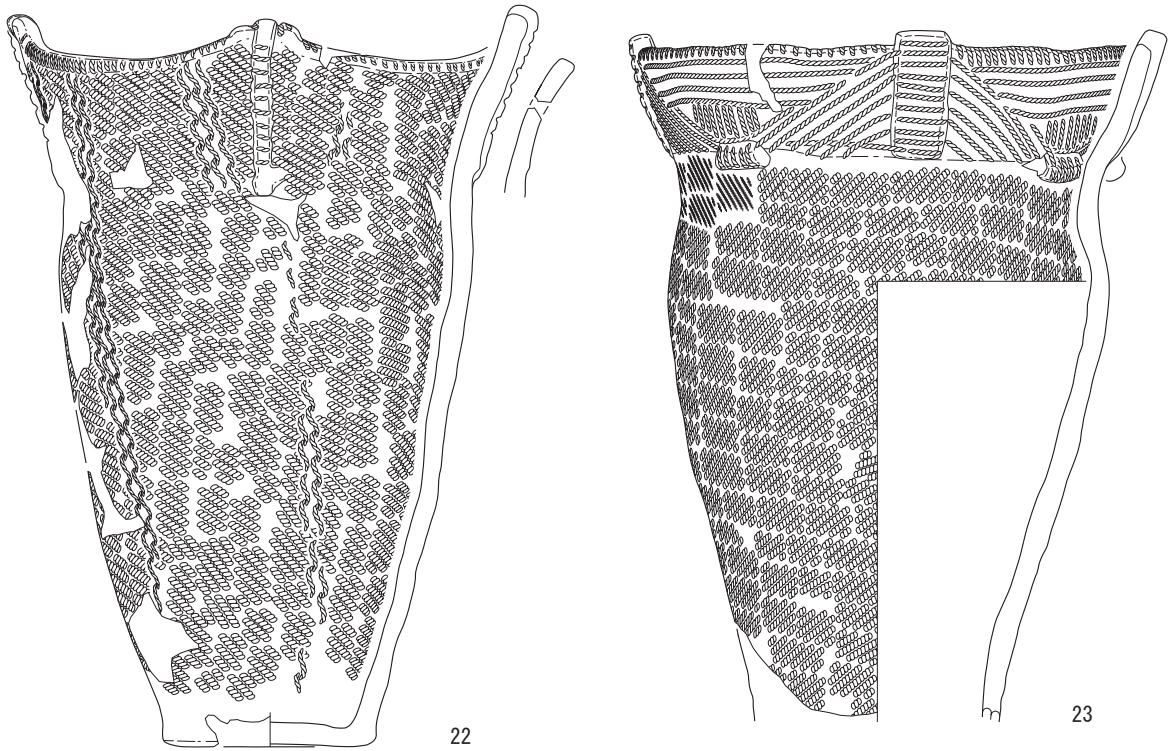


图56 第15号竖穴住居跡出土遺物



图57 第15号竖穴住居跡出土遺物



0 1:4 10cm

图58 第15号竖穴住居跡出土遺物

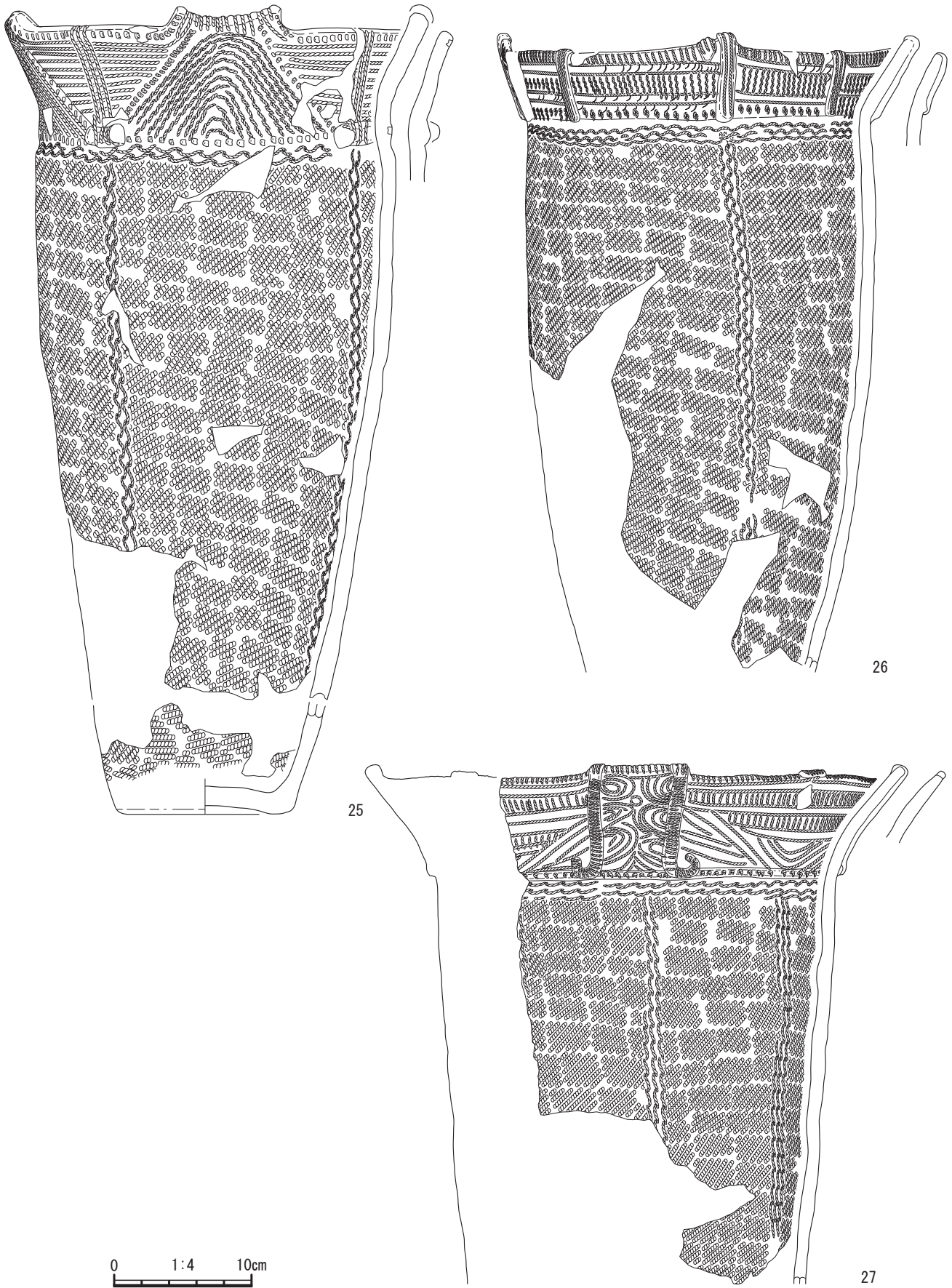


图59 第15号竖穴住居跡出土遺物



图60 第15号竖穴住居跡出土遺物

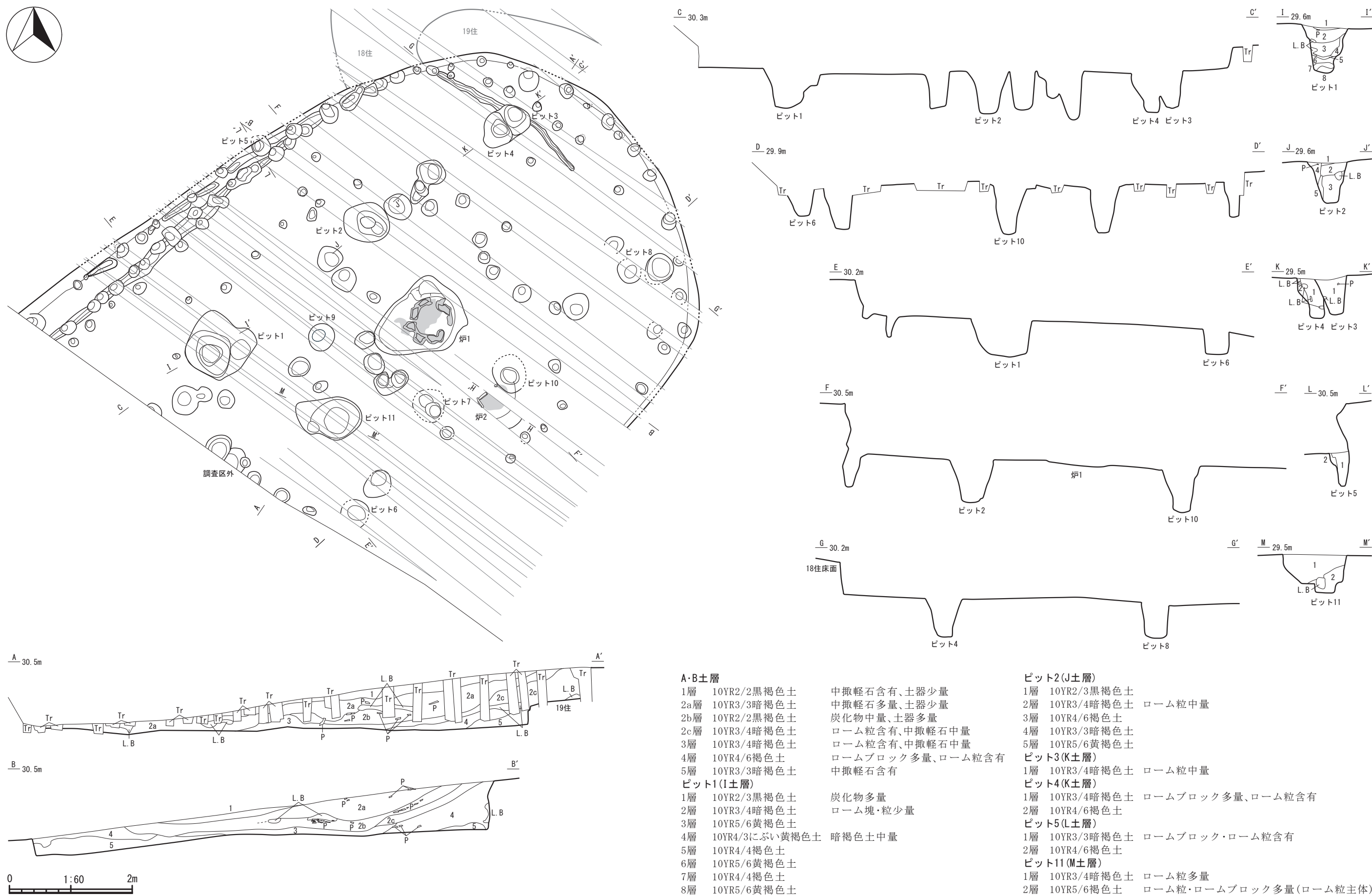
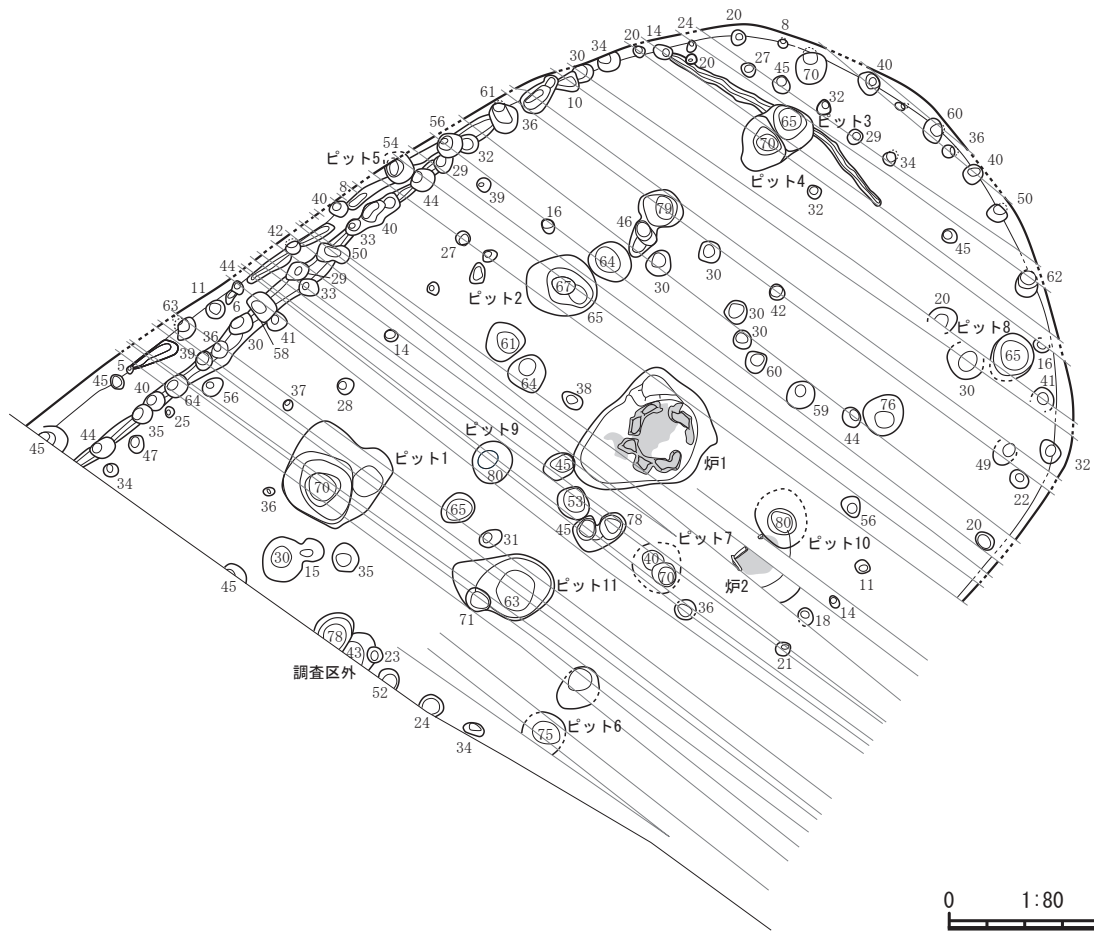
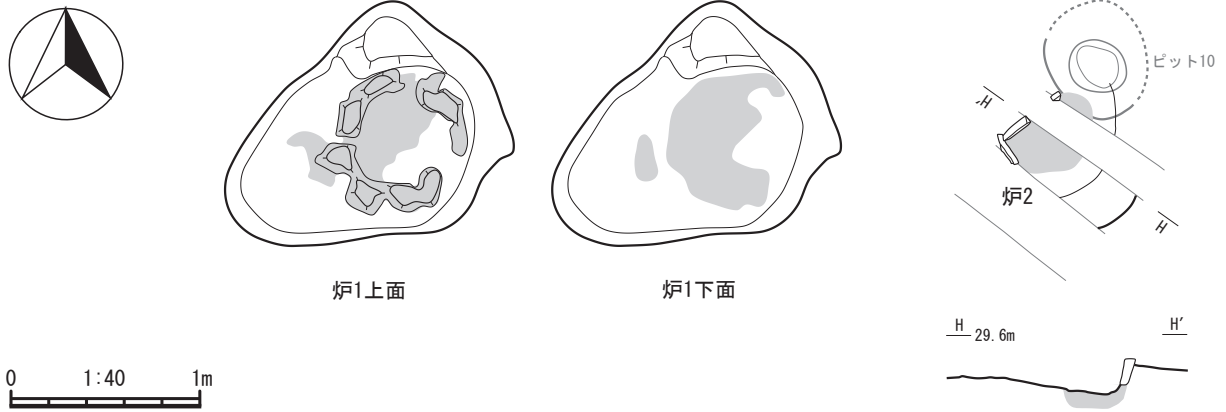


図61 第16号竪穴住居跡



ピット計測値

図62 第16号竪穴住居跡

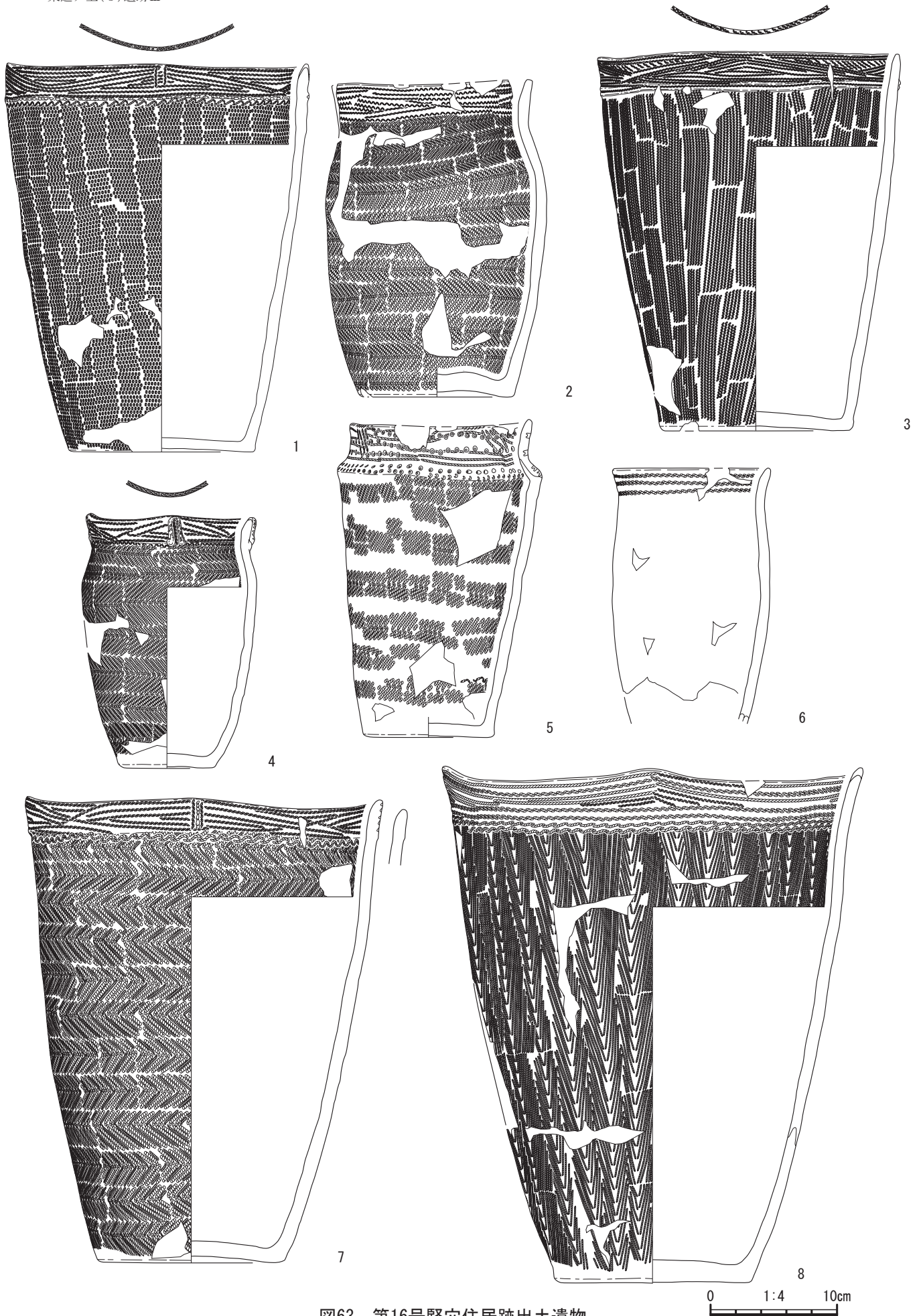


图63 第16号竖穴住居跡出土遺物